赤松中学

緋弾のアリア

絶対半径（キリングレンジ）2051

Aria the Scarlet Ammo

VI

MF文庫 J

あ-05-09

緋弾のアリアVI

赤松中学

ISBN978-4-8401-3281-7
C0193 ¥580E

9784840132817

1920193005806

定価：本体580円（税別）

メディアファクトリー

MEDIA FACTORY

緋弾のアリアVI　絶対半径（キリングレンジ）2051

東京武偵高校、そこは武力を行使する探偵――通称『武偵』を育成する特殊な学校。強襲科の超エリートでSランクの最強武偵・アリアのパートナーに選ばれてしまった（普段は）ただの一般人・遠山キンジに、Sランクの天才狙撃手・レキが勝負を挑んできた。圧倒的な力の差を見せつけてキンジを打ち負かしたレキは、キンジと一緒に暮らすことを強引に決めてしまう。一方、パートナーを取られたアリアとキンジの間には壁が生じてしまい……。 そしてチーム編成を決めるための『修学旅行（キャラバン・ワン）I』が始まる。はたしてレキの真意は――!?　大スケールアクション＆ラブコメディー第６弾!!

MF文庫 J

大ヒット
武装探偵学園
アクションが堂々の

TVアニメ化決定!!

TVアニメ化

コミックス1巻も同時発売!!

TVアニメ化決定記念キャンペーン開催!

4月23日発売のコミックス1巻と文庫6巻を購入の方に抽選で「等身大立て看板・制服のアリア」か「ハンドタオル・水着のアリア」をプレゼント!!

A賞 3名
等身大立て看板
制服のアリア

B賞 200名
ハンドタオル
水着のアリア

応募方法

MF文庫J「緋弾のアリアVI」とコミックス「緋弾のアリア①」のオビについている応募券それぞれ1枚ずつ合計2枚を官製ハガキに貼り、必要事項を明記の上、折り返しの宛先までご応募ください。

※画像はすべてイメージです。

赤松中学

緋弾のアリア

絶対半径（キリングレンジ）2051

Aria the Scarlet Ammo

VI

MF文庫 J
あ-05-09

緋弾のアリアVI
赤松中学

580

ISBN978-4-8401-3281-7
C0193 ¥580E

9784840132817

1920193005806

定価：本体580円（税別）
メディアファクトリー
MEDIA FACTORY

緋弾のアリアVI　絶対半径（キリングレンジ）2051

東京武偵高校、そこは武力を行使する探偵――通称『武偵』を育成する特殊な学校。強襲科の超エリートでSランクの最強武偵・アリアのパートナーに選ばれてしまった（普段は）ただの一般人・遠山キンジに、Sランクの天才狙撃手・レキが勝負を挑んできた。圧倒的な力の差を見せつけてキンジを打ち負かしたレキは、キンジと一緒に暮らすことを強引に決めてしまう。一方、パートナーを取られたアリアとキンジの間には壁が生じてしまい……。 そしてチーム編成を決めるための『修学旅行（キャラバン・ワン）I』が始まる。はたしてレキの真意は――!?　大スケールアクション＆ラブコメディー第６弾!!

MF文庫J

赤松中学の本

アストロノト！ 1〜3 [イラスト：bomi]

緋弾のアリア [イラスト：こぶいち]

緋弾のアリアⅡ 燃える銀氷
[イラスト：こぶいち]

緋弾のアリアⅢ 蜂蜜色の罠
[イラスト：こぶいち]

緋弾のアリアⅣ 堕ちた緋弾
[イラスト：こぶいち]

緋弾のアリアⅤ 序曲の終止線
[イラスト：こぶいち]

緋弾のアリアⅥ 絶対半径2051
[イラスト：こぶいち]

【著者】

赤松中学
あかまつ・ちゅうがく

生年月日、年齢、出身地、現住所に至るまで全てが不明の覆面作家。『アストロノト！』で第3回MF文庫Jライトノベル新人賞優秀賞を受賞。本作・武装学園小説『緋弾のアリア』は、同作家の2シリーズ目となる。

【イラストレーター】

こぶいち

ゆずソフト所属の原画担当。
代表作は『ぶらばん！』『E×E』『夏空カナタ』『天神乱漫』。
小説では『これはゾンビですか？』（富士見書房）の挿絵を担当。
趣味はゲーム、読書。
ゲームはもっぱら携帯ゲームばかりをプレイ中。
http://tyatsune.blog87.fc2.com/

カバーイラスト／こぶいち　装丁／百足屋ユウコ（ムシカゴグラフィクス）

緋弾のアリアXI

Aria the Scarlet Ammo

絶対半径（キリングレンジ）2051

赤松中学

P11 1弾 人間狩り（スナイプ）

P60 2弾 水投げ

P120 3弾 修学旅行I（キャラバン・ワン）

P190 4弾 閃光弾・音響弾（フラッシュ・カノン）

P250 Go For The NEXT! 蕾姫

Contents

緋弾のアリアVI
絶対半径2051（キリングレンジ）

赤松中学

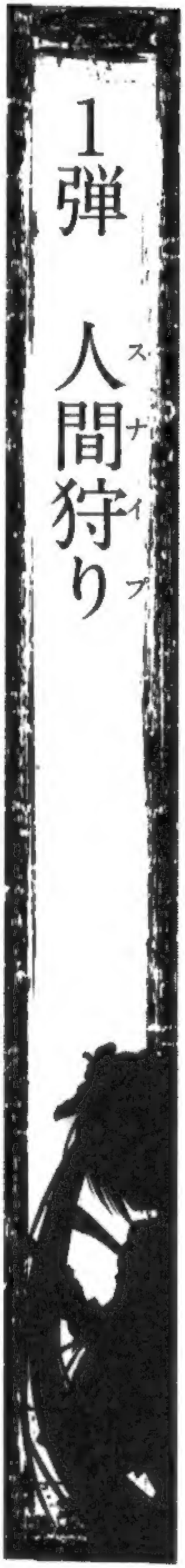
MF文庫J

口絵・本文イラスト●こぶいち

編集●笹尾明正

1弾

人間狩り（スナイプ）



――ドラグノフ狙撃銃（そげきじゅう）。

美しいまでに細身のデザイン。

他のスナイパーライフルを凌駕（りょうが）する、軽量さ。

それでいて耐久性・信頼性にも優れた、世界を代表する名狙撃銃の一つだ。

「ま、待て。待ってくれ」

ドラグノフは射的（しゃてき）だけが取（と）り柄（え）の競技用狙撃銃とは全く違う。

悪環境でも故障せず、セミオート機能で連発ができ、さらには先端に銃剣をつけて槍（やり）のように扱うことだってできる……恐ろしいまでに実・戦・用のスナイパーライフルなのだ。

「何が気に入らないんだ……レキ！」

その銃口が、今、俺（おれ）に向けられている。

向けているのは、狙撃科（スナイプ）の麒麟児（きりんじ）・レキ。

その天才的な狙撃の腕で、Sランク武偵（ぶてい）に格付けされている同級生だ。

「――あなたとアリアさんは、結ばれてはならないのです」

いかにも棒読みな、いつもの喋（しゃべ）り方でレキが答えた。

その背後にはどこか冷たい東京の夜景とやけに大きく見える今夜の月が輝いている。
その光景に得体の知れない不安感を煽(あお)られながら……
「結ばれて……って？」
妙な事を言われた俺(おれ)は、少し赤くなって口ごもる。
さっき、俺とアリアは――
探偵科(インケスタ)の掃除を終えてから、この屋上にいた。夕焼けの中。２人っきりで。
見ようによっては、親密な男女が語り合っているような光景だったかもしれない。
だが、どうして俺とアリアがそう見えるんだ!?
「バ……バカなことを言わないでくれ。俺とレキが銃を出してくるんじゃない。むしろその逆で、さっきは……その、これから……離れればなれになる話をしてたんだ。俺たちは」
「別れ話だったのですか」
「わ、別れ話ってそれなら、むしろ好都合です。キンジさんが、心おきなく私の主人になれますので」
そ、そこだ。
そこだよ。
いま一番分からない点はそこなんだ。
レキはアリアを追い払った後、俺に銃を突きつけて……

プロポーズ、なんかを、してきやがったのだ！

「レキ、お前、んで『結婚』なんだよ……！」

俺はレキを制するように手を突き出し、後ずさる。

そもそも俺は、ヒステリアモードという病気を抱えてる。女なんか、できるだけ避けて生きなければならないんだ。

そこに突然、結婚って。なんでだよ！

「――そうすれば、キンジさんもウルスになれますから」

「ウルス……？」

「『家族』、という意味です」

か……家族？

ダメだ。ますます分からん。

泣きたくなってきた。

「それはまあ、結婚した男女は家族ってことになるんだろうが……俺には兄さんがいるし、それで十分なんだ。家族が欲しいなら、誰か他の人と養子縁組でもしてもらったらどうだ」

そう逃げ腰で言う俺に、

「風は、あなたと言っている」

レキが、いつもより強い口調で言った。

「あなたでなければならない、と言っている——何か、強い確信のようなものが籠もっている。そのレンズの狙撃銃のスコープの、本物のレンズ越しに見据えている。

（……何なんだよ……！）

このレキは、いつものレキと違う。

こいつのアダ名は『ロボット・レキ』。いつも無口・無感情・無表情を決め込んでる奴なのに。今のレキからは、何か強い目的意識のようなものが感じられるのだ。

——まるで、何かの命令を受信したかのように。

「き、聞いてくれ。レキ」

俺は射撃線から身体を逃そうと、さりげなく斜めに後ずさった。

「レキの行為は矛盾してる。俺と家族になりたいなら、どうして銃なんかを向けるんだ。そいつを下げてくれ。落ち着いて話し合おう。な？」

「お断りします。異性とは、話し合いで手に入れるものではなく——」

対し、レキは最小限の動きで俺に銃口を向け直した。

「——奪うものですから」

異性とは、奪うもの。

それがレキの男女観か。まあ、正しいといえば正しいんだろうけどやり方を間違えてないか、お前。盛大にと、心の中でレキにツッコんだ俺の視界に……ひらり。

リーフブラウン色の布が、風に乗って舞い降りてきた。

ちょうど手元に降りてきたそれは、さっき俺が掃除のために脱いだ飛んできた方を見上げると――そこには屋上より更に1階分ほど高い位置に据えられた空調設備があって、その上から1匹の獣が俺を見下ろしていた。

ジャケットは、そいつが探偵科の教室から咥えて持ってきたものらしい。

（ハイマキ……！）

あれはレキが飼っているコーカサスハクギンオオカミの成獣、ハイマキだ。

あいつがなぜこの服を持ってきたのか、俺は慌ててそれをキャッチし、袖を通したが分からないまま……武偵高の制服――ジャケットとズボンは無力だが、気休めにはなるだろう。

レキがさっき持っていた装甲貫通弾には、TNKという防弾繊維で出来ている。

あの弾倉に籠められた弾が、全て貫通弾とは限らないしな。

「キンジさん」

「……なんだ」

「私も、すぐにキンジさんに婚約していただけるとは思っていませんし当たり前だろ。

「ですので――最大7分間、あなたに猶予を与えようと思います」

「私はこれから7回、あなたを襲います。あなたが1度でも1分以上逃げることができたなら、求婚は撤回しますので……ゲームのルール説明だな。

まるで……ゲームのルール説明だな。

と、俺は冷やかきつつ腕時計を確認しつつお伝えしておきますが、

「どこへ逃げても構いませんよ。ただ事前に2051mです」

――絶対半径。

極大射程、必中距離……狙撃手による狙撃が可能な範囲の呼び方は色々あるが、武偵はそれを『絶対半径』と呼ぶ。

それはつまり、その狙撃手が敵を確実に仕留められる距離――

「つまり2051m四方どこへ逃げても、私の銃はあなたを射ることができる。この銃は、決して私を裏切りませんから――」

ちゃき、と銃を構え直したレキを見て、とうとう……
俺も、腹が据わってくる。
――そうかい、どうあっても話し合いには応じてくれないつもりかい。レキ。
それならお望み通り、そのゲームに付き合ってやろうじゃないか。
普段の俺なら、こんな理不尽な話には応じないんだろうけどな。
レキがいつそれを知って、どうして俺を変えさせたのかは分からないが……今の俺は、
女性の言う事をよ・く・き・く・ヒ・ス・テ・リ・ア・モ・ー・ド・になってしまってるからな。
どこか無機質な、だからこそ官能的だった――さっきの、レキの、
「では、7回目までに私と婚約してくださいね」
しかし……なぜ『7回』なんだ？
という疑問を口にするヒマも無く――

バッー

「!?」

空調設備を蹴って、俺の頭上から銀狼ハイマキが飛びかかってきた！
見れば、レキに着させられたのだろう――その背は、分厚い鉄甲で覆われている。これじゃあ……昔コイツの兄弟分にやったように、首筋を拳銃弾で掠めて麻痺

させるワケにもいかないぞ。

「――うっ！」

俺（おれ）は探偵科棟（インケスタとう）の側面にある非常階段へとハイマキに突き飛ばされた。

そのまま揉（も）み合いになって、錆（さび）だらけの階段を転がり落ちる。

まるで獲物の内臓を引きずり出すようにハイマキが俺のポケットから携帯をくわえて投げ捨てた時――

パァン！

――ドラグノフの発砲音！

（装甲貫通弾（アーマーピアス）――！）

ヒステリアモードでも、これにはヒヤッとした。

やられた、かと思ったが……痛みはない。

それに安心したのも束（つか）の間（ま）、がしゃん！

「！」

ダンゴ状態になって転げていた俺とハイマキは、思いっきりブチ当たった階段の手すりを破壊し、空中に投げ出されてしまった。

どんっ！

ハイマキは俺を蹴（け）って踏み台にし、自分だけ階段に戻りやがる。

とっさにベルトから伸ばしたワイヤーを階段に打ち込んでいた俺もへと某映画のクモ男みたいに着地することができた。

「……？」

妙な違和感に左腕を見ると、俺の防弾制服その袖（そで）のカフスボタンが、1つ、無くなっている。

服に残された留め金の壊れ方で分かる。今さっき、レキに撃たれたのだ。ボ・ボ・ボタンを。

レキ……相変わらず、大したヤツだ。

ハイマキと揉み合って転がる俺の、小さなモノを撃ったんだ……？

（だが、なぜこんなと眉（まゆ）を寄せる俺の耳に、カツカツカツカツカツカツ――

鋼鉄の階段にツメを立てながらの、素早い足音が近づいてきた。

ハイマキが、階段を走り降りてきているのだ。

俺は、ベレッタに手を伸ばし……かけて、やめる。

ハイマキの防弾鎧（ぼうだんよろい）に着せる犬用防弾チョッキの一種だろう。

あの装甲に9パラ（9ミリ弾）あれは、警察犬（けいさつけん）や武偵（ぶてい）犬（けん）尽くしても、一時的に足止めできるだけだ。

仕方なしに、俺は通用しない。全弾撃ち（タクティカル・ボディー・アーマー）

――ハイマキ。

階段を駆け下りてハイマキから逃げる。

そういえば春には、俺はまだブラドの手下だった頃、お前に追われる番になったってわけか。因果応報だな。

今度は……俺が、お前をバイクで追い回したんだよな。

地上に下りた俺は、

（もし次弾が来たら、銃弾撃ちで防御を――）

とも一瞬思ったが、それもダメな事にすぐ気付く。

銃弾撃ちとは、相手の姿を視認して弾道を予測し、発砲のタイミングに合わせて自分も発砲することで初めて出来る技だ。

姿が見えず、いつ撃つかも分からない狙撃手には――使えない。

俺はハイマキの気配に背を向け、仕方なく全速力で走って逃げた。

時々すれ違う通行人にヘンな目で見られつつ、モノレールの線路下を駆け抜け、ガードレールを飛び越えて商店区に入り、信号を無視し――

かつて強襲科で習った対狙撃戦術通りに、交差点を曲がって細い路地へと入る。

狙撃銃は、相手を直線でしか捕らえられないから。弾は、真っ直ぐにしか飛ばないからな。

だからこうやって曲がり角の向こうに隠れてしまえば、撃たれることは絶対にないのだ。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

雑居ビルの壁に背をつけて、腕時計を見る。

もうすぐ初弾から1分。レキのルールで、交差点の方を見てハイマキがまだ来ていない事を確認している——ギンッ！

道端の信号機の支柱で、火花が散った。

「!?」

次の瞬間、バチッ！　という痺(しび)れが俺の左腕に走る。

（う、撃たれたッ……!?）

慌(あわ)てて左腕を見れば——また、袖(そで)のカフスボタンだけが銃弾に掠(かす)め取られている。

レキ。あいつ——跳ねた弾で俺の腕を撃ちやがったのか！

信号の柱を撃って、跳弾狙撃(エル・スナイプ)。

弾道がV字を描く俺の銃弾撃(ビリヤード)ちと似た発想の、角の向こうの敵をL字に狙撃する技だ。

跳弾の音が背後で二回続き、今度は右腕に——二重跳弾狙撃(エル)……！

俺は舌打ちし、さらに路地の入り組んだ所に逃げるが——ギンッ！　という銃弾が信号の支柱と道ばたのゴミ箱を経由して、路地を追ってきた痺れが走った。

（そっ、そんなのアリかよ……！）

俺は舌打ちしながら、裏路地にあったセレクトショップの自動ドアをくぐる。

ここは角を2つ折れ曲がった路地の、さらに店内。店の前には、銃弾を経由させられるような電柱も郵便ポストもない。

（ここなら絶対……大丈夫だ！）

あまり人気の無い店なのか、少女のマネキンが立ち並ぶ店内に客の姿はない。

――ザザッ！

と、疾風のようにハイマキ……を見て、店員さんも奥に引っ込んでくれた。

ちょうどいい。店の前に立てこもらせてもらうぞ。

「……？」

拳銃を抜いた俺は開きっぱなしのドアに向き直り――眉を寄せる。

ハイマキが、店内に入ってこない。

自動ドアを開けるマットの上で停止し、頭を下げ、前足を広げて踏ん張っている。

（……ッ！）

気づいた時には、もう遅かった。

ギンッ――路地を折れ曲がってきた銃弾が、さらに――

ハイマキの背中の板金に跳ね返ってこっちに向かい――

ビシュッ！　俺の右袖（みぎそで）を、勢いよく掠（かす）めていった。
「――うおッー」
弾に腕を払われた俺は、マネキンたちの足元に倒れてしまう。
床についた手元を見れば――俺の右腕からもう、カフスボタンの頭が、その意味を教えてくれる。
ヒステリアモードの頭が、その意味を教えてくれる。
俺の制服には胸の第1・第2ボタンに加えて、両腕に2つずつの6つのボタンがある。
レキはそれを、1つずつ撃っているのだ。
――頭の中で、レキの言葉がリピートされる。
『7回目までに私と婚約してくださいね』
6つのボタンが全（すべ）て無くなっても、俺がYESと答えない場合は、7発目で――どこを撃つというんだ、レキ。
「……チクショウ……！」
お前、殺（や）る気かよ……俺を！
レキには俺が見えている。俺を撃てる。
なのに、俺には向こうが見えない。撃ち返せない。
（これが、狙撃手（スナイパー）……！）

狙撃銃と拳銃の戦いは、槍と剣の戦い。こうやって間合いを広げられたら最後、拳銃の弾は狙撃手に届かないのだ。たとえ、ヒステリアモードの俺が撃ってもな。

片膝立ちになって見上げたマネキン少女たちが……一瞬、全員、レキに見えた。

この恐怖感。気が狂いそうだ。精神的に追いつめられていく。

今の俺はただ銀狼に追い立てられ、狩人の銃から逃げ回ることしかできない獲物。

そう……これはレキによる、『狩り』。

――『人間狩り』……じゃねえか!!

弾切れになるまでベレッタを威嚇射撃してなんとかハイマキを遠ざけつつ、俺は途切れた場所を考えていた。

なぜかは分からないが……レキでなかった今回のヒステリアモードは、切れるのが妙に早い気がする。

（『遮蔽物の陰』がダメなら、『遮蔽物に囲まれた空間』に入れば……！）

なんとか、なるかもしれない。

そう考えた俺は這々の体で路地を突っ切って専門校区に戻り、フェンスをよじ登って、車輌科の駐車場に逃げ込んだ。そして、そこに停めてあった頑丈そうな四輪駆動車に飛びついて、武偵手帳から出した解錠キーでドアを開けさせてもらう。

武偵車は全(すべ)て防弾仕様。対人用の装甲貫通弾(アーマーピアス)にも耐えられる。
ここに隠れていれば――
と、車内に入って閉じたドアの窓に。
ビシッ！
「！」
すぐさま、蜘蛛(くも)の巣のようなヒビが入った。レキの狙撃だ。
だが、弾は中に入ってこない。防弾ガラスに傷をつけただけで、跳ね返ったらしい。
ざ、ざまあみろ。
（俺の……勝ちだ！）
と冷や汗を拭(ぬぐ)った俺の手が、固まる。
――ビシッ！
――ビシッ！
――ビシッ！　ビシッ！　ビシッ！
狙撃が……続いている。何発も。
ドアの窓の、寸分違わず同じ場所に。
板に金槌(かなづち)で釘(くぎ)を打ちこむ要領で、レキはガシャアアンとうとう――

防弾ガラスを、撃ち抜きやがった！

ビシュッ！　と、俺（おれ）の制服――胸の第二ボタンがちぎられて宙に舞う。

俺の頭に再び……レキの、今度は別のセリフがよぎる。

『あなたは、やり方次第ではあなたたちを簡単に殺せる人間がいることを知るべきです』

そう。もしレキの、俺の頭を狙（ねら）っていたなら。

俺はもう5回、空中に脳みそをブチまけてるんだ。ヒステリアモードなのに。

ジャンヌにも、ブラドにも、パトラにも――

シャーロックにさえも勝った――ヒステリアモード、なのに！

ちくしょう！　ああ、分かったよ！　お前は俺よく分かった！　お前は俺より強い！

だからもうやめてくれ！　レキ！

俺の制服に残るボタンは、たった1つ。

俺は窓の割れた四駆（サファリ）から走り出て、最後の手段に出た。

距離を取って逃げる、というワケじゃない。逃げてもムダだからな。

（むしろ、その逆だ……！）

ヒステリアモードが切れる寸前、最後に閃（ひらめ）いた逃げ場は――スタート地点の、探偵科（インケスタ）。

レキが陣取る建物。そこだ。

あいつが屋上にいるなら、真下だけは撃てない。絶対に。
階段を下りてきて教室内を襲撃しようとしても、タイムオーバーになるだろう。
俺は全速力で棟内に駆け込む。そして、タイムアリアとモップがけレースをした教室に駆け込んだ。明かりは、点けない。
腕時計を見れば――さっきの狙撃から50秒経っている。
あと、10秒。9、8、7……
よし。最後の最後で、逆転できた。逆転の発想のお陰でな。
と、俺が安堵の息をついた時――

「！」

髪とスカートを翻しながらの、レキが――

――パァン――！！

ほとんど直立姿勢のまま飛び降りてきて、窓の外から俺を撃ってきた！
至近距離から放たれた銃弾は、窓をバラバラに割り。
振り向こうとした俺の制服、その胸の第一ボタンを。
キィンッ！
と、精密に吹っ飛ばした……！
（やられた……！）

呆然とする俺の前で、屋上にワイヤーを掛けていたらしいレキは、小型の電動リールでワイヤーを巻き上げて、窓から教室に侵入してきた。そして、そのCGで描かれたゲームキャラみたいな顔を上げて……機械じみた動作で、ドラグノフを構え直した。

「――ま、参った。分かった。撃つな」――だらしなく開いてしまった俺の制服の、胸――無防備な、心臓めがけて。

レキは、本当に何を考えてるか分からないヤツだ。

もしかしたら、7・7発目では本気で射殺されるかもしれない。

この前パトラと戦った時だって、コイツは平然と相手の額を撃ち抜いてたしな。

「婚約でも何でもする。だからもう撃つな」――

頼みの綱のヒステリアモードも解けていた俺は、両手を挙げて投降の意思表示をした。

そんな俺を前に……

レキは、コトッとドラグノフを床について机に立てかける。

「――それではキンジさん。今から、私はあなたのもので……ぎこちないかもしれませんが、許して下さい」――

日本語に翻訳したので……契りの詔は、私が現代の

さらにヘッドホンも外したレキは、俺の前に歩み寄ってきて――

誰もいない夜の教室で、ひざまずいた。

その背後では……やけに大きく見える今夜の月が、割れた窓の外に輝いている。

「私はこれから、キンジさんに仕えます。あなたは私の銃をあなたの身体をあなたの所有物として、自由にお使い下さい。私の身体をあなたの所有物として、自由にお使い下さい」

……お、おい……

「花嫁は主人の言うことになら何でも従います。主人に仇為す者には必ずや滅びを与えん事を誓います」

お……お前は何を言っているんだ。

さっきまで俺にオオカミをけしかけて、撃ち殺そうとしていたヤツが、今度は、『俺の所有物になる』だって？

「ウルスは一にして全、全にして一。これからは私たちウルスの47女でも、あなたの力になりましょう」

唖然とする俺を前に、レキは決められた文言を暗唱するような口調でそう付け加え――すっ、と、立ち上がった。

そしてヘッドホンをかけ直し、ドラグノフを肩にかけ……

「……」

微動だに、しなくなった。直立姿勢で。

その感情の籠もっていない視線は、ただ前方の虚空を見つめている。

これは……いつものレキ、だな。殺気がなんか知らんが、さっきまで稼働していたハンター回路は停止させてくれたらしい。

「……」

レキ同様その場に立ち尽くしていた俺は、背筋に冷たいものを感じながら……ちっとも分からない今までの流れを何とか整理しようと、通常モードの頭で必死に考えた。

さっきの『人間狩り』は、レキによる武力のデモンストレーションだろう。

――私から逃げたら、射殺します。

――イヤというほど俺に思い知らせた。

そのメッセージを改めて婚約を宣言してきた。

そしてその上で、

――私は、あなたのものです。

なんだか矛盾するこの2つのメッセージだが、実際そう俺に伝わっているのだから仕方ない。

（……）

俺は後ろ頭を掻き、今の自分の状況を把握しようと努める。

狙撃手に捕まり、これは武偵用語で『狙撃拘禁』という状況だ。

相手の絶対半径に見えない檻の中に、閉じ込められたような状態。

強襲科で習った、敵に拘禁された場合のセオリーは……一旦降参してフリをして、何をされても抵抗せず、まずは唯々諾々と命令に従うことだ。

そして、後でなんとかする。スキを見て逃げ出すとか、救援を呼ぶとか。

まあ……今のところレキは、ヤクザとかテロリストみたいに俺を殺したり拷問にかけるつもりは無さそうだしな。ここでの第一手（ファーストアクション）は、『投降』で正しかったただろう。

というわけで俺はとりあえず白旗を揚げたわけだが――

「……」

どうすればいいのかな。これから。次の打ち手が分からない。

レキは待機モードに入ったかのように、ジーっと動かないし。

「……」

試しに1歩、2歩、後退してみると……

とこ、とこ。

うっ。ついてきた。

背を向けて教室を出ると……ことこと。

……イヤだなあ。背後霊に取り憑（つ）かれたみたいだぞ。

と思った俺が早足で階段を降りようとすると――

袖（そで）を掴（つか）んできたレキが、くいっ。

「……なんだよ」

「私から離れないでください」
「なんでだよ」
「敵に襲われてはいけませんので」
敵って。誰に狙われてるってんだ。俺がそういえば、俺を撃ち始める前に言ってほしいのか？　それは。……お前の事じゃないだろう。それがまたレキの変なスイッチを押すことになったら、遅れて来た7発目で頭をだが、ここで抗議するのもマズいだからな。
「ていうか……どうしたいんだ、レキは。これから」
「あなたに従いますよ」
「……離れてくれ」
「それはできません命令でもって言ったたくなんだよ。どんな命令をしてもと、俺は不満顔で振り返り、
「じゃあ……片足上げろ」
テレビで見た古い映画『ターミネーター2』をマネて、意地の悪いことを言ってみた。
すると――すっ。

階段の上でレキは右膝を少し上げ、フラミンゴみたいに片足立ちしている。

ふーむ……まあ、何でも言う事を聞くってのは本気なんだな。

……よし。いいこと思いついた。

「もっと上げろ」

これはいきなり、脱出のチャンスかもしれないぞ。

レキを――転ばせてやれ。さっきあれだけ撃たれた仕返しだ。

階段をゴロゴロ転げ落ちて目を回したら、そのスキにドラグノフをやる。

そう算段する俺のナナメ上で、レキは子鹿のような足を上げていった。

だが、身体の重心は全くブレていない。すごいな。体操選手なみのバランス感覚だ。

すすすす

俺は顔を背け、慌てて命令し直した。
――すとん。
レキは足を下ろし、直立姿勢に戻る。
ふわっ。一拍遅れて、スカートも元に戻る。
「？」
テンパる俺に、レキがミリ単位で首を傾げている。
いや、「？」じゃねーだろお前。あのまま足を上げてったら、そのまま丸見えになってたんだぞ。女の子なら少しは恥じらって、嫌がれよ。
本当に――ロボット少女だな。レキは。
俺は今、その欲しくもないリモコンを押しつけられちまったってわけか。
『遠くへ行け』のスイッチだけが無い、不良品のリモコンをな。
俺。
俺の後ろにレキ。
レキの後ろにハイマキ。
RPGのキャラみたいな行列で夜道を歩きつつ……俺は考えた。
正直、気分は最悪。早く帰って寝てしまいたいところだ。

だが、こんな時間にレキを自分の部屋に連れ帰って――さっき俺とレキの関係を誤解してしまったであろうアリアと会わせるのは気まずい。

それと白雪。今夜は明治神宮に泊まると言ったから帰ってきたの！」→「予定が早く終わったから帰ってきたの！」

「予定が早く終わったから帰ってきたの！」――さっき俺とレキの関係を誤解殺虫です！」のコンボで第三次俺の部屋大戦が勃発する可能性もある武藤か不知火の部屋……いや。レキがついてくる以上、それもムリ行き場が無くて途方に暮れた俺がその事をレキに告げると、

「それなら私の部屋に来て下さい」

レキは事もなげに、そう言いやがった。

そして俺もようやく、自分がそうするしかないのだった。

（イヤだなぁ……女子寮……）

寮監の先生に見つからないよう、俺はコッソリと第2女子寮に入る。

足音を殺しているが、抜き足は俺より上手いな。レキとハイマキも歩法は。さっきは平然と「来て下さい」とか言ってたくせに、やっぱって理解してるんじゃねーか。

詰んだ状態だということに、気づくんだった。

と内心ボヤきながら着いた、レキの部屋は……

「……」

相変わらず恐ろしく殺風景な、生活感のない部屋だった。

裸電球に照らし出された室内に、家具らしい家具は無い。ていうか無いんだよ。よくこんな悪環境で生活できるな、レキは。

ここに来たのは2度目だが、やっぱり、うすら寒いものを感じるぞ。

「……」

とはいえ、ここはこう見えても女子の一人部屋。

俺はこれから、そこでレキと2人っきりで過ごすハメになっちまったわけだ。

これは……俺にとっちゃ、大ピンチだぞ。ヒステリアモード化のなんで壁の時計すら……本当に責任を取って結婚しなきゃいけないストみたいな人格でレキと夜を明かす事になりのだ。相手が無抵抗なのをいいことにな。

（気をつけないと……な）

コンクリート剥き出しの玄関にしゃがんで靴を脱ぐレキの……襟首にのぞく白いうなじから、俺は目を逸らす。

おめかしをしないから目立たないのだが、レキは――

実は、かなりの美少女なのだ。
すっぴんでも、そのお澄まし顔は化粧品のモデルみたいに目鼻立ちが整っている。
そしてこの無表情さは近寄りがたくもあるのだが……かわいくも、隠れファンたちが主張している通りで。
「――キンジさん」
「んっ？　あ、あぁ、なんだ」
そんな事を考えていた俺は、いきなりこっちを見上げたレキに緊張した声を返す。
こ、この無表情な上目遣い――ちくしょう、可愛いな。子犬みたいだぞ。
「ここのカードキーです。自由に使って下さい」
さっきまで狙撃銃のトリガーを引いていたとは思えないほど、白くて細い指で――
レキが非接触ＩＣカードを差し出してきた。
（……いらん、とか言ったらまた狙撃銃が火を噴きかねんからな）
仕方なしにカードを受け取ろうとした俺の指と……レキの、たおやかな指が。
ぴと。
一瞬。触れた。重なるように。
――ドギク。
俺の心臓が、妙な音を鳴らす。

どうやら『ドキン』と『ギク』の中間の音らしい。芸が細かいな、俺の心臓。

「……」

「……」

ああ……クソッ。声が出ない。女子は……苦手だ。いつまで経(た)っても。どんな女子でも。

玄関からレキが歩いていった奥の部屋には、ほぼ唯一の家具――テーブルがあり、銃を手入れする金属ブラシや金床(かなとこ)みたいな道具が載っていた。初めは何もない空間がイヤになって……その工房みたいな部屋に入ってみる。

「……お邪魔するぜ」

「……」

レキはそんな俺には目もくれず、姿勢正しくイスに座って狙撃銃のかちゃ、かちゃ。しゃかしゃか。

銃は工具で手際よく分解され、一つ一つの部品が丁寧にクリーニングされていく。

レキの手元に、マニュアルの類(たぐい)は一切無い。

ドラグノフの部品と構造は全(すべ)て、ネジの一本に至るまで完全に記憶しているんだな。

装備科(アムド)の先生並に完璧(かんぺき)な整備をしたレキは――

チャキッ。銃を壁に向けて構え、仕上がりを確かめてる。
まるで、刀の手入れをした剣客みたいだ。
「キンジさん。すみませんが、今からしばらくの間――あまり、息をしないで下さい」
「……息？　何でだよ」
「呼気中の水分が銃弾に付着して影響する可能性がありますので」
そう言ったレキは机の引き出しからプラスチックの箱を取り出し、
のジップロックで密封した7・62㎜×54R――狙撃銃の実包を、取り出した。
（い……息って。神経質なヤツだな……）
つつ、レキの作業を見守る。
俺は一応息を潜めつつ、レキの作業を見守る。
見れば、机の上には薬莢に詰める火薬量を精密に量るための器具だ。
つまりレキは、あの箱に詰めた銃弾を全て部品から自作したのだろう。こだわる奴だな。
俺なんか、いつも割引セールばっか購買で米軍横流しの拳銃弾を買ってるのに。しか狙って。
「……」
手袋をはめたレキは、1つ、2つ。銃弾を立てて机に並べていく。
そして、ずらり。ぴったり等間隔に20発の銃弾を並べ、じーっ……
今度はスキャナーみたいに、まばたきもせず右から左へ流し見して……

1発だけ、つまみ取った。
その弾を目の前でいろんな角度から検分するレキは、計測器でも計り単位・ナノグラム単位の狂いさえ目と指先で見つけ出そうとしているようだ。
「……」
レキはどうやら合格らしいその銃弾を弾倉（マガジン）にパチンと収め、残りの19足元にあったカゴに、捨ててしまう。
と思うとまた別の、20発入りと思われる箱を出してきた。
「何やってんだ？」
「不発防止策（ミスファイア・プリベンション）です。20発の中から、最も出来の良い1発だけを使いま
……もったいない事すんなよ。このエコの時代に。不発なんて、起きる時には起きる」
「私は今まで、一度も起こした事がありません」
銃関連の事に関してはプライドが高いのか、箱を両手で挟むように持ったままのレキが口答えしてきた。
「そりゃあ……メンテは大事だけどな。銃も道具だ。言う事をきかないミクロンそういう場合も含めて、きちんと対処できるようにするのが武偵だろ」
「銃は、私を裏切りません」
レキは少し強くそう返してきて、その叮嚀な唇を横一文字に閉じ――時はあるんだよ。

机に向き直って、銃弾の選別作業に戻った。
確かに……そうやってくってれば、不発弾の可能性はゼロになるんだろう。
（しかし――なんて、油断のないヤツなんだ）
銃は1戦ごとに完全分解整備して、故障を防止する。
銃弾は精密に自作、しかもそれを更に厳選するから不発のリスクは絶無。
レキのプロフェッショナル然としたその態度には、一分のスキも無い。
俺は殺されないために、一時逃れで囚われたワケだが……
これじゃあ『スキを見て逃げ出す』なんてこと、できっこなさそうだぞ。
（ていうか、そもそもどこでも撃てるんだしな……）
どうやら、逃走という行為自体が無意味っぽいな。
となると――レキに攻撃をやめてもらうしかない、という理屈になる。
それには、どうすればいい？
俺は壁に寄りかかり、頭の中で自由になる方法を模索した。
そういえば、強襲科の副読本で読んだことがあるが――
人質になってしまった後、相手にスキがなく、逃走もできそうにない場合は……最後の手段に、『リマ症候群』を狙うという手があった。

リマ症候群とは『監禁者が人質と長い時間を過ごすうちに良好な人間関係ができ、攻撃を中止してくれる現象』のことで、1996年、リマの在ペルー日本大使公邸占拠事件で見られた事からそう名付けられた。

（しかし、そんな方法が通用するのか？　こんなロボット娘に……）

そんな事を考えつつの俺は――

がしゃん。

レキが選び抜いた弾で満たした弾倉（マガジン）をドラグノフに差し込む音を、絶望的な気分で聞くのだった。

銃の整備を終えると、レキは……とことこと今度は、リビングの奥の方へと歩き出したゅる。タイと一体化した制歩きながら、しゅる。

……何だ？　今度は。

と、その背中を見ていると……

よく見ると小型の洗濯機がある奥まった空間で、レキはヘッドホンのブラウスに手をかけ。

「……」

くいっ、と自分も外し……

「……」

しゅるっ。

「――!?」

い、一気に、まくり上げちまったぞ！

「――ちょっと！　なんで脱ぐんだよっ！」

真珠色をしたレキの背中に、俺はテンパーを浴びますので」

「これからシャワーを浴びますので」

「ふ、振り返るなって！」

「――肉体が汚れると体調不良に陥ります。常に清潔にしておく必要があるのです」

ちぃ。とジッパーを下ろし、ふぁさっ。

ス、スカートまで脱ぎやがった。何のためらいもなく。

飾りっ気のない純白の下着姿を惜しげもなく晒したレキに、俺は慌てて背中を向けた。

「俺が言ってるのはそういうことじゃないみ、見えちまうだろ！」

「私は構いません」

「俺が構うんだ！」

「――ハイマキ、おいで」

俺の抗議の意味が分からないのか、レキ何やら、さらに衣擦(きぬず)れの音をさせている。その音の発生源については――か、考えたくもない。なんて迷惑なヤツだ。無感情なヤツとは思っていたが、そこまでとは。どうして、俺がいる前で……そこまで平然と服が脱げるんだよっ！　てててて、とハイマキが俺の横を通り過ぎていき、フロの扉の開閉音に続いて……しゃあー……という、シャワーの音が本当に聞こえてきた。俺の眼(め)からも、シャワーみたいに涙が出てきそうだ。ちくしょう。

――『リマ症候群(シンドローム)』。

時間をかけてレキと人間関係を作り、それから改めて解放してもらえるよう説得する。それが、ここから逃げ出す最後の手段だ。（だが……なぁ）

人間関係とは、人間と作るもの。

非人間的なこのレキとは、作れそうにもない。

つまりこの作戦、まずはレキを人間的な感情に目覚めさせるところから始めないといけ

なさそうだ。

それは――遠回りで、辿り方も分からない道だぞ。だが、なんとか解いてもらえないと狙撃拘禁を俺は、自分もシャワーを借りて浴びた後まずは『レキの人間化』に伏せたハイマキの背中に頭を置いて横になり、そんな計画を密かに練っていた。さっきまで毛が濡れて別犬になっていたハイマキだが、ベランダでしてからは元に戻っている。ふんわりして、枕にちびびびびびと高速振動して水を散らーラー服姿のレキが壁際に体育座りしている。何着か持っていて、着回しているらしいな。

「……」

「……」

横を見ると、セかつて聞いて驚いた事だが、レキは、体育座りで眠る。戦国時代――部の侍は敵襲に即応できるよう武器を抱え、座ってを未だにやってるわけだいう。レキはそれしては、スキだらけだけ（まぁ……女子としては、スカートで、膝を立てて……制服の短い眠る時さえスキが無い。狙撃銃を杖のように抱えてるから、体育座りなんかしやがって……俺の目がある姿勢が安定するのは分かるが……

ことも考えてくれよな。お陰でこっちは余計なものが見えないよう、にさえ難儀したんだ。まあ、どこでも同じコンクリートの床だけどさ。

「……消灯の時間です。暗くしてもよろしいですか」

レキが言うので腕時計を見ると、9時ジャストだった。秒数までピッタリだぞ。

レキは、体内時計が機械のように正確なんだな。壁に時計がないワケだ。

「別にいい。こんな

手による人形みたいに、整った顔だ。

ふわ。

風に乗って、植物性シャンプーの控えめな香りがする。少し濡れて少し開けた窓からの夜風にあたって柔らかさを取り戻していくのが分かる。

「……寝たのか」

「……いいえ」

レキが、閉じた目を再び開きながらこっちを向く。

なんとなくだが、レキはレキで寝しなに何か考えていたような雰囲気だな。

今なら、少し落ち着いて会話できそうなムードだぞ。

そう思った俺は、

「今さら改めて聞くのもアレだが……何で、最初から疑問だった事を、率直に聞いてみた。

「『風』に、命じられたからです」

「風……？　何だそれ。誰かのコードネームか？」

「人ではありません。風は、風です」

風って……

ピューっと吹く、あの風のことかよ？

あれは大気の流れ。自然現象だ。そんなもんが人に命令なんかするわけないだろう。

「何だよ風って」

「風は、風です」

……うーん……これは繰り返し尋ねてもムダみたいだな。

空気だ。

――別の切り口で、聞いてみるか。

「……『命じられた』ってことは、この婚約も、何て言うか……政略結婚みたいなもので、自分の意思じゃないのか？」

「はい」

……おいおい……

俺は頬を引きつらせる。

「……お前、その風とやらが言う事ならなんでも聞くのか。何でか知らんが、俺なんかと政略結婚させられて……それでいいのかよ」

呆れ果ててそう聞くと、レキは――

「――私は一発の銃弾。銃弾は人の心を持たない。故に、何も考えない。いつも狙撃をする際に呟く、まじないのような言葉を返してきた。

「――」

――何も考えなんが命じる事には、何もつまりその風さを引き金を引かれば必ず飛ぶ、銃弾のよに。

「……」

俺は、それ以上……この拘禁に関する話事を悟ってしまったから。話すだけムダなすぐには変わらないだろレキの意思は、『無い』ものを話だが、『変える』事はできないからな。禅問答みたいなオママゴトには付き合っ結局何の意味もてやるがな、俺は一体何をすれば

「じゃあ……この無かった会話に溜息をつきつつ、俺は――

と、もう一つ気になっていた事を聞いてみた。

こうやってゴロして、ダメな亭主のかよ。

「分かりません」

……分からないって。考えてなかったのか？

無責任な人さらいもいたもんだぜ。

「ですが、私とキンジさんは身体的にはもたヘッドホンを少し触りながら、抑揚のない声で言葉を続けた。

いいんだ」

「共に過ごしていれば、あとは自然が導くだろう――と、風は告げています」
「自然が、導く……？」
「はい。自然に子供ができるだろう、と」
こッ……
「こッ!?」
ごッ！
俺はハイマキから頭をズリ落とし、後頭部をコンクリの床にぶつけてしまう。
けッ、結婚から、さらに話が飛びやがった。
……ていうか、そ、そんなこと！
俺にはムリ！　絶対ムリだぞ！　そもそも女なんか、俺は――！
と拒絶しようと思ったが、レキは多分ヒステリアモードの事を知っている。つまり俺がさっきレキにキスされて性的興奮した事はバレているので、説得力が無いだろう。
「ただ、どうすればいいのかは、私には分からないので……その件は全て、キンジさんにお任せします。キンジさんは詳しいでしょうし、花嫁は主人に身を任せるものですから」
淡々と語るレキに、俺は起き上がりつつ、
「く、『詳しいでしょう』って……どういう意味だよ」
「キンジさんは多くの女性に好かれているようですから、男女の事も詳しいのではと」

「べっ別に、詳しくなんかない。どちらかといえば遅れてる。そういう事は避けて生きてきたからな。お前もご存知の、ヒステリアモードっていう病気を発症させないために」

吐き捨てるように言い、改めてハイマキの腹を枕に横になる。

「それに、もし万一、俺が女子に好かれてるとしたら……それはヒステリアモードの時の俺の方だけだ。本来の俺は何の取り柄もなく、ただのつまらん男子高校生なんだよ」

「――違います」

俺の言葉にキにしてはハッキリした声が返ってくる。

「あなたはＨＳＳ……ヒステリアモード以外にも、優れた力を秘めています」

「……？」

ヒステリアモード……以外？

「――その一つが、潜在的なカリスマ性です。自分では気付きにくい事とは思いますが」

「潜在的……？」

そういえば……昔、綴先生も俺のことをそんな風に言ってたな。

『ある種のカリスマ性を備えている』とかなんとか。

「それはリーダーの素質。将の素質です」

……将って。

将軍のことかよ。

「あなたはイ・ウーとの戦いで、多くの仲間を結びつける軸の役割を果たし――敵さえも味方に変えてきました。これは、優れたカリスマ性の萌芽（ほうが）と考えて間違いないでしょう。優れた将が現れると、兵は自然に集まるものですから」

「……あのなぁ……」

俺は首を横に振る。

「俺はヒステリアモードになってもお前より弱いし、頭だって兄さんや父さんから見りゃ情けないぐらいに稚拙（ちせつ）なレベルなんだぞ。そんなリーダー、ありえんだろ」

「将に必要なものは、絶対的な力や知恵ではありません。それはむしろ個々の兵に必要なものですから。それに私はヒステリアモードの事ではなく、キンジさんの人間的な部分について述べているのです」

「……」

俺はレキに背を向けるように、少し寝返りを打った。

レキは……ウソをつかない。性格上。

だからこれはお世辞じゃなくて、本当にそう思って言っているんだろう。

「……」

俺は……

鏡を見なくても、自分が少し赤くなっていることに気付いていた。
なんだか分からんが……異常に、照れくさいな。
買いかぶりだとは思うが、自分の……ヒステリアモード じゃない内面部分を、まっすぐ誉められるのは。
そんなこと、今までの人生で一度も無かったからな。
どうリアクションしていいのか分からん。
「それに、さっきキンジさんは自分のことを『お前より弱い』と言いましたが――私は、本当は本気を出せばキンジさんの方が強いことを知っています。あなたはまだ隠している。封じ手にしている。本当の実力を」
「――もうやめろ」
少しだけ――
低い声で、俺は背中越しにレキを制止した。
俺は、やろうと思う……さっきの戦いでは……レキの言う通り……さっきの戦いではこのハイマキも、あんな逃げの一手じゃなく――
殺すつもりで攻めに回ることを、心が許していればな。
「……そんな力は出したくないし、これからも出さない。お前相手にキレて全力出して、

どうなるってんだ。どっちが強いだの、そんなこと――下らないんだよ」

「……」

「銃だの剣だの、俺はこんな学校は来年には辞めて、普通の学校に通うんだ。どうだ。にも言っておくがな、俺はこんな学校は来年には辞めて、普通の学校に通うんだ。どうだ。これが俺の本音なんだよ。あてが外れただろ」

「いいえ――それなら私も武偵高を辞めて、一般校に通います。あなたと共に」

そう答えたレキに、俺はつい振り返ってしまう。

この反応も……初めてだな。

こう言うと、アリアも白雪もいい顔をしないのに。

「――人間の本質は、学校では決まりません。どこに通おうと、キンジさんはキンジさんです」

体育座りしたままのレキは、いつも通りの平静な顔付きで斜め下の床を見ていた。

「キンジさんは一般校に通って、何かやりたい事があるのですか」

逆にそう聞いてきたレキに、俺は少し言葉に詰まる。

「……それは……これから考える。転校してからな」

「そうですか」

そうではないでしょう。

と言うようなレキの声に、俺は導かれたかのように――

「あるといえば……あるけどな」

つい、ごまかしてしまっていた。

「でも……それは俺の中でもボンヤリと夢見ているだけのことで、実際それに向けて何か努力しているかといえば……何も、してないんだ。だから今はただ、時間を過ごしてる。そんな、宙ぶらりんの状態なんだ。このままじゃ。今は」

その辺の事は――いけないとは、分かっているんだ。

でも、頭では分かっていても……

その最初の一歩が、踏み出せないでいる。

「……」

レキはそんな俺の心を読み取り、気遣ってくれているかのように……黙っていた。

（レキ……）

こいつと、こんな話をするとは思わなかった。いや、できるとは思わなかったな。

俺は少し反省するような気持ちで、レキの横顔を見る。

レキは、人との関わりで深入りしない。誰に対しても、表面的な付き合いしかしない。

だから友達もいない。強いて言うなら、こいつの友達はアリアぐらいだ。

そして、俺も――

レキにこんな本音を語るなんて事、考えたこともなかった。
俺は武偵高では、こんな心の内側にしまってある事を誰かに話したそう思うと、俺はさっきまで拒絶していたレキへの気持ちが……話ができそうな相手が、いなかったからな。
少し、反転するのを感じた。
反転――つまり、かすかな親近感に。
「……」
それを感じ取ったのか、レキは目だけを動かすようにして俺の目を見た。
「……」
無言で見つめてくる、レキの視線が……次第に……
なんとなく、何かの命令を待っているように思えてきた。思い違いかもしれないが。
（……命令……）
そういえば、俺は……さっき、見えないリモコンを渡されている。
――『遠くへ行け』のボタンだけが無い、リモコンを。
……
その逆、『こっちに来い』のボタンはあるんだろうな。
……

……いやいや。ダメだって……！

少し気を許したせいもあって、一瞬考えてしまった。

レキがこっちに、いざり寄って来るところを。

恥ずかしくなって視線を少し逸らすと、視界には陶器のように色白な肌に咲く薄桃色の唇が入ってきてしまう。

（……あの唇が、さっき、いきなり……俺の口に……）

その視線に反応したかのように、レキの唇が僅かに――

ミリ単位で、動いたような気がした。

……まずい。

俺は自分の考えを見透かされたかのような気分になって、内心慌てふためいてしまう。

今さら気付いたが、レキは今までで一番の難敵かもしれない。戦力的にも、ヒステリア的な意味でも。

とにかく、見れば見るほど美人だという事を思い知らされるし――

認めたくないものだが、アリア、白雪、理子とは……また異なる魅力がある。やっぱり、

コイツには。

「も……もう、寝るぞ。明日は2学期の始業式だ。いきなり遅刻したくないからな」

そう言って俺は天井の方を向くと、ハイマキのシッポをアイマスク代わりに目に乗せた。

視線を逸らす一瞬前に見えたレキの顔は、
なぜか、ほんの少しだけ……
切(せつ)なげな顔を、していたような気がした。
いつもの無表情だったが

2弾 水投げ

9月1日――

日本では2学期が始まるその日の始業式では、世界初の武偵高・ローマ武偵高の制服を模した『防弾制服・黒』と呼ばれる黒ずくめの制服を着るのが国際的な慣例だ。

講堂では方陣状に並べられたパイプ椅子に、黒服の生徒たちがズラリと座っている。

前方の舞台では弾痕を縫ってごまかした跡のある緞帳が左右に広げられており、中央の演台で校長の緑松が武偵の国際協力について語っている。

治安が悪化したとはいえ日本はまだ安全な国の部類に入るので、東京武偵高ではもっと緊張感のある環境で育った海外の武偵高の留学生を積極的に受け入れる、とかなんとか。

……おいおい。これ以上、校内の緊張感なんか高めないでくれよ。

武偵高のそういう方針のせいか、講堂の一角には香港武偵高から来た生徒たちも座っていた。

見れば、高校生だけじゃなく、中学生……小学生っぽいのもいるな。さすが海外だ。

（日本もそのうち、アメリカみたいに5歳児が拳銃ぶっ放す時代が来るのかもなぁ）

昨日レキの部屋でよく眠れなかった俺(おれ)は、そんな事を考えつつアクビを噛(か)み殺す。
2学期の始業式では、出欠を取られないなんて。なので理子(りこ)みたいに不真面目(ふまじめ)な生徒やアリアみたいに忙しい生徒はサボっている。出てるのは、真面目なヤツか、ヒマなヤツか、俺のように少しでも内申点を下げられたくないデキの悪い生徒ぐらいだ。
レキは……
俺と一緒に登校した後、始業式後のセレモニー――小銃や狙撃銃(そげきじゅう)をバトンがわりにするマーチング・バンドだ――に出る当番との事で、講堂の控え室に入って、束(つか)の間(ま)の自由を満喫(まんきつ)できている。
なので俺はこうやとはいえあのドラグノフがある以上、半径2キロ以内はレキの手のひしかも俺の足元にはハイマキが寝そべっていて、「逃げたらご主人様にチクるからな」という顔で時々こっちを見上げてくる。チクショウ。
そんな見張り番のハイマキを、ジトーっと見ていると……
「遠山(とおやま)君、隣いいかな」
「ようキンジ。ダブらねーで済んだみてーだな」
隣の席に、男子が2人移動してきた。真面目な不知火(しらぬい)と、ヒマな武藤(むとう)だ。
イケメンの不知火は2学期の初日から清潔感あふれまくり、武藤は夏休みボケ丸出しで無精(ぶしょう)ヒゲが生えまくりだ。ほんと対照的ってやつだな、お前ら。

「聞いてくれよキンジ、昨日、乱射があったみたいでよォ。オレの四駆が窓ブチ抜かれて、また保険会社に連絡しなきゃなんねーんだげ。昨日俺が隠れた車、武藤のだったのかな。ま……まあ、ここはシラを切っておこう。それに武藤には、昔ケンカしたときジャイロキャノピーで轢かれたし？」

「――そんな事より遠山君。君、また女性関係でスキャンダル起こしたみたいだよ！　窓を撃ったのはレキだし。オレの乱射事件を『そんな事』で流すとっても武偵な不知火が、そこに割り込んできた。

「大声出すな武藤。ていうか不知火、何でそんなことを？」

「知ってるというか、予想。さっき強襲科で剣道の朝練があったんだけど――神崎さんが大荒れだったからね。これ、遠山君関連じゃないかなーって思ってさ。」

神崎……アリアさんが、大荒れか。

想像するだに恐ろしいな。

ちなみに朝練とは一般校では早朝・クラブ練習を指すが、武偵高では早朝・戦闘訓練・の事だ。

「もう一部ではポピュラーな話題だよ。今朝――遠山君、狙撃科のレキさんと女子寮から登校してたって」

俺とレキの関係を示すように、不知火はハイマキの背を撫でている。

「――今度はレキか！　あー、でもなんとなく分かる気がするぞ。ネ・クラと無口でウマが合ったんだろ。しかしキンジ、お前また危険な物件に手を出したな。多いからよォ。おかしキンジ、お前また危険な物件に手を出したな。前、これから四方八方から狙われるぜ？　不幸だなー、キンジは」

同意するぜ。

既にレキから狙われてるのに、増えんのかよ。銃口。

俺の背中を叩いて笑う武藤に、レキとの事について詳しい説明をしようもない俺は……

ガックリと、うなだれる。

「……これもポピュラーな話だけど、神崎さん、レキさんと仲良かったからね。ちょっと鬱入ってたよ。暴れたあと」

友達＝レキ、恋人＝俺、って言いたいのかよ。

「あのなぁ。俺とアリアは元々そういうんじゃないし、ちょっとトラブル多いんだよねえ。『修学旅行Ⅰ』、何度目か分からないうトラブル多いんだよねえ。『修学旅行Ⅰ』、――修学旅行Ⅰ――」

「このシーズン、そういえば、そんなのもあったな。

何度目か分からない俺の弁明を、不知火が爽やかすぎる笑顔で制止しつつ言う。

武偵高では、2年次に2回の修学旅行が行われる。その1回目が『修学旅行I』だ。

これは名目上では普通の修学旅行というイベントになっているが、実際には生徒間でのチーム編成の最終調整をするための行事である。

というのも……武偵高の生徒は2年になると、9月末までに2～8人のチームを組んで学校に登録しなければならないのだ。

このチーム制度は意外に重要で、登録したチームは国際武偵連盟（IADA）にも登録される。

通常、武偵はそのチームで将来も活動するし……仮に進路が分かれても、チームの協力関係は組織の枠組を超えて最優先して良い——と、国際武偵法でも定められている。

「夏休みで男女関係がこじれてチーム編成ができなかったワケだ」——とポピュラーだからね。

遠山君、身辺整理もうだいたい組むヤツが「その点オレは、集めた兵站系チームだ。女子もいるぞ。つってもう決まってるぜ。車輌科（ロジ）と装備科（アムド）から何人かずつ厳密な決まりはないが、チームには強襲系・兵站系・通信系・混成系など様々な種類があり、それぞれの小隊が集まって中隊になるようなイメージだ。

軍隊でいえば、チームが連携（リンク）し合う。

だから、一般校でいう班分けみたいに仲良しこよしで組めばいいというものではなく、戦略的に優れた編成を考えなければいけない。

一言で言うと……すごく頭を使う行為なのだ。チーム編成というやつは。

特に友達の少ない俺にとっては、レキとの婚約問題に加わる大きな頭痛のタネだよ。

「遠山君はやっぱり強襲系チームかな。それとも捜査系？」

「まだ何も決めてない。単位取得で忙しかったから、やむを得ず後回しにしてたんだ」

「あーあ。大変だ。遠山君、これを次着る時にどうなってるのかなあ」

と、不知火が俺の黒ネクタイをついてくる。

次着る時、というのは、チーム登録時の写真撮影を言ってるんだろう。

チームは登録時に写真を撮る決まりがあり……その撮影には、メンバーが横並びになって、再びこの防弾制服（ディヴィーザ）・黒（ネロ）で臨（のぞ）むのが規則だ。なんでも、万一犯罪者に写真を見られた時に、どこの国のどの武偵高出身者か分からないようにするためだとか。

俺は去年、先輩のチーム写真を見せてもらったが……全員わざとカメラを見ず、微妙に横やら斜め下やらを向いてたんだよな。あれも顔を完全にはバラさないためだろう。

全く、物騒な学校だよ。写真一枚撮るのにも用心が必要だなんてな。

始業式が終わると――講堂前の道路では、乗せて、C組の女子たちがマーチングバンドを始めていた。

羽根付き帽子とマーチ衣装で飾り立てられた、バトントワラーの女子たちは――

ひら、ひら。くるくる。

短いプリーツスカートをひらめかせ、バトン代わりの突撃銃や狙撃銃を回しつつ、通行止めにした車道で二列縦隊のパレードをやっている。

武偵高ではあおうに音楽やダンスの催しを公開し、世間様のイメージアップを図ることが間々ある。校長の作戦らしくそれにはたいてい女子があたり、5月のアドシアードではアリアや白雪がチアをやっていた。

だが……いつ見ても、イヤなんだよなあ。

俺にとっちゃ、近隣の住民やマスコミがあいうの。

見れば歩道には少しだけ見に来ていた。

望遠レンズのついたカメラを持ってきて、せっせと女子を撮ってる男が、ファッション的な意味で。

校長の戦略にノセられてるぜ。見た目は可愛らしい女子高生かもしれないが、うちの女子は危険人物ばっかりなんだからな。

日頃、本物のバズーカ砲みたいなドラグノフ狙撃銃を無表情にクルクルと回しつつ——

と、俺は溜息をつきつつ——

に、その場を後にするレキ……の、短いスカートから逃げるようにした。

背後には、ハイマキがしっかりついてきやがる。

ていうかお前、さっきからなんで俺をイビるんだよ。わざと靴を踏んだり、さっき講堂

の男子更衣室から出た時なんかオシッコかけようとしただろ。

講堂で着てた防弾(ディフェンス)制服(イーザ)・黒(ネロ)は貸衣装だから返却台に放(ほう)り投げてバッ汚したら承知しないからな。

今さっき着替えたこの制服は自前なんだぞ。もこれも、困ったもんだ。

（……レキ、ハイマキ、チーム編成……どれに加えて、今日は武偵高(ぶていこう)の悪習『水投げ』の日でもある。

それがまた頭痛の大きなタネだ。

『水投げ』とは元々、校長の母校で行われていた「始業式の日には誰(だれ)が誰に水をかけてもいい」という一風変わったケンカ祭りのようなものである。

それは水のかけ合いだから安全なんだろうが、なぜか武偵高には「真・ケンカ祭りとして伝(でん)徒手(としゅ)でなら誰が誰に播(ば)してしまったのだ。

ケンカをふっかけてもいい」というルールの

とうとう本当に頭痛がしてきた俺(おれ)は、救護(アンビュラス)科棟(とう)にある薬局へ向かうことにした。

（教務科(マスターズ)もそんなもん容認すんなよな。まったく……）

表通りを歩くと『水投げ』の被害に遭(あ)う恐れがあるので、裏路地を通ろう。

と、俺が遠ざかるパレードの音の中を歩いていると……

ぷわ。

ぷわ。

ぷわわ。

なんだ……？

シャボン玉……？

が、狭い路地を行く俺の目の前に漂ってきた。

ぱちん、ぱちぱちん。俺の目の前で、それが2個、3個と弾ける。

「――お前、いま3回死んだネ」

その直後、頭上から妙な訛りのある女の子の声がした。

見上げると、建物の排水パイプに足を掛けて逆さづりになった……？

……誰だコイツ？

「日本の武偵高、映画『霊幻道士』に出てきた不死者みたいな――清朝中国の民族衣装、その正装をアレンジした妙ちくりんな服を着ている。

女の子は往年の留学生だぞ。

喋り方と併せて考えるに、多分、さっき講堂にいた香港武偵高からの留学生だ。

「……何か用か」

機嫌の悪かった俺が、手にした瓢箪から何かを器用に飲むソイツを睨み上げると……

「きひっ！」

くるっ、すたっ。

サーカスみたいな身軽さで、その小さい女子が甲高い笑い声を上げて路地に降りてきた。

ひゅらり。

リボンで左右にまとめた黒髪のツ・イン・テール・が、本体の動きを追って舞う。

「私、名前、ココっていうネ。お前も名乗るネ」

――身長は、140ぐらいか。子供だなコレ。

目尻には赤い化粧をしてて、元々キツめの目つきをもっとパリッとさせている。

一部の男性が見ればヨダレを垂らして喜びそうな、幼くて愛くるしい外見……だが……

なんか……どっかの誰かさんに似てるなぁ。偶然の一致っぽいが。

「遠山キンジだ」――俺も一応名乗っておくか。

名乗らせた手前。

日本人は無礼者だとか、俺のせいで思われたくないしな。

「哎呀！　哎呀呀呀呀ー！」――

ココとかいう女の子は、オーバーアクションで天を仰ぐ。

なんだよ。俺の名前がどうかしたか。

「……おい、お前。

ていうかさっきから、ケンカ売ってんのか。お前。

瓢箪を指して注意すると、ココは目をまんまるに見開いた。

「――ガキ違うネ！　ココは昨日でもう14歳ネ！」

ぶはぁ！　とま
酔ってるんだな
というか……こ
「しょがないネ、
あまり日本語が
ふら、ふらり……千鳥足で倒れるような
いきなり、飛びかかってきやがった！
――そんなリアクションまで――
初めて会った時のアリアと一緒かよ！
「――！」
反射的に突き出した俺の手に、ココの足が――にゅるん、と絡みつ
なっ、なんだ。この動作。まさに酔っぱらいの動きみたいに不規則
カウンターで押し返してやろうとした反応が、ズレた。
ココは俺の体の表面をヘビのように這って、ぐるりっ。こっちの背
そして、俺の首に左右からロープ……!?
「きひっ！」
耳元で笑ったコは、更に俺の首に両腕まで絡ませてくる。

酒臭い息を吐いて怒鳴ってきやがる。
。中国には飲酒に年齢制限が無いらしいし。
のやり取りにも、なんかデジャヴを感じるぞ。
ちょとお試しするヨ。姫から離れたら、すぐ、イタケの分からない事を言ったり動作に……側転を繋げながら、ぱっ！
できないのか、ココはワ
かかってきやがった！
クションまで――
・・アと一緒かよ！
ツイてねえな！
が――にゅるん、と絡みついてくる。
で――
いや、ツインテールを巻き付けてきた。

ぎりぎり……ぎりっ！

――っ。首を――

絞めて、きてやがるッ。柔道でいう、裸絞め（チョーク）だ。

（こ、こんな絞め技……アリかよ……！）

裸絞めとは、一度決められると素手では絶対外せない徒手技（しゅわざ）の一つ。

しかもこれは変則的に複雑な形に極（き）めてきている。

腕に加えて髪を使い、まるで綾取（あやと）りのように――

コイツめ、留学生のくせに――『水投げ』の話を、どこかで聞いてきたのか？

「きひっ、ほれ、何も出来ないカ？　何も出来ない男は、いらない男ネ。殺すヨ」

「殺……す？」

俺は冷や汗をかきながら、何とか声を絞り出す。

こう見えても、俺は一応武偵（ぶてい）だ。『殺す』って脅（おど）されたびに100円玉もらってりゃ、今ごろ豪邸が建ってる。

だが、これはただの脅しじゃなさそうだぞ……！

（ほ、本気で、殺（や）りにきてやがるッ！）

――今さら、その危機感がリアルに感じられてくる。

こいつは『水投げ』のルール以前の問題だ。

焦った俺はベレッタに手を伸ばそうとし――器用に押さえられている事にようやく気付く。

「――――！」

近接拳銃戦の技術が使えるのは、打撃戦の距離までだ。

こうやって完全に密着され、組み技戦に持ち込まれてしまうと――銃が使えない姿勢にされる事がある。

極められたりしてしまうと――そこで、自分の両腕を押さえられたレキとの戦いとは逆に、近すぎて無力化される事があるのだ。銃が。

遠すぎて弾が届かなかったレキとの戦いとは逆に、近すぎて無力化

（や、やばいぞ……マジで……！）

気が遠くなってきた俺の体内で――

このアリアに似た女子の身体がへばりついている感覚と、本当に縊死しかけた感覚とが入り交じって、ドクッ……という、異常な鼓動が始まる。

（こ、これは……！）

いつものそれとは違うが、おそらく、ヒステリアモードだ。

それも、兄さんが言っていた死にぎわのヒステリアモード。

ヒステリア・アゴニザンテだろう。

（そ、そんな所まで追い詰められてるのか！　いま、俺は……！）

だが、最後の最後で切り札が覚醒してきたのは幸運だ。

今まで狼狽するだけだった頭の中で、
俺はココを壁にぶつけるか、腕に噛みつくか、どちらが彼女をより傷つけずに外せるか
と思案するが――
まずい……こいつは、ち、違うぞ。
ヒステリアモードの頭が、事態がより深刻な事を教えてくれる。
これは、裸絞めなんて生やさしい技じゃない。
「ひひっ！　双蛇刎頸崩！」
……グキ……グキッ……！
（け、頸椎……を……）
首の骨を、外そうと、してやがる！
俺の首の内側が異音を立て、意識が遠のいていく。
視界が点滅し、目が見えなくなってきた。
――対応が遅れた。相手が女だからとも、もう、取り返しが……つか、ない……！
ヒステリアモードでも、手段を選んでる場合ではなかった。
お、落ちる……！
――ぐるおっっっ！
という吠え声に続いて、ぱっ！

ココが、腕と髪を一気に解いた。
俺(おれ)は――どさっ。顔を上げる。
前のめりに倒れて、いまココに飛びかかった俺の眼前では、いまココに飛びかかったうなり声を上げている。
俺の首は……外れてない。間一髪だったな。目はチカチカと眩(くら)んだままだが。
――てん、てん。
ココは身軽にバック宙を切って、路地の向こうに退(ひ)いていく。
「姫の飼い犬、お前の方がマダ使えそうネ」
そして、アカンベー。
「私(ウオ)は、『万武(ワンウー)』ココ――『万能の武人』ネ。キンチ、0点」
こっちにベロを出した。
そう言いつつココは、ばいばい、と手を振りながら、角の向こうに……姿を消してしまうのだった。
「お前、追試ネ。後でまた採点するネ。再見(ツァイチェン)」
俺は――呆然(ぼうぜん)と、それを見送ることしかできない。
な、何なんだよ……昨日から。

厄日は1日で終わってくれよ。

レキに狙撃され、留学生の通り魔にやられて……俺、二連敗じゃねえか。

生徒同士が当たり前のように銃やナイフを振り回す武偵高では、殺人未遂ぐらいの事は軽く流されてしまうのが悲しい現実だ。

ていうか先生に「裏路地で留学生に殺されかけました」と言ったところで「やられたらやりかえせ！」と蹴り転がされるのがオチだろう。

それにあれは武偵高用語で言うところの『下負け』――下級生にケンカで負けるという、極めて不名誉な事とされる敗北だ。

しかも相手は中学生、さらに生まれつき男子より体力に劣る女子。それに素手の格闘で負けたとなれば不名誉も不名誉、麻雀で言えば不名誉の役満状態だ。

学内での評価なんかどうでもいいとはいえ、これを騒ぎ立てたら笑いものにされるぞ。

誰にも言わず、無かったことにするしかないな。

とはいえ――

（ココの格闘センスは……アリアと同じかそれ以上だったぞ……）

中国では、強襲型武偵の育成カリキュラムが日本とはかなり違うと聞いたことがある。

――個人に何かの素質を見出したなら、武偵高ではそればかり叩き込むのだ。

拳銃なら拳銃。ナイフならナイフ。他の事はやらせない。そうやって、それぞれの技を極めた秀才を育て上げるらしい。

つまりあの子はたぶん、幼い頃から格闘技だけを訓練してきたエキスパートなのだろう。

（中国人じゃないが……こいつも、そういうクチなのかもな）

と、パレードが終わってセーラー服姿に戻ったレキを横目に見つつ……

ヒステリアモードもすっかり解けた俺は、台場の街をブラブラと歩いていた。

なぜこんな所にいるのかと言うと、メシを食うためである。

俺はさっき一連のストレスをヤケ食いで発散しようと学食に行ったのだが、今度はそこで奇妙な男子の一団に囲まれちまったのだ。

どうやらレキを女神様みたいに崇め奉っているらしいそいつらは、「レキ様との日常について教えて下さい」「寝顔は可愛かったですか」「ていうか死ね！」などと俺をいきなり揉みくちゃにしてきやがった。

まあつまり、さっき武藤に警告された通りになったわけだ。水投げのルールに則って。

俺がそいつらにまた首を絞められたり手足を曲がらない方に曲げられたりしている横で、レキはドラグノフを担いでボケーっとスルーを決め込んでた。ハイマキも、後ろ足で耳の後ろを掻いてアクビなんかしてたし、ほんと、もう、泣くぞ？

他の食事処――コンビニやファミレスにもレキ教信者が張っていたので、俺は学園島で

メシを食う事をあきらめ……こうやって、台場まで遠征してきたわけだ。

まあ……今日は始業式で授業も無い。

日本に迫ってきている初秋の風物詩・台風のせいでちょっと風が強いが、天気もいい。

こうやって街をブラつき、気晴らしでもするさ。

ところで……

「……」

今日のレキ様は、ほとんど喋らないな。昨日の夜はけっこう喋ってたのに。

ていうか、あれから少し不機嫌になったようにも見えるぞ。表情が無いからよく分からないが。

などと、歩きながら狙撃娘の様子をうかがっていると……

ぴう。

と、一陣の風が俺たちの足元を吹き――みレキの、臙脂色のプリーツスカートが危険な舞い上がり方をした。

「……！」

だが、レキはお構いなし。

風に対して何の防御もしないから、白い太ももの脚線美と――マジックテープ式の軍用バンドでつけている銃剣が、白日の下に一瞬さらされてしまう。

そのさらに上はギリギリセーフだったものの、

「お、おい。レキ……足元。気をつけろ」

羞恥心がプログラムされてないらしいこのロボット娘に、俺は注意を促す。

レキはチラッ、と地雷でも探すような目つきで足元を見てから……

「……？」

と、俺を見上げてきた。

何を注意されたのか分かってないらしい。

ダメだコイツ……ほんと、早くなんとかしないと。

「ハイマキ、おすわり。ここで待っていなさい」

さらなる突風を恐れた俺がアクアシティお台場――屋内に逃げ込むと、

などと、レキはハイマキを自動ドアの脇で待機させていた。

いいのかな。そんな所にオオカミ放置して。

「……」

トコトコと店内についてきたレキを、俺はジト目で見る。

様々な問題に囲まれた俺だが、目下、最大の問題はこのレキに狙撃拘禁されていること

だろう。

まずはそれから片付けないと、他の問題に着手することもままならんぞ。

（……『リマ症候群（シンドローム）』か……）

レキから解放されるための切り札――『リマ症候群』。

それを成功させるためには、レキとの人間関係を作ることが前提条件になる。

だが今さらながらに思うが、人間関係を作るには、相手が人間でなければならないのだ。まつりこのロボット・レキを、人間化しなければならないのだ。

どう考えても難しい課題だぞ、それは。

どうすればいいのかすら分からん。

だが、やるしかない。

やらなきゃこのまま一生レキと一緒に暮らすハメになるんだからな。

やり方はデタラメでも、とにかく、取り組もう。レキの人間化計画に。

5階のフードコートに着いた俺は、まあ腹さえ膨（ふく）れればメニューは何でも良かったので、

「レキお前、何か食べたいものあるか」

と、聞いてみた。

どうせ『何でもいいです』とか言うんだろ。

「何でもいいです」

ほらな。

まあ、ここまでは想定の範囲内だ。

「じゃあラーメン食うぞ。ここの新都城って会社・仲間・交友を意味するCompanyという英語の語源が『共にパンを食う』である ように、一緒に何かを食べるというのは人間関係を作る手助けになる行為だ。うまくすれば食事をきっかけに打ち解けて、一気に解決の糸口を掴めるかもしれない。俺はレキを引き連れ——台場で一番うまいラーメン・レストラン、ガヤガヤと客で賑わう新都城に入っていった。

小さいテーブルにレキと対面して座った俺は、まずはご機嫌取りをしようと思って、

「今日はおごる」

とレキに前置きし——やってきたウェイターさんに、

「俺は、チャーシュー麺で。コイツには一番高いメニューを出してやってください」

何度か来ているので頭に入っているメニューを開けもせず、注文した。

まあ、財布には3000円ほど入ってるからな。予算的には大丈夫だろう。

……ちら、とレキの反応を窺うと、

「……」

置物みたいに、向かいの席に座ったまま動かないでいる。

まっすぐ前を向き、日は微妙にナナメ下を見ているようだが……俺でもない虚ろな空間を見てるっぽいぞ。マジで人形みたいだな。その日つき。

ていうかお前、メシ屋ではヘッドホンぐらい外せよ。

（しかし……レキはこういう賑やかな店が似合わないな。浮きまくりだぞ）

自分で連れてきといて、何だけどさ。

と、俺は頬杖を突きつつ……することもないので、窓から東京湾の景色を見た。

藍色の海には船が白い航跡の帯を幾つかつけていて、空き地島の方にはミュージカル『オズの魔法使い』の看板があって、その上をカモメがふわふわ飛んでいる。

いいなぁ。こういう光景。ノンビリしてて。

俺は頭の中で――レキは『オズの魔法使い』だったら心を持っていないカカシの役だな、などとどうでもいいことを考えながらボケーっとしていた。

「……」

「……」

俺たちは双方無言で、ただ、食事が来るのを待つ。

武偵活動中に女子と組まされた時などには――俺は性格上、こういう無言になることがよくある。

女子となんて、話す話題は無いからな。

（……そういう沈黙には、けっこう気疲れするもんだけどな）

しかしここにいるのは、女子は女子でも――レキだ。

カカシが置いてあるようなものだから、その辺には気を遣わないで済む。

そういう意味では、レキも……俺にとっては希少な女子の一人なのかもしれないな。

性格が男子っぽいから気を遣わないで済むアリアとは、また別の意味で。

まあ人間関係を作るには会話も大事なんだろうが、急いては事をし損じると言うしな。

こんな公の場でウルスだかウイルスだかがどうのという電波話をされたでも困るし。

今は海と空の風景で、かわいそうな俺の心を癒しておくのが得策だろう。

「――お待たせしたでござる！」

聞き覚えのある声と喋り方に、俺は頬杖ごと机からズリ落ちた。

「ふ、風魔!?」

諜報科1年、風魔陽菜。

エプロンつきのウェイトレス服を着た後輩が、お盆に載せたラーメンを運んできていた。

こいつ。始業式に来てないと思ったら、ここで修行してたのか。

「師匠、ご注文の品をお届けに上がったでござるよー。ささ、どうぞ」

風魔は満面の笑みで、ごとり。チャーシュー麺を俺の前に置く。

……なんだこれ。チャーシューが卍形に切ってあるぞ。手裏剣のつもりか。余計なことしやがって。通常より面積が小さくなってるじゃねーか。

風魔はシャレた事をしたつもりらしく「師匠、誉めてくだされ」とか言うとでも思ったか。

「おおーすごいぞ風魔、お前は大した忍者だ」

スルーしてやる。

ばちん、と不機嫌に割り箸を割った俺の前に――どすんっ。

風魔は、ポニーテールを軽く浮き上がらせるほど重量感のあるラーメンを置き放った。

「な……なんだ、これは……」

ラーメンが……壺に、入ってるぞ。人の頭が余裕で入るぐらいの。

「こちらはレキ殿がご所望なされた、当店で最も高い――超壺麺でござるよ」

「……っておい！　これは人間が食える量じゃないだろ！　象でも残すぞ！　こんなのメニューに無かったし！」

「――左様。今月からの新作でござるよっ」

ぺらっ、と風魔が開いたメニューには……

『新メニュー・超壺麺！　5000円　※ただし30分以内に完食できたら無料！』

と書かれた真新しい厚紙が挟まっていた。

ていうか、ごッ……5000円！

そ……それでは無銭飲食になってしまうでござるよ！　俺！

「待ってくれ、俺は今手持ちが3千……」

と言いかけた俺には目もくれず、風魔はしょうなどという思い上がり――ここで、忍者の本性を現したようより計測開始！　はいスタートっ！」

「くくく……師匠とは4年越しの知己である某に先駆けて、2人で仲睦まじく兵糧を本人曰く丁髷のポニーテールをぴょんと振って、ストップウォッチを挫いてやるでござるよ！　それでは30分、只今レキは……ほとんど隠れてしまっているレキの方を振り向く。

「……！」

俺は――壺でほとんど隠れてしまった。

「……」

ぱちん。

割り箸を、割った。

や、やる気か。お前。挑むというのか……この巨大な敵、超壺麺に。

ていうか今、レキの目が一瞬ピカッと光ったような錯覚がしたぞ。

「……」

レキは、箸で麺を1本つまむと……
あむ。
麺の先端を、くわえた。
そして、ちゅるる……るるる……
食べる。
麺だけを。
さらに、あむ。
ちゅるるる……
あむ。ちゅるるる……
1本1本、麺を食べていく。
「……」
俺が見守る中、レキはその独特な食べ方で次々麺を口内に吸い込んでいく。
す、すごい。
麺を食べてから次の麺を食べるまでの、間が無い。
ていうかここまで少ない動作で食えるもんだったんだな、ラーメンって。
そうこうしている内に――
レキは、全ての麺を食べ切ってしまった。

ものの、5分で。

「……」

続けてレキは――

ひょい。

ぱく。

具の小エビを箸でつまんで食べた。

さらに、ひょい、ぱく。

ウズラの卵を食べる。

ひょい、ぱく。ひょいぱく。

キクラゲ、イカ、椎茸……

壺にゴッソリ載まれた具を、一つ一つ食べていくぞ。これも休み無く。

「なッ……なんで……ござると……ッ？」

風魔が、ストップウォッチを愕然と見ている。

驚くのももっともだ。

なんと……10分経過した辺りで、レキの前に置いてある巨大な壺から麺と具が、全て無くなってしまったのだ。

食うところを見ていたから、何かのイカサマを疑うこともできない。

む……

と、壺を両側から持ったレキが……重くてうまく持ち上げられなさそうにしていたので、俺がその壺を一緒に持ち上げてやると……

レキは壺の縁に、その小さなお口をちょんと付けて……

んく。

んく……んく。

スープを……飲み始めた……ぞ……！

んく……んく。

だ、大丈夫かお前。いきなり死んだりとかしないだろうな。いくら俺の前科1犯が掛かってるとはいえ、お前の命と天秤に掛けたら僅差で命の方が大事なんだから、ムリするな。

と、内心心配する俺をよそに……

スープも……カラになった……！

レキは力士でも苦戦しそうな巨大壺ラーメンを、完食してしまったのだ。

「――私の感覚ですが、今、風魔さんが計測を開始されてから10分47秒です」

などと言いつつ壺を机に戻したレキは、いつも通りのケロッとした表情をしている。

す……すげえ……

今まで知らなかったけど、お前、意外と大食いだったんだな。

いや、これは大食いってレベルじゃねーぞ。胃の中にブラックホールでも飼ってんのか。

「……あ……ああぁ……！」

ストップウォッチと壺を見回した風魔が、壊れ気味の声を上げている。

そして、へなへな。ウェイトレス姿のまま、その場に座り込んでしまった。

「ゆ……夢でござる……これは……悪い夢でござるぅ……ッ！」

……分かるぞ、風魔。

お前はまだ1年。こういう超常的な光景を、見慣れてなかったんだな。

だが武偵高の生徒なんかをやっている限り、お前の前にもいずれブラドやシャーロックみたいな超人が現れることだろう。その時いきなり目にする超常の能力に慌てないよう、こうして怪奇現象を目の当たりにして己を鍛えておけ。

と、俺は先輩らしいことを心に呟きながら……

とりあえず前科者にならずに済んだことに、胸、というか財布をなで下ろすのであった。

武偵3倍刑、という言葉がある。

まあそれは極端な表現だが、要は武偵が犯罪を犯すと通常より罪が重くなるもので……

食い逃げの金額も、3倍ぐらいにカウントされるところだったのだ。さっきのは。

すんでのところでその重罪を免れた俺は、結果だけ見れば浮いたレキの食費でハイマキ

用の魚肉ソーセージを買ってやることにした。

ちゃんとアクアシティ前で待っていたハイマキにビニールを剥いてそれを与えると……

おうおう。しっぽを千切れんばかりに振って食ってるぞ。

すごいテンションの上がりっぷりだ。こいつ、魚肉ソーセージが大好物なのか。これは

ちょっとした発見だな。

なぜかあの超壺麺を食べる前と体型が変わっていないレキと……モノレールで

学園島に帰ると、降り立った駅のホームには強い風が吹いていた。

ちなみに武偵庁に登録済みの武偵犬は、鉄道やバスなどの公共交通機関に乗ってもいい

ことになっている。オオカミはどうか知らんが。

人けのないホームで、ひらっ、と――

またレキのスカートが風に煽られたので、俺は慌てて目を逸らしておく。

お前……手で押さえるとか、安全そうな向きに体を避けるとかしろよ。女子なんだから。

一向に人間化しないロボット娘がヒステリア的な意味で危険なので、前を歩かせて……

レキ、俺、ハイマキと列になって階段を降りていると、ぴた。

いきなり、レキが立ち止まった。

その視線は、俺たちが今降りている階段の踊り場に上がってきつつある――何者かの影

に、向けられている。

「つ……？」

レキの背中にぶつかりそうになった俺。

後ろからハイマキが膝裏に追突してきて、膝がカクンと折れてしまった。

いわゆる、玉突き事故みたいな状態だ。

「……おっ……」

俺は歩みを止めきれず、階段の途中で振り返ったレキを押すように階段を降りざるを得ない。

レキも俺に押されつつ、後ろ向きのまま階段を降り……

ドッ……と、踊り場の壁際に背中をつけた。

結果、俺はレキを壁際に押しつけたような形になる。

レキはとっさに両腕を胸の前に立てて、俺が壁に頭をぶつけないように押さえていた。

おかげで俺はレキの頭に顔を乗せるようになり、壁との衝突を免れている。

……危なかった。

と、安堵の一呼吸をした俺は――

鼻腔深くに吸い込んでしまった、レキのミントみたいな香りに驚いて目を見開いた。

「――！」

い、今の姿勢……

や、ヤバくないか!?　これ。

……俺とレキには、頭1個分ぐらいの身長差がある。

そのせいで俺はレキの髪に思いっきり顔を埋めていて——

慌てて顔を上げると、レキは俺の無事を確かめるようにアーモンド上げていた。至近距離から。

「……！」

しかも俺の手は——

とっさにレキを転倒から守ろうとしたらしく、その細い両肩を抱くそのせいで、レキは少し身体をこわばらせたような姿勢になっておこ、これじゃあ……まるで……

人けがないのをいいことに、駅の物陰でイチャついてるカップルみそれも俺が強引にレキを押さえつけて、何かしようとしてるようなこれがアリアだったら俺は階段をホームまで転げ上がるぐらい蹴りレキは特に抵抗することもなく俺に抱かれている。

俺が両方とも握ってしまっている、レキの細くて小さくて、柔らか至近距離に見える、その彫刻みたいにキレイな顔。

俺の口から数センチのところにある、ピンク色の唇に——

（……ヒステリア・モード……！）

脳裏をその言葉がよぎった俺は、自分の血流を確かめる。

大丈夫、か……？　これはヤバいだろう……！

あ、あれ……？　大丈夫だな。

よかった。何では分からないが、ヒスらないで済みそうだぞ。

と、俺がレキと見つめ合いながら密(ひそ)かに安心していると……

……べちゃ。

何かが、踊り場の床に落ちる音がした。

左方向、５ｍほどの所から。

視線を音源、下り階段の方に向けると……

クレープ。

……が、落ちるな。

そのクレープには、クリームと……かじりかけの部分を見るに……

白くて小さなまんじゅうが巻かれている。桃色の。

すなわちそれは、小型のももまんだろう。

ももまんクレープか。

世の中にはいろんなクレープがあるんだな。

中に漉(こ)し餡(あん)を詰めた、

そんな悪趣味なモノを食うヤツは、よっぽどもまん好きの人なんだろうな。

――だろうな――

じゃねーだろ！　俺（おれ）！

「――！」

一気に血の気が引いた俺が、そーっ……と視線を……

そのももまんクレープを落とした人物のシューズ……黒タイツの、

上げていくと……そこには……

「……！」

ももまんを歩きながら食べていた姿勢のまま、石化したと思われる神崎（かんざき）・H・アリアが、いた！

アリアは元々大きな目をまんまるに見開いて、俺がレキを壁際に押しつけて抱いている姿をバッチリ目撃してる。

それがアリアの中ではどうやら脳がメモリ不足に陥（おちい）ってフリーズするぐらいの『物凄（ものすご）い光景』として処理されているらしく、石像状態になっているのだ。

「……！」

そして、石化しているのは俺も同様だ。

なんだってこんな所を――アリアに目撃されるのか。さすが運の悪さに定評のある俺だ。

アリア、俺、
3人が3人、
「でもさでもさ
などと喋(しゃべ)りな
やりつつの……
そして――俺
「うをををむ
ふわふわした
……驚きなが
食い意地の張
「やっ、やるじ
キャラなのに！
大興奮の理子
うな仕草をして
てか、レキュ
思った俺が、理
自分の硬直が
元から動いてないレキ。
黙ってその姿勢のまま静止画
ンカできるJCなんてホント
、アリアと拳銃(アルカタ)で互角にケ
探偵科(インケスタ)の峰理子(みねりこ)が、階段を上
とレキに気付き、
ぐむぐむぐを――っ!?」
髪と両サイドに結ったテール
ら、クレープの残りを両手で
口に押し込んだぞ。今。
ったヤツだな。
ゃんキーくん！　レキュは2
もうズギュューンキスだ！
は自分のブラウスの中に手を
突っ込み、内側からパンチを
いる。なんだその動作。
ってレキのことか。相変わら
子のせいというかおかげとい
うかで気が抜けて――
どしんっ！　ばたーん！
みたいになっていると――
ンカできるJCなんてホント
、アリアと拳銃(アルカタ)で互角にケ
探偵科(インケスタ)の峰理子(みねりこ)が、階段を上
がってきた。
とレキに気付き、
ぐむぐむぐを――っ!?」
髪と両サイドに結ったテール
ら、クレープの残りを両手で
口に押し込んだぞ。今。
いている。
にいたのー？」
ープをモグモグ
を一斉に飛び上がらせて、驚
周目からでないとルート入れ
ない超ムリゲー
ーン！　ドーン！　ドーン！」
突き出させるよ
ツだ――などと
自分の硬直が解けている事に気付いた時、

暴れ回る理子(りこ)が『ドーン！』でアリアにぶつかって、2人そろって転んだ。

ぐらい盛大にスッ金縛りが解けたらしいアリアが、がばっ！　と起き上がってきて――

それでようやくたいな顔でこっちを睨(にら)んできた！

――鬼瓦(おにがわら)！　みたいな顔でこっちを睨(にら)んできた！

こ、怖え！

「アリ――」

「あんたはいい!!　という感じに、犬歯を剥(む)いた。

どかーん！　と断させられてしまった。

セ、セリフを中言わせてもらえてないぞ俺(おれ)

アリア、とすらたはいい！　バカキンジは

「あ、ああ、あんあ、そういうヤツだって分

うよねそうよね！　そういう、おっ、おとな

きだもんねッ！　しっしっ――しっ、白雪(しらゆき)とし

――な、なんでか！」

と異議を唱(とな)えよ!?

「そんなヤツ、そ真下に目を逸(そ)らし――

あたしが悪い！　黙ってなさい！」

「そんなヤツ、そんなヤツを……ッ！」……ごによ、ごだからあんたはいいよ……」――あ、

言葉の一部を口の中で揉んで飲み込むような仕草をして、ぎんっ！

と、俺を睨んでまた金縛りにかけた。

「そんな事よりレキ！」

びしっ！

と、アリアは犬歯を剥いてレキを指さす。

「あんた……やってくれたわね……!?　校内ネットで見たわよ！　あんたと2人チームの申請をするなんて……！」

もなく……キンジと2人チームの申請をしてたって？

何……？

俺とレキの2人チームを……レキが、もう

聞いてないぞ、そんなの。

怒髪天を衝くアリアの声に――『パートナーの横取り』！

武偵高における『チーム登録』は通常9月下旬――修学旅行の後に申請する決まりだが、

レキは、反論しない。

実際のところ、生徒間ではそのかなり前になんとなくのチームが出来ているものだ。

なので……特に俺とアリアのように組んで戦っていた生徒同士については、その片方をチームのメンバーとして登録してしまうことは暗黙の禁則（タブー）とされている。

勝手に誰かがチ

それを……やったみたいだな。どうやら、レキは。

「あたしは――キンジとレキの、れっ恋愛とか、そういうのは……ほんとに、ほんとに、ほんっと――にどうでもいい！　ホントだからね!?　だから、あんたたちがどうでもいい！　知らない知らない！　ホントにどうでもいいという関係でも知らない！　知った事じゃないわ！　でも――パートナーの横取りは許さないッ！　キンジは、あたしが調教したのよ！」

調教って。

その言い方、ホントにやめてくれよ……理子が横で目を輝かせてるじゃねーか。

と、発言を封じられた俺が仕方なしに心の中で抗弁していると。

「アリアさんは――」

俺の横で、レキが抑揚の無い声を発した。

だが、割と強い口調だぞ。なんとなく。

「――キンジさんの、何なのですか」

あー……

ヤバい、言い方……のように思えるぞ。これは。

なんだか分からんが、『宣戦布告』みたいな空気が流れ始めたし。

「なっなっなっ……な、何なに何、なに何って……こ、これはその……！」

今のレキの質問をどう受け止めたのか知らないが、アリアはわたわたと震える指で俺を

指す。

「べっ別に、これとはその、たっただのパートナーで――バカよ！」

おいアリア。

お前、興奮しすぎて言ってることが分からなくなってきてるぞ。目グル回ってるし。まあ、『これはバカ』って言いたいんだろうけどさ。

「――私は、婚約者です」

しれっ、と言い返したレキに――

理子が「ふおおっ！」と鼻息交じりの声を上げ、アリアは、がくーソを突かれたみたいに、体を前に折り曲げた。

槍でいきなりへ

「こ……ッ、高校生同士の、婚約なんて……」

ぎぎ、ぎぎぎ。

何か……含みのある目つきでソッポを向きながら、アリアが上体を上げてくる。

「そんなの……ゴッコ遊び……よ！」

す、すごく頑張ってる感じだ。アリア。

何に頑張ってるのかは皆目分からんが。

「――遊びではありません。本気です。アリアさん。あなたは今後、これからも昨夜のようにキンジさんに近づかないようにして下さい。キンジさんには……私の部屋に泊まり、

昼もできるだけ私のそばで過ごし、夜も一緒に寝てもらいます」
『本気です』『昨夜のように泊まり』『一緒に寝る』などと繰り出され
に、アリアは『あわっ』『やめて』『もうやめて』という顔を一々(いちいち)する
「アリアさんとキンジさんが信頼し合っている言葉を続けている。
レキは、追い打ちを掛けるような感じで語弊(ごへい)のある言い方するんじゃねえよ！
「――しかし、恋・・して・・はならない・・」
「こ、こ、こっこっこっこっこっ!?」
ニワトリみたいな声を上げたアリアは、
いや、言わなくていい。言うな。
レキのデンパ発言に一々反応してたら、
「こっこっこっこっこ――キンジー！」
敢(あ)えて今のレキの言葉をスルーするように、アリアが般若顔(はんにやがお)でこっ
「あ、あんたはどうなの！　レキと――組む!?　そのつもりなの!?
何も言わせてもらえず、バカ呼ばわりされ、いつものガキみたいな癇癪(かんしやく)を爆発されて、
俺(おれ)は――

レキのこと、チームのこと、通り魔のこと、ふん、と口を曲げていた。

いや……

違う。そのせいだけじゃなかった。多分本当は。

「――そんな事、お前に関係無いだろ」

何言ってんだ、俺は――

火に油を注ぐような事を。

「そもそも、俺は来年になれば武偵高からお前だってどうせ――」

とか、パートナーだとかなんて。それに、かなえさんの裁判が終わったら、ロンドンに帰るんだろ。

と言いかけて、理子やレキの前でそれを言うのはやめておく。

というか……

口に出したくなかった。

アリアが、いなくなるって事は。

それがどうしてなのかは、分からない。

「アリア。仮にお前がチームを組んだとして、それが何になる。バラバラになるんだ。ナンセンスだろ」

「ちがう！　たとえバラバラになってもチームはチームよ！　国際武偵連盟に登録すれば、お互いずっと制約無しに助け合うことができるし――解散しても、一生、仲間だった証が残って――」

「そんなモノ、残さなくていいんだ！」

俺はつい、声を荒げてしまう。

アリア。

どうせ俺の前からいなくなるくせに――

そんな『思い出作り』みたいな事、俺は付き合わないぞ。

お前はそれで心おきなく帰国できるのかもしれないがな。東京とロンドンは地球の裏表。

どうせ、助け合うことなんてできないんだ。

お前は、いなくなる。俺の前から。

どうせいなくなるんなら、繋がりなんか残さないでくれ。

「もうどうでもいいだろ。お前と一緒に戦ったことだって、過去の出来事だ。もう――」

と言いかけて、俺はチームよ！

アリアが――

足を踏みならして、俺の方に歩いてきたからだ。

「～～～

自分の思い通りにならない俺に、アリア絶句し、幼児のように暴力に訴えようとしている。俺が反射的に体を引き、アリアが掴みかかってきた時。2人の間に、サッ——と、レキが入ってきた。

——パシィッ！

「——！」

アリアが、理子が、俺が。全員、目を丸くした。

レキが——アリアに、ビンタした。

——どさっ。

不意を突かれ、カウンターを入れられたアリアが——撥ね返されるように後退し、そのとき後ろを向いた理子にぶつかって、べちゃ。

崩れた正座で、尻餅をついた。

「……キンジさん。危険です」

いつも通りの口調で、レキが前に出る。

「……！」

友達だと思っていたレキにパートナーを横取りされ、危険物呼ばわりまでされたアリアは……叩かれたほっぺたを押さえる手を放し――

「……もう何もかも、どうでもいいわ……」

前髪でできた影に目を隠すようにしながら、ゆら……

と、立ち上がってくる。

「レキ……よかったわね。今日が『水投げ』の日で。格闘術で、闘ってあげる――」

アリアが、両腕を上段に構えた。

まるで、威嚇するトラのような攻撃的な構えだ。

や、闘る気だぞ。コイツ。

「それにさっき、通り魔の留学生に掟破りの拳銃戦を挑まれて――結局勝てなくて、逃げられて……イライラ来てたところだしねッ……！」

レキを睨みながら言うアリアに、俺は目を丸くする。

拳銃戦でアリアと互角の、留学生の通り魔――？

「ア、アリア……その留学生ってヤツは、『万能の武人』とかを名乗る……なんというか、お前に似たヤツじゃなかったか？」

さっき自分を殺しかけたココの事を思い出した俺が、慌てて尋ねると――

「あんたは黙ってなさい！　それにあたしは、あんなにチビじゃないわよ！」

――否定するような言い方じゃないぞ。

アリアも襲われてたのか。あの香港からの留学生、ココに。

ていうか……格闘戦だけじゃなくて、拳銃戦までアリアと互角の達人だったって？

し、信じられねえ。そんなの。

「――理子、背中は任せたわよ」

顔を上げたアリアが、自分と背中合わせになっている理子に声をかける。

見れば、いつの間にかハイマキが踊り場を回り込んでおり――

2人の双剣双銃――アリアと理子を、レキとで挟み撃ちする自分とで挟み撃ちするような位置にいる。

なるほど。理子はさっきそれに勘付いて、後ろに振り返っていたのか。

グルルルル……とうなり声を上げるハイマキを前にした理子は、

「――くふふっ。理子はニャンコ派だけど、ワンコも好きなんだよね――」

半分振り返り、戦闘狂の典型みたいな好戦的な笑みを浮かべている。

今日は水投げの日とあって、理子も拳銃を出さない。

理子の素手格闘か。そういえば、初めて見るぞ――

「くふっ！」

楽しげに笑った理子は、右拳を上段、左拳を下段に構える。

そして直角に曲げた両膝を大きく広げ、ハイマキに向けた左足を踏みならして、あれは――中国拳法だぞ。意外だな。それも香港映画でお馴染みの、八卦掌。様々な流派に分かれ、技のバリエーションが極めて多彩な流派の構えだ。

「……」

レキはレキで、アリアの恫喝にも一切臆せずに立っている。凄いな、この胆力は。

（だが……）

俺は、眉を寄せる。

構え……ないのだ。レキが。

ただ、アリアを直視しているだけだ。

「……」

ばっ！　とそれこそトラのように飛びかかったアリアに――

レキは、何の抵抗もせず――どさっ。

手折られる花みたいに、簡単に押し倒されてしまった。受け身すら取れてない。

ぐるおっ！

レキを助けようと飛び出したハイマキの――シッポを、理子が掴む。

「あははっ！　レキュ！　この子、理子がもらっちゃうぞ！　もらってフルモッフだ！」

ぱしっ！　とハイマキの後ろ足を低空回し蹴りで払った理子は――這うように振り返ったハイマキの前足を、その場に伏させてしまった。

大きく回した右手の甲で一気に払い、そして、べたぁー！　背に飛び乗り、押し潰して動きを封じてしまう。

「……！」

一方で、仰向けに倒れたレキの腹に馬乗りになったアリアは――

レキが何の抵抗もしない、というか出来ないのを見て、目を丸くしていた。

これには俺も驚く。

（……レキには、徒手格闘の技術が、無い……!?）

レキは『構えなかった』のではない。

構えを『知らなかった』のだ。

そもそも狙撃手とは、遠距離戦闘の専門家。

近接した敵と取っ組み合うような事はしない。

だから狙撃科では格闘技が必修ではないし、レキの動きも全くの未経験者のそれだった。

「アリアやめろ！　こんなの、弱い者イジメだろ！」

俺が叫ぶ横で――ようにに簡単に押し倒されてしまったレキに……アリアは、レキをただの女子高生の拳を打ち下ろさないでいた。

怒りのやり場を無くしてしまったかのように、歯ぎしりしている。

「～～～～！」

殴れない。レキが弱すぎるから。いや、そうだと思っていたから。

アリアは――一人、友達を作るのがあまりアリアは――一人を好む俺とは別の理由で優れすぎていて、周りの唯我独尊な性格のせいもあるが、能力的にないと思われるからだ。

そんなアリアに、レキは、レキだけは――4月のバスジャックでも力を貸してくれた専門は違うものの、合わアリアを自室に泊めてくれたのもレキだ。

だからアリアは、レキを殴れない――

――シャッ！

その時、アリアが、振り上げたそのまま両脚を振り上げて側転を切り、レキのけぞるようにして、突き上げる銀色の一閃を躱した。

ぱら……

今の、銃剣の一突きが掠めたアリアのツインテールから――

切られた髪が1本、2本、宙を舞う。

「……レキ……おい……！」

レキが、スカートの中に隠していた銃剣を抜いたのだ。

水投げの日は、素手格闘だけが無制限に解禁される日なのに……！

「……」

レキは肩にかけていた狙撃銃を外し、くるっ――キンッ！

バトンのようにそれを一回しして、銃剣を着装した。

一瞬で槍と化したドラグノフを、レキが低く構える。

その姿勢は――えらく古風な銃剣道の構えだが、堂に入ってるぞ。

さっきの素手格闘とは別人だ。

「レキ……！」

水投げのルールを無視してきたレキを前に、アリアが自分も抜刀するかどうか逡巡した、

その一瞬の隙に――

ダッ――！

アリアめがけて駆けたレキが、シャッ！

膝を刺すようなフェイントを見せて、アリアをバックステップさせ――

「――!」

シャッー　シャッ、シャッ!

恐ろしく華麗な銃剣捌きで、アリアに何度も刃先を突き出した。

大腿の内側。えげつない。磁力でも持ってるかのように、急所、急所ばかりを狙い続けたが――どうとう、壁際まで追い詰められた。

アリアも卓越した運動センスで、その銃剣を躱し続けたが――

「――!」

そのアリアの首めがけて――レキが、今までで一番鋭い突きを繰り出す!

がすんっ!!

紙一重の差でアリアがそれを避けると――

銃剣はアリアの首の真横、壁に深々と突き刺さっていた。

「……!」

その一撃に、アリアは赤紫色の目をまんまるに見開いて驚いていた。

俺も、言葉が出ない。

ハイマキに覆いかぶさっていた理子も、マンガみたいに口を開いて唖然としてる。

か、確実に――殺す気だったぞ。今のは。

ズッ、と銃剣を抜き、ぴゅん、ぴゅん、とドラグノフを回転させつつ数歩下がったレキは――また連撃に入る速度を稼ぐためか、距離を取って――再び、構えた。

その切っ先は、またアリアの首を狙っている。まっすぐに。

つっ、とレキが踏み出そうとした時――

「やめろッ！　レキ！」

今の間のおかげで、ようやく声が出せた俺が叫ぶ。

すると……ぴたっ。

レキは、キャンセルボタンを押されたかのように静止した。

そして……くるっ。

無言で狙撃銃を一回しして――アリアに視線を向けたまま、肩に担ぎ直した。

「レキ……」

アリアは――

友達だと思っていたレキに、こんな仕打ちをされて――

「あんたなんか……あんたなんか……」

じわ……と、目に涙をうかべ……

「あんたなんか、絶交よッ！　絶交！　二度と――許さない！　顔も見たくないわ！」

無言のまま自分を見据えているレキに、そう喚き散らすのだった。

その後、アリアが走り去り、理子がそれを追っていってしまったので……

俺とレキ、そしてハイマキは駅に残された。

俺は……俺に停止命令を出されてスイッチの切れたロボットみたいになっていたレキを、

学園島の片隅――転落防止柵を回り込んで海際まで来れば、人工浮島の縁に、急ぎ足で連れ込んだ。

ここで……ちょっと、レキをお説教しなきゃならないだろう。

さっきのは、人間化計画以前の非常識さだったからな。

レキは体育座りで海際に座ったまま、俺の方を見ない。

ただ、なんというか……もう落ち着いたみたいだな。

冷静なまま戦ってる感じだったから、落ち着いたというのもヘンだけどな。

「……レキ」

「はい」

「お前、アリアを殺す気だったろ。さっきの」

「はい」

しれっ、と答えやがる。

弱ったな。

「はい……って。なんでだよ」
「――『風』が、命じたのです。アリアさんとキンジさんを近づけてはならない、と」
……風。
またそれか。
コイツ……俺を狙撃拘禁した夜にも言ってたよな。全ては『風』のせいだ、って。もしかして、そのヘッドホンで聞いてるやつか？
「『風』って何だ。これは私の故郷の風の音を録音したものです」
「――違います。これは私の故郷の風の音を録音したものです」
「故郷の、風の音……？」
「風と共に育った頃と同じ心でいられるよう、聞いています」
「じゃあ、誰かに電話でもされたのか」
……ますます分からなくなったな。
「違います」
「じゃあどうやって命令を受けたんだよ」
「風の言葉は、私の頭に直接聞こえてくる。遥か、故郷から――」
……

えーっと……だな。
俺は、何にでも病名を付けるのは好きじゃないが……
どうやらレキは、統合失調症――
いわゆる『妄想』の病を患ってるらしいな。
これは探偵科で習った事だが、『私は神様の啓示を受けた』とか
してくる』とかいう一次妄想は割と典型的なものだとか。レキのは
とはいえ、それを真っ向から否定してもそれに似ている。
その妄想を、本人は信じきってるわけだからな。
それに……俺は、医者じゃない。
対処の仕方は考えるだけムダだろう。
ここは話を逸らしつつ、こっちが言いたいことだけを簡潔に伝えておこう。
「その……あれだ。こんなことを言うのも何だがな。人を殺すな」
「なぜですか」
な……
なぜですか、とときたか。
「なんでって、ダメなもんはダメなんだよ。殺すな」
「それは命令ですか」

「命令だ。武偵法でもそう決まってる」
「分かりました。殺さないようにします」
なんか……
なんとなく、今までは、殺さないようにしまあ、そこには殺したことがあるような言い回しにも聞こえるしかし……怖いし。
（しかし……）
落ち着いてからこの妄想癖の、思い出したが、リマ症候群――本当に狙えるのか？これは……このロボット娘を相手に。
となると、誰かまま自分一人で対処しようとしても、ダメっぽいな。
と、俺は――に力を貸してもらわないといけないな。
膝を抱えたままカモメを見ているレキに。
そして……さっきのケンカは……
レキもレキだったが、アリアもアリアだぞ。
事情聴取の手順がなっちゃいねえ。
断片的な事象や証言を勝手に繋げて、誤解する。いつもの欠点が丸出しだ。

アリアは、敵と戦う時の直感は優れているが、誤解をし、それに基づいて動く悪癖があるようだ。

イ・ウー戦を乗り切る中では何度も助け合って戦ったこともあってか、少しはいい奴だと思ったりもしたが……取り消しだ。

やっぱりアリアは、思い込みの、独断専行の、凶暴女だぜ。

3弾 修学旅行(キャラバン)I

装備科棟(アムドとう)は地上1階・地下3階と、地下部分の方が広い。
地下、といっても学園島は人工浮島なのでその辺微妙だが。
セキュリティー管理の厳重な1階から階段で地下に降りると……無数の銃器がラックに収められ、廊下の果てまで並んでる。
いつ見ても剣呑(けんのん)な空間だな。ここは。
俺(おれ)と俺についてきたレキ・ハイマキが廊下を渡り、『ひらがあや』と平仮名で書かれた表札のついたB201作業室をノックすると——
「はーい！　開いてますのだー」
中から、子供みたいな平賀(ひらが)さんの声が返ってくる。
扉を開けると、室内は激安の殿堂・ドンキホーテみたいに物・物・物だらけだ。
大小様々の工具、古今東西の銃の部品……コイル、グリップ、プラスチックのケースに収められた何百種類ものネジやピンが雑然と天井まで積み重ねられている。
「平賀さん、俺だ。遠山(とおやま)だ」
部品のジャングルと化している室内を、俺はヘタに触らないよう屈(かが)んだり横向きになっ

たりしながら奥へと歩く。
奥の作業台にはテレビとDVDデッキが載っていて、女児向けのアニメが流れていた。
その脇で――バチバチッ！　と何かを溶接していた平賀さんが振り返り、
「おおっ!?　と遮光ゴーグルやまくんが、レキさんを連れてるのだ！」
「これは……連れてるっていうか、ついておでこに上げ、無邪気な瞳で俺とレキをまじまじ見回して尋ねると、
「デキてるのだ！　お似合いの2人なのだ！」
と俺が周囲を見回してくるんだ。それはそうと……できてるか？」
「いや、そうじゃなくて……」
と、平賀さんは左右の手で俺とレキを指す。
「あはっ！　デキてるのだ！」
「デキてない。依頼してたモノは出来上がってるか、って聞いたんだろ？」
……ゲンコツをくれたろか。
もう一度尋ねると、平賀さんは頭の上に見えない豆電球を点した。
「あはっ！　ごめん注文の品も、できてるのだ！　できてるのだ！」
そして、ゴミした道具棚に……もぞもぞ。
リスが木のウロに潜るように、頭から上半身を突っ込んでいく。

そうやって取るしかないらしい、棚の奥に手を伸ばしているんだなもうちょっとで、届くのだ「うぬぉうー！」

SSS（トリプルエス）サイズの制服を棚の釘（くぎ）に引っかけつ、下半身だけになったフリフリ、小学生みたいに細い足をジタバタさせている。

ていうか……よく、こんなに物があるのに何がどこにあるのか把握できてるな。

まあ、平賀さんはアメリカの武器メーカーから青田買いでスカウトが来ていたぐらいの天才少女だ。普通の人とはアタマの構造がちょっと違うんだろう。

……ずる、ずる。

あ、出てきた。

「これ、西洋刀剣なのに、超一流の日本刀と比べても遜色（そんしょく）ない大業物（おおわざもの）なのだー！」

髪にネジとかバネをくっつけつつ出てきた平賀さんが、ぎらり。

それ自体が発光しているかのように鋭く輝く、両刃剣（りょうばけん）を渡してくる。

おお。ちゃんと現代化できたんだな。

俺（おれ）が受け取ったそれは、イ・ウーでシャーロックが使っていたスクラマ・サクス。

戦いの最後、ICBMによじ登る際に借りたのを持ってきてしまったのだが……やたらまだ借りている。柄（グリップ）を俺の手に合うような硬質プラスチックの柄に付け切れ味がいいので

直してもらい、秘匿用の鞘も注文したんだが――

制服の背中に収めると、うん、キレイに収まった。

「それと、こっちもご注文通り改造できてるのだ。フルオート機構もつけたのだ！」

平賀さんは小さな両手で、今度は剥き身の銃を渡してくる。

ずしり、と重いその大型拳銃は――デザートイーグル。

世界最強の自動式拳銃の一つといわれる、父さんの形見だ。

そのマットブラックの銃身を、チラ、とレキが見る。

「ここまでの魔改造ができるのは、装備科でも文だけなのだ！　えっへんですのだ！」

と、アリア並にぺったんこの胸を張る平賀さん。

壁の方に銃を構えてみつつ、俺は照星の向こうに、ジャンヌ、ブラド、パトラ、シャーロック――今まで戦ってきた超人たちの姿を思い浮かべる。

……残念ながら、俺はまだ武偵高の生徒。

イ・ウーだって、組織としては崩壊させたが――残党は取り逃がしたままだ。いつ何時、あいうマンガじみた超能力者に襲われるとも限らない。

それに対抗するには、こっちも武装を強化しておくべきだろう。

そう思って、俺は父さんの遺品の中からこのDEを引っ張り出してきたのだ。

このDE（デザートイーグル）は50AE弾という、ベレッタで使う9ミリパラベラム弾の約3倍の威力を持つ拳銃弾（けんじゅうだん）が使える。

しかし、拳銃とは……ゲームみたいに、強い銃を装備すればすぐ使用者が強くなるものではない。簡単に言えば、使用者の手がその銃に慣れるまで練習しなければいけないのだ。

特にこのデザートイーグルは、銃身も反動もズバ抜けて大きい。

父さんは身長2m近い大男だったから易々（やすやす）と扱えていたが、俺（おれ）には重すぎ、強力すぎるタイプのものだ――にDEを収めた。

シロモノだ。使いこなすには、余程の訓練が必要だろう。

なので、しばらくは――ヒステリアモードになれた時だけ、使うようにしよう。

せっかく強い銃を持ってても、命中させられなかったんじゃ意味がないからな。

と、俺は構えを解き、平賀（ひらが）さんがサービスでくれたホルスター――胴の側面に吊（つ）り下げるタイプのものだ――にDEを収めた。

横から、平賀さんが円（つぶ）らなお目々を無邪気にキラキラさせて見上げてくる。

「うーん、遠山（とおやま）くん、かっこいいのだ！　黒いDEは、暗い男に似合うですのだ！」

「ねーレキさん！」

……こくり。

うなずくなよレキも。

「レキさんもまた貫通弾の部品を買って下さいなのだ。硬化タングステキな弾頭をじゃらじゃら用意しておくのだー。いつもまいどありー♪」合わせたお手々を片頬にくっつけて、平賀さんがニコニコと営業スこくり。

どうやら平賀さんの顧客の一人らしいレキが、それに頷く。

……俺にも武器を売り、レキにも武器を売り、俺たちが戦えば戦う儲かるわけか。自分では一切戦うことなく。武器商人ってのは、すごが、末恐ろしい人だよ。

無邪気な顔してる平賀さんは。

レキと暮らし始めてから、さらに数日が流れ――

『リマ症候群』狙いのレキ人間化計画に、小さなチャンスが訪れた。

その日は水泳の授業があったのだが、また婚活に失敗したらしい体B組の男子生徒に八つ当たりして暴れ、プールを壊した。素手でどう想像もつかないが、強襲科の教諭も兼任している怪力女の蘭豹ならやで、プールの修理に時間がかかり……C組の女子が予定していた水延期されたのだ。

その放課後――ノゾキっぽくてイヤだったが一応プールを確認してみると、レキは他の

女子たちに混じってスクール水着姿でちゃんとプールサイドに並んでいた。

（これでしばらく、自由行動ができるぞ……！）

と、俺（おれ）は剣と銃が1つずつ増えてちょっと重くなった体で――魚肉ソーセージで釣ったハイマキを体育倉庫に閉じ込め、協力者と落ち合う場所に向かうのだった。

学園島の中央辺り――第二グラウンド脇（わき）のテニスコートに着くと……。

ポーン。ポーン。パシュッ。

……と、金網（フェンス）の向こうでテニス部の女子が白いウェアに身を包んで汗を流していた。

それに引き替え、あいつらはコートの中で健全な青春の一時（ひととき）を送っているわけだ。

キャー！　ジャンヌさーん！

こっちは金網（フェンス）にへばりついて、囚人（しゅうじん）みたいだぜ。あるいはノゾキ犯か。

とコートの隅から1年と思われる女子たちが黄色い声を上げているのでそっちを見ると、

そこでは――ビシュッ！

細長くまとめた2本の銀髪おさげを頭の上でポニーテールみたいにまとめたジャンヌが鋭いレシーブを放ち、縦ロールのテニス部員と激しいラリーを繰り広げていた。

（ていうか……）

いま、思いっきり見えちまったぞ。

ジャンヌのテニスウェア――
そのスカートがチラッと、あるいは
バシュッ、ビシュッ、レシーブを打つ動作で勢いよく捲れ上がったのが
と、ラケットを振るうたび……
純白色をした3段フリルのアンダースコート見せてもいい用のスポーツウェアだ。
いや。分かってる。あれは下着じゃない。
これはその辺をしっかり割り切れない俺の大脳視覚野が悪い。
だが……問題はあの下着っぽいパーツだけじゃないぞ。
日本人離れした（というか日本人じゃないんだが）足の長さを誇るジャンヌは、意外と
むっちりした、肉付きのいい太ももをしているのだ。それも、真っ白な。
スカートが捲れるたびにそれが丸出しになるのだから、たまったもんじゃない。いかん
だろあれは。
ちくしょう。女子のテニスウェアってやつは、何でああも下半身を見せびらかすような
デザインになってんだ。考案したヤツ出てこい。俺（おれ）のスクラマ・サクスでボコってやる。
……っていうか、これじゃ俺、本当にただのノゾキじゃねーか。
俺はただ、ジャンヌに会いに来ただけなんだ。
と、あらぬ嫌疑をかけられぬように顔を伏せ、ヒステリア化しそうな己（おのれ）自身との戦いを

心の中で繰り広げていると……ラリーの音が止んだ。
ソーッと顔を上げると、どうやら圧勝したらしいジャンヌが後輩に下さい！」などとキャーキャー駆け寄られながらコートから出てきて……モテモテだな、ジャンヌ。女子にだけなんとなく分かるが、あいつは女子の目にキラキラしてて、まるで王女様みたいな扱いも魅力的に映るタイプの美人なんだろうな。
――司法取引により、イ・ウーから武偵高に所属し、テニス部に入り、ああやって充実した高校生活を送っている。
それに対し、春に地下倉庫であいつを倒したハズの俺は……ロボット少女やオオカミに拘禁されて、何をやってるんだか。
と、鬱になりかけてうなだれる俺は――
「――遠山」
ようやくこっちに気付いたジャンヌの声に「このタオル使って。急げ」
と手招きするのだった。
結った銀髪を一部解いて背中に流し、制服に着替えてテニス部のクラブハウスから出て

きたジャンヌは……
俺から2m半ぐらい離れた所で、ぴた。
「あまり近づくな。遠山」
「なんでだよ」
「私はさっき、クラブ活動でほんの少し汗を
と、ジャンヌは肩に提げたラケットを少し突き出して見せる。
「だが、お前が急げというからシャワーをかいた」
しかし、香水と浴びるヒマが無かったのだ
身体を拭き、香水で誤魔化したに過ぎん」
……相変わらず生真面目なヤツだな。
「そんな事は気にしない。話しながら歩くぞ」
ふわ、と風が吹くと——確かに、ジャンヌの方から若草のような
全然、汗くさくない。さすがは高貴な血筋のお嬢様だよ。
昔、兄さん……
もので、女性本体というかカナに聞いたことがあるが……香水とはそれ単体では不完全な
いまのジャンヌの甘い匂いに組み合わさることで最もいい香りになるんだとか。
硝煙のニオイが、まさにそれだな。
くしの武偵高の中で、とても爽やかな存在だよ。おまえは。

ジャンヌはちょっとためらうように眉(まゆ)を寄せてから――姿勢よく歩いてきて、俺の横についた。

歩く動作でチラッと見えたが、ちゃんと校則を守ってスカートの中に帯銃してるな。

――ツァスタバ・Cz100か。いい銃だ。

「お前がアリアと別れてレキと組んだ事――情報科(インフォルマ)でもちょっとしたニュースだったぞ」

「何でだよ……俺なんか、話す価値も無い存在だろ」

「自分では知らないかもしれないがな、遠山。お前は武偵高、特におおやけ公には取りざたされないがな。私も、お前の評判を聞いて少し嫌がると思って密(ひそ)かに一日(いちもく)おかれて強襲科(アサルト)では戦闘能力に見直したぞ」

しかも、よりによって強襲科に目え付けられてんのかよ。未(いま)だに死ね死ね団(マスターズ)

「教務科のデータにも書かれていたぞ。調子に波はあるが、次期リーダー格の最有力候補としての資質あり――ただし他人との協調性に乏(とぼ)しいなど、性格に難あり。となw」

「ま、まあ……俺の事はどうでもいい。それよりレキの事だ。何かあったか」

性格に難ありうるせえよ。

「教務科のデータにも書かれていたぞ。調子に波はあるが、次期リーダー格の最有力候補としての資質あり――ただし他人との協調性に乏しいなど、性格に難あり。となw」

「ま、まあ……俺の事はどうでもいい。それよりレキの事だ。何かあったか」

アリアの時にも思ったが――武偵対決の相手はどんなヤツなのか？　何か弱味はないか？　好きなもの、……などの特徴を先に把握した方が、圧倒的に有利になる。

とはいえ自分で動くとすぐバレるので、4月には探偵科の理子に調査を依頼したものだが、今回はイ・ウーで理子に情報処理のイロハを教えていたというジャンヌに依頼している。

弟子より師匠の方が優秀だろうし、理子はレポート中に余計な冷やかしが多いからな。

「一流の狙撃手は――大抵、自分の情報を隠すものだ。レキもその傾向がある。従って、彼女について知ることのできる情報も極々限られたものだった」

まあ、そうだろうな。

一緒に暮らしてても、何も分からないしな。

「ただ、過去の履歴は洗えた。武偵高に入ってからの任務成功率は100%、文句無しのパーフェクトだ。ただ、仕事の選り好みは激しいようだがな」

「どういうことだ」

「レキが受けてきた仕事は、3つのパターンしかない事が分かった」

「3つのパターン……？」

「1つは教師に命令された仕事だ。優秀な生徒には、希に教務科から指名で依頼があって

……余程の理由がないと拒否できないかわり、単位が大幅にもらえてお前も1年の頃にはたまにあっただろう」

そういえば……強襲科にいた頃は、あったな。そういうの。

その頃を思い出しながら、俺は缶コーヒーを買おうと道ばたの自販機にコインを入れる。

「――2つ目は、LDスコア900以上の任務だ」

「900……!?」

俺は驚きながら自販機のボタンを押す。

LDスコアとはLevel of difficulty score。武偵の任務における、難易度の目安だ。俺はあまり気にした事は無いが、格付け専門の非営利団体が依頼者向けに報酬の値付けの参考として付けている。

スコア300～400で学生武偵向けの仕事、500～700でプロの武偵向けの仕事、というのが大体の目安なのだが……

――900以上とは。

一流の武偵企業でも、トップクラスのエリートじゃないとできない仕事だぞ。

「あっ……驚きすぎて、間違ってホットを買っちまった」

まだ、外はかなり暑いのに。

俺が呟きながら無糖ブラックを取り出すと、ジャンヌがそれを横から取り……

「……最近、私の魔力は不安定なのだがなこれくらいはできる」

ぼん、と返してくれた缶コーヒーは……冷たくなっていた。

へえ。銀氷の魔女・ジャンヌは、こういうこともできるのか。便利だな。

「レキは……そういった、極めて高難度の狙撃任務を何件も受けていた、100%というのは、もはや超能力者・魔法使いの部類といえるな」

自分も超能力者で魔法使いのくせに、ジャンヌは感心したような顔で言っている。

「……3パターンって言ってたよな。3つめは何だ」

「レキがか？」

「『鷹の目』だ」

「鷹の目……？」

ちょっと意外な内容に、俺は首を傾げる。

『鷹の目』とは、狙撃手の優れた視力を活かして遠隔から対象者を見張る――監視任務の隠語である。

報酬も単位も安く、通常は狙撃科の未熟な1年やインターンが受ける仕事なのだが……

「遠山。お前も監視されていたのだぞ。少なくとも、過去2回」

「……何だって？」

「1回目の依頼者はアリアだ。日付は4月2日。探偵科からお前が出てくる所を待ち伏せできるよう、レキに『鷹の目』を依頼していた」

ああ。あの、青海で迷子のネコ探しをする前の事か。

アリア対策を練ろうと校外に逃げるため、任務を受けた直後――俺は、探偵科棟の前で待ち伏せしていたアリアに出くわしている。

あれはレキが遠くから俺を見張っていて、アリアに連絡を入れてたのか。

余計なことしやがって。

「7月には、教務科が出していた第三男子寮の監視も引き受けているし……武偵高でも、警戒を強めていたのだ。あの頃、空き巣に気をつけるよう警視庁から連絡があったらしく……武偵高でも、警戒を強めていたのだ。

それをレキが受けた」

それも覚えてる。俺の部屋で、白雪がバニーガールの姿をしたアリアにM60を斉射した時のことだな。あの時、レキは俺の部屋をドラグノフのスコープで見ていた。

「レキが受けた『鷹の目』は、更に内容が限られていた。お前か、アリアか、星伽白雪が対象者に含まれる場合のみ、受けていたのだ」

「俺か、アリアか、白雪……？」

どういう取り合わせだ？　よく分からないな。

ただ、一つ分かったのは……レキは前から俺とその周囲に目を付けていたって事だな。

知らぬは、俺ばかりか。

「一次調査で見つけた情報は他にもあるが、未確認のものが多い。速報できる確認情報はその程度だ。逆に――お前は、何か持ってきたか」

俺は先日のレキとアリアのケンカの後……ジャンヌに自分がレキに狙撃拘禁されている事、リマ症候群を狙って「レキの身の回りから、何か調べる手がかりを持ってこい」と要請されている。

その際、ジャンヌに「レキの身の回りから、協力を依頼していたのだが……

「持ってきた――音を」

と、俺は携帯を取り出す。

「音？」

「レキはいつもヘッドホンをして、この妙な音を聞いてるんだ。昨日浴びてる間に、ヘッドホンに繋がってたMP3プレーヤーを拝借して携帯でコピーしてきた」

「シャワー……？　お前たち、どういう暮らしをしているんだ」

何か疑うような目でジャンヌが言ってきたが、それはとりあえず無視だ。

俺は携帯用のイヤホンをつけて、ジャンヌに片耳分差し出す。

「聞け。これで何か分かるか」

「む……」

俺たちは立ち止まって、片耳ずつそれを分けて聞いた。

事前にも聞いていたその音は……ちょっと不気味なことだが、本当にただの風の音が

何時間も流れているだけのものだった。
「……」
コードが短いので、俺たちがちょっと頭を寄せるようにしてそれを聞いていると……
さら。風に揺れた、俺の顔に少しかかる。
う。イヤだな。たジャンヌの長い銀髪が、
しかし、ここはこの女っぽいカンジ。
ガマンだ。
「――ここだ。小さい音だが、雑音が入る。風じゃない。何かは分からないが……」
「ふむ……」
ジャンヌは目を閉じて、真剣な表情で音に集中している。
俺はジャンヌがどうコメントするか待つ間、その顔を見ていた。
……

……それにしても……美人だよな。コイツはコイツで。
長い睫毛。スッと通った鼻。薔薇の花弁みたいな唇。
このクールな印象。魔女というより、女優みたいだ。
「私には分からない。だが、これは手がかりに……な、何だ遠山。なぜ私を見る」
喋る途中でサファイアのような碧眼を開いたジャンヌが、俺に至近距離から見られてい

た事に気付いて頭を引く。

「い、いや、お前が何か言うのを待ってたけだ」

コードがつっぱったので、耳から抜き…俺は今の音声ファイルがSDカードをジャンヌに渡しつつ、彼女の言葉を待つ。

なぜか少し赤くなっていたジャンヌは、おほん、と咳払いしてから

「これは、手がかりになるぞ。相談する相手に心当たりがある」

と、腕組みして人間に挟んだSDカードを示すのだった。

ジャンヌがアイブルーの携帯でその『心当たり』と連絡を取りながら、俺を案内した先は――通信科のお隣で、通信機を使った支援を教わる学科だった。

通信科か……俺はあまり入ったことがない。

「私はここの中空知と仲が良い」

その珍しい名字に思い浮かばないが……声・・知っ・・ている。

――中空知美咲。

通信科の2年で、彼女は強襲作戦時のオペレーターをよくやってくれる生徒だったからだ。

というのも、彼女の武偵は、作戦中に無線つきのインカムで連絡を取り合う。

武偵――特に強襲型の武偵は、作戦中に

大規模な作戦の際には、その連絡が錯綜したり混乱したりしないようつくのだ。

オペレーターは通信科に陣取り、チーム到着時刻や天候の変化など、戦闘中の武開始するまでの状況はどうだったか等を中空知だった。つまり彼女は、あの一件に伝える不明瞭なオペレーションは、いつも完璧だった。常に冷静に、何人も何より、言葉の発音がＮＨＫのアナウことが一度もなかったしな。

（でも、優秀な割にオペレーターが俺はあの美声しか聞いたことがないが向こうは武偵のインカムについてる小俺が中空知を見るのは初めてだ。

女子なのはいたけないが、きっといそんな事を思いつつ、俺はジャンヌにかにも優等生ってカンジのヤツ『ついてこい』などと言われつ——

通信会社みたいな趣のある通信科棟に、ジャンヌに案内された音響学講義室は、あった。

スリッパに履き替えて入った室内は……見回すと、音響関連の装置が整然と並べられている。放課後なので、人けがなく、電子機器のニオイのする教室に佇んでいると……俺とジャンヌがとたとた、と、

「――ジャンヌさん？」

たくさんヘッドホンを抱えていたせいで、

「お、おいっ」

俺の警告も間に合わず、どしんっ。

「はわぁっ！」

俺にぶつかってきた。床に尻餅をついてしまった。

……どたっ。

びょん、と銀縁メガネが宙を舞い――俺がそれをキャッチする横で、彼女は抱えていたヘッドホンをまき散らし、コードを頭やら腕やらに絡めてしまっている。

を履いた足やらに、赤い爪先の上履き

「ひぁあぁ」

その女子は長い後ろ髪だけではなく……前髪も長い子で、目がほとんど隠れてしまっている。

むかし理子に買ってやったギャルゲーの男主人公が、こういう前髪をしてたよな。

よくは知らないが流行ってんのか、それ。

（……うっ……）

――転んだせいで、足元で藻掻いている彼女のスカートがマズい事になってる。

普通の男子だったらラッキーと思うところなんだろうが、俺はアレだ。視線を上の方に逸らして、間違っても太ももの内側とかを見ないようにしないと。安全第一。

「大丈夫か、中空知」

俺の横から、ジャンヌが彼女に声をかけている。

え。

この人、中空知……さん？

コードを解こうとしてなぜかむしろ複雑に絡まっていく女子に視線を戻して、俺は目を丸くする。

ず……随分、オペレーターをやってくれてた時は、シャキっとした人に思えたのイメージと違うな。

に。

ジャンヌにコードの戒めを解いてもらった中空知さんらしきその人は、ハイハイのポーズで「めがねめがねね」と、マンガみたいに手探りでメガネを探しているのを見て、自分のシッポを追いかけてる犬みたいに、四つん這いのままその場をグルグル回り始めたぞ。大丈夫か。……っていうか、制服姿で這ってるからなんとなく分かってしまったが……で、でかいな……胸。白雪級だぞ。雰囲気的にはともかく、見た目的には危険な女子だ。前髪の間にチラチラ見える目も、ちゃんと美人系だし。なんだか話しかけるのも忍びない感じだったので、ほれ、と犬に骨を差し出してやると……さっきキャッチしていた銀縁メガネを手にし、ふらりと立ち上がって……中空知さんは「ふぇ！」と声を出し、メガネを手にし、ふらりと立ち上がって……「……ど……どちらさま……ですか……？」

んぅーっ？　と眉を寄せ、目を細めて俺の顔を覗き込んできた。ずいぶんと近づけてくる。息がかかるほどの近距離まで。それでも見えないらしく、どんどん顔を近づけてくる。息がかかるほどの近距離まで。よっぽど目が悪いのか、長い前髪のせいで視界が悪いのか、その両方なのか。

「!!」

カサカサカサッ！　ばしんっ！

と後ずさり、防音壁に背中を叩きつけてるぞ。

「あ、わわ、だ、男子が、おとっ、おとこ、いやっ、いいです！　おとっ、おと、すきっ、ですから！　頭の中では、本当は！」

わたわた。

何を言ってるのかよく分からない上に尋常じゃない慌て方をして、髪のせいで下半分しか見えないが、顔を一気に赤らめた。アリア並の急速赤面術だな。

「じゃ、ジャンヌさん、急に、急に急に、男子を連れてくるなんて……あわぁ、わぁ」

壁際に背をつけたまま……ずり。

ずりりり……

彼女はなぜか警戒心むきだしで、中途半端に膝を伸ばす。

それで……伸ばしたつもりなのか。すごいX脚だな。白雪の比じゃないぞ。

そして、ビクビクと怯えながらメガネをかけつつ……

「め、メガネ、あ、あり、ありありが、ございます、すら言えてない。

ありがとうございます、すら言えてない。

滑舌の悪いことと山の如しだ。

「人違いだろこれ」

と俺がジャンヌに振り向くと、

「中空知は中空知だ。お前は私の人選に文句をつけるのか？」
キッ、とジャンヌに睨まれたので……
仕方なしに、俺はもう一度その中空知さん……らしき人物に向き直る。
「ひぃ」
俺に見られただけで、彼女は手にしたヘッドホンで頭を守っている。
「すっすみませんすみませんっ！　すみっ、すみませんっ！」
「いや、俺はまだ何も……」
「わ、わわ、私、じゃじゃじゃジャンヌさんが、ジャンヌさん1人で、ジャンヌさんだけが来ると思ってたので、おとこっ、じゃない、男子が来るって思ってなかったので、心の準備ができてなくてっ！　興奮してしまって！　あっ、興奮といっても、性的興奮では、なくてですねっ！」
わたわたわた。
手話みたいな状態で、中空知さんは両手を上下左右にジタバタさせてる。
「く、くるなんて、かっこいい、しかも、思ってなかったから、い、いた遠山君が、ががが、ぴぃ」
なんか……英語のテストの『この文章を正しい語順に並べよ』みたいな状態だな。
まあ話の内容は微塵も分からないが……

この声、たしかに中空知だな。残念なことに。

ていうか……ちゃんと会話できんのか。この人。

「遠山、中空知はお前と同じで、少々性格に難がある。そっちの壁際に行っていろ」

ぴし、とジャンヌが俺を見ながら部屋の奥を指したので、「同じってなんだ、同じって」

とボヤきながら壁際に行くと……

ばっ。

中空知はスカートのポケットからケータイを取り出して、ジャンヌから何か教わると、

ぴぽぱぴぱぱぴ！　目を見張ってしまうぐらいのスピードで電話番号を入力した。

……誰にかけてんだ。

と思ったら、俺のケータイから『花のうちに』のメロディーが流れた。

え。俺？

「……はい」

一応、出ると。

「――初めまして。と申し上げるのも奇妙ですけれど、お会いするのは初めてですよね。中空知美咲です。先程は、失礼いたしました」

アナウンサー喋りの、それは正しい日本語が聞こえてきた。

え？

と、中空知の方を見ると、ジャンヌが通せんぼのポーズで彼女の姿を隠している。
「私は少々上がり症なところがありますので…失礼ながら、このように通信機を介してご応対させていただきたいのですが――よろしいでしょうか」
「ああ……別に、いいけど」
な、なんだ。この態度の変化は。
よく分からないが、中空知は通信機さえあれば堂々と喋れる性格らしいぞ。というか、無いとダメなんだな。俺が言うのも何だが、変わった人だ。
ごにょごにょ、と背後を振り返ったジャンヌが中空知に何かを告げている。
「――ご用件は、このマイクロSDに入ったファイルの音響分析でよろしいでしょうか」
俺は戸惑いつつも、中空知にそう返す。
「それは狙撃科（スナイプ）のレキがヘッドホンでいつも聞いている音なんだ。アイツは故郷の音とかくれってのも、ムチャな頼みとは思うが――」
言ってたけど……風の音みたいな雑音しか聞こえない。映像も無しに音声だけで分析してくれ」
「――いいえ。少なくとも、私には映像のように見える。音は、映像よりも物を語ります。それに私は一般学科でレキさんと同じ2年C組に在籍していますから――ヘッドホンにも見覚えがあります。レキさんのヘッドホンは……これです。ゼンハイザーのPMX990。

爽(さわ)やかな音質が特徴で、高音に強い名品です。少々お待ち下さい」

がぼ、と、ジャンヌの陰で中空知(なかそらち)はオレンジ色のヘッドホンを被(かぶ)り——

「……」

しばらく、黙ったんだな。

音を聞き始めたんだな。

ここは俺(おれ)も、黙って待とう。

というか向こうはヘッドホンで耳がふさがってるしな。

「……とても……広いところ……」

すぐさま、中空知の声が俺の携帯から聞こえてきた。

どうやら音から分かることを、携帯越しにレポートしてくれている。

「音の反響と速度から考えて、録音場所は広い草原で——高い海抜(かいばつ)の森が散在しています。針葉樹(しんようじゅ)の森。木の葉の擦(こす)れる音は……これは、お、おいおい。

音だけで……そんな事まで分かるのかよ。

そういえば——探偵科(インケスタ)で習ったことがあるな。

電話などの通信を傍受(ぼうじゅ)した際に音から場所を特定する、音響捜査という手法があるとか。

だが普通、それにはコンピューターと特殊なソフトウェアが必要になるものだ。

Larix sibirica シベリアカラマツ」

中空知はそれを、耳だけでできるらしい。目の代わりに、耳がいいな。

「低木の植生も併せて考えると、モンゴル北部から東シベリア……？

……モンゴル？　シベリア……？

淡々と伝えてくる中空知の声に、俺は首を傾げた。

「馬の呼吸音が聞こえます。あまり大きくない、半野生の……たぶんプシュバルスキー馬、モンゴル古馬の末裔と思われます。あと、狼の声も……こちらは逆に狼にしては大きい。ハイイロオオカミの亜種、ツンドラオオカミと思われます」

動物の声まで分かるのか。凄いな。

俺には、ただの雑音にしか聞こえなかったのに。

「あっ。人の声がしました。すごく遠い所ですが、会話しています。古いモンゴル語の単語のようですが――日本語と、この音の謎は、深まるばかりだ。

言語です。ロシア語も交ざっている」

中空知の聴覚と博識に驚く一方で――この音の謎は、深まるばかりだ。

レキの故郷は……海外だったのか？

と、俺は眉を寄せつつ……腕時計に目をやる。

ああ……マズいな。そろそろレキのプールの授業が終わる。

あまり離れた所にいると、狙撃されかねないぞ。

俺は携帯を閉じ、中空知の方に――

「すまないが、もう時間があまりない。俺は失礼するが……後で、めてメールしてくれないか。そのマイクロSDは貸す。あとで返しと言うと、通信機を介さず話しかけられた中空知は――

「かっ……かか、返しに……？　だッだッだ、男子寮に、す！　だって、て、適切な下着がありません！」

元の残念な人格に戻って、なんだか分からない受け答えをしてくなんだ、下着って。

ていうか男子寮に来いなんて一言も言ってないだろ。

と、本当に変わり者ばかりの武偵高に溜息をつきながら……俺がしようとすると……ぐい。

ジャンヌに腕をつかまれた。

「……なんだよ」

「……」

ジャンヌは無言で俺を小教室から押し出し、廊下の左右に人がい……耳打ちするように、小声で語りかけてきた。

「遠山、気をつけろ」

「……何にだよ」

「レキだ。すぐには確認できなかった情報だから言わなかったのだが――レキは武偵高に入る前――14歳頃から、日本だけではなくロシアや中国にもいたらしい。まだ武偵ライセンスの国際化にロシアと中国が批准する前、そこで武偵免許を取得していたからな」

「……何をやってたんだ、アイツ。そんな外国で」

「その記録が無い。何もしていなかったか、記録に残らない仕事をしていたのだ」

「『記録に残らない仕事』……？」

「言いにくいが、言ってもいいか」

「言えよ」

「たとえば、『殺し屋』だ」

――まあ、そうだろうな。

この業界、記録に残らない仕事といえばそのぐらいのものだ。

たとえ正当防衛でも武偵による殺人が禁止されているのは、日本と西欧諸国ぐらいのもので――現実問題として、いるところにはいるのだ。殺しを専門とする武偵も。

そしてその約7割が、狙撃を得意とする武偵と言われている。

どの国も当然、その辺の情報は非公開にしてるけどな。

「――今のは、聞かなかった事にする」

俺はそう言って、窓の外を見た。

レキ……

お前はどうも、只者じゃなさそうだな。

まあ、なんとなくそんな感じはしてたけどな——はじめから。

「遠山。お前がレキに狙撃拘禁されているというのなら、この問題、早めに解決した方が良さそうだぞ。協力の依頼は確かに受けたが——リマ症候群を狙うなら、最終的にはお前自身がレキと良好な人間関係を作らなければならないのだからな」

「そうしようとしてる。だが、なかなか上手くいかないんだ」

「いや、幸い——お前とレキは男と女だ。策はあるぞ」

……男と女？……策？

なんか、イヤな予感がするな。

「どうしろってんだ」

「お前はレキと連れだって街に行ったことはあるか。いわゆるデート行為だ」

「で、デート行為って……いや、デートじゃないが、台場で一緒にラーメンは食った」

「レキに食事代を払わせたりしてないだろうな」

「アイツは払ってない」

と言うとジャンヌはちょっと驚いたような顔をしつつ、

「お前にしては上出来だぞ、遠山。レキは喜んでいただろう」

「いつもと変わらなかったぞ」
「いや。心の中では喜んでいたハズだ。それだったとしても構わない」
正確にはタダだったんだけどな。
超壺麺、30分以内に食べたから。
「つまりそうやって、レキを優しく女扱いしてやれ。これは男がすることでのみ効果的だ。それを繰り返すことで、レキとの人間関係は良好なものになる。そうだ、いいことを思いついたぞ。もうすぐ修学旅行Ⅰだろう。その自由行動の時間を利用しろ」
「自由行動を利用……？」
「旅先でレキと連れ歩き、女が喜びそうなことをしてやるのだ」
「女が喜びそうなこと……って何だよ。自慢じゃないが、俺はそういうのは全く分からん。もう少し具体的に教えてくれ。お前、女なんだから」
「そうだな――古典的な方法だが、贈り物でも、それで仲直りできるほどの効果がある」
仮にケンカした相手とでも、身につけるものを男性にもらうと一気に心理的距離が詰まり、好意的になるものなのだ。
「……どういう店で買えばいいんだ、そんなもの」
「たとえばブティックとかだ」

ブ、ブティックぅ……

古い言い方だなぁ。

いや、ていうかだな……

「レキは、オシャレとかそういう事には興味が無いと思うぞ……」

「いいか遠山。服に興味のない女はいない。これは世界の法則だ」

キリッ、と真顔で言うジャンヌに、ちょっと猜疑心が湧いてきた俺は……

「じゃあお前は嬉しいのか。たとえばブティックで、好きな服を俺に買ってもらったら」

と、適当に例を出してみる。

すると……予想外の質問だったのか、

「私の好きな服だと？」

ジャンヌはキョトンという顔をしてから……らしくない態度で、少しうつむいた。

「――だ、ダメだ。きっと遠山はそんな服を着た私を見たら……変に思うぞ。私は自分の私服の趣味が自分に合っていない事ぐらい分かっている」

「お前の服の趣味なんか、どうでもいいだろ」

「なら、たとえば……あくまで、たとえばの話だが――少女趣味で花柄の、ヒラヒラしたロングスカートでも構わないのか。いや、これは喩え話だがッ」

たとえばの話と言ってるのに、なんか少し身を乗り出してきたぞ。なんだコイツ。

「――別にいい。お前が嬉しいか嬉しくないかだ興味もないしな。
「う、嬉しいことか着ないが、買ってくれるならお前にだけは特別に見せてやらない事もない。誰にも言わないと約束するならな」
何やら本当は見てもらいたいような言い方で語る、妙なテンションのジャンヌだが……
まあ、つまり、嬉しいんだろうな。男に服を買ってもらうってことは。それは分かった。
ジャンヌでさえそうなら……レキにも、少しは効き目があるのかもしれないな。
だが、俺にとっちゃ一番難しい任務だぞ。まだ戦闘の方がマシだぜ。参ったな。
そういうのは。

9月14日――
修学旅行という名目の、チーム編成の調整が始まった。
実際のところはこれは修学旅行ではないので、旅程表……いわゆる『旅のしおり』にも、
『場所　京阪神（現地集合・現地解散）
1日目　京都にて社寺見学（最低3ヶ所見学し、後ほどレポート提出の事）
2日目・3日目　自由行動（大阪か神戸の都市部を見学しておく事）』
としか書いてない。
引率の先生もいないし、これ、東京都の教育委員会に見つかったら怒られるぞ。

と、何の役にも立たないしおりを丸めて捨てた俺は――

東海道新幹線のぞみ101号から、京都駅に降り立った。

道中ほとんど寝てたから実感は無いが、やっぱり早かったな。新幹線

7時頃だったのに、9時過ぎだぞ、まだ。

……とこ、とこ。

俺の背後からは、レキとハイマキも新幹線を出てくる。

「……」

あくまで俺から離れないつもりらしいレキを、苦々しい顔で見ている

同じ新幹線を降りてきた武偵高の女子どもが、こっちを見てヒソヒソ

会話の内容が……。アイツら、車内を歩いてる時に俺とレキがなんとなく読めてしまうもんな。

並んで座ってるのを見てキャーって顔してたもんな。

……早めに市内に入って、人混みに姿を消そう。

ああ……こんなに浮かない気分の修学旅行は初めてだよ。

救いなのは、アリアが裁判関連で修学旅行を欠席したことと……京都分社にいるとはいえ、白雪も街に出てくる見込みは薄いってことだな。

あの辺がレキと鉢合わせしたら大戦争になって、京都の皆さまにご迷惑をかけることになりかねん。主に流れ弾とかで。

「……レキ、お前どこか行きたい場所とかあるか」
ジャンヌの助言も念頭にあったので、俺はダメもとでレキの希望を聞いてみるが……
レキは、ふるふる。
首を横に振った。
「俺も別に見たい場所なんかないけどな。初日は寺とか神社を最低3つは見て回って後でレポートを提出しなきゃいけないんだ。だからこれからけっこう歩くぞ。いいな」
と言うと、こくり。
今度は縦に首を振る。
あー……いつものレキだなぁ。
と、俺は一応買っておいた旅のガイドブックを鞄から取り出し、今さらどこの寺を見るかの旅程を考えるのだった。
清水寺と金閣寺を見て回る間、俺の隣をついて歩いてきたレキは終始無言だった。
ただ、観光客や舞妓さんが行き来してるような人混みを歩く時は、俺が逃げないようにするためか、俺の袖をつまんだりしてくる。
運の悪さに定評のある俺は、そういう時に限ってクラスメートに出くわし、「あっ、腕組んでる」「ラブラブだ」などと良くないウワサの火に油を注いでしまっている。

なので俺は武偵高の人間となるだけ会わないよう……セットで見るメートがあまり来てないという三十三間堂に避け、先に行った武藤の情報によるとクラス移動する。レキは金がかるなぁ。向かった。バスに乗るのも避け、タクシーで仏堂の入口あたりで中をそっと窺い、と確認した俺は（よし、武偵高の生徒はいないな）……

受付で拝観券を買いつつ、壁の注意書きに『武偵育成学校からの修学旅行生の方は、銃器・刀剣類をお預け下さい』と書いてあるのを見て――一応、武器を全部預けた。

「レキ、お前も預けろ」

俺が声をかけると、レキは思ったより素直にドラグノフと銃剣を受付に預けてる。

「……」

俺の命令は大体聞くからな。こいつ。

だがそんなレキに、俺はちょっと疑いの眼差しを向けた。

用心深い武偵は……口腔内に、超小型の折りたたみナイフやデリンジャーを隠し持つと聞いたことがあるぞ。

そういうヤツは「……お前、ちょっと口開けて見せろ」大抵、バレないように無口を通すとか。

と命令すると、レキは俺の方を見上げて…お口をアーンした。
ふむ。
とりあえず、何も隠してないな。
それにしてもちぇえなー。口。
綺麗に並んだ歯も、ベロも、子供みたいだ。
まあ、レキは小柄な女子だから当然なんだが。
「よし。閉じろ」
というと、ぱく、と口を閉じて……小動物みたいにこっちを見上げてくる。
「……じゃ、じゃあ、場所柄もなくレキとのキスを思い出してしまった俺は――
と、視線をハイマキに逃がしてから、堂内に入っていくのだった。
その視線と姿勢に見学するぞ。ハイマキはそこで待ってろ」
三十三間堂は、古くから弓矢の腕を試す場としても有名だ。
１２０ｍもある長い本堂の軒下を利用して和弓を射る「通し矢」とでも形を変えて行われているという。
――言うなれば、狙撃と関わりのある寺と呼ばれる大会が、今千手観音立像が千体、ズラリと並んだ御堂の廊下を歩きながら……

俺は、レキをチラリと見る。
相変わらず……パーフェクトな無表情だな。
仏像の方がまだ表情があるぞ。
というか京都に来て初めて知ったが、仏像はみんな割と色んな顔をしてるからな。
レキは……ここまで120mからなら、ノーミスの心臓でも撃てるんだ。
コイツだったら手の数を数えたりしながらただトコトコと歩いてるもあまり興味がない風で、アリアにこれだけ腕が無くてよかったな、などと考えなくなるぞ、などと考えて苦笑いし……
俺は千手観音のどころか千剣千銃で手に負えなくなるぞ。
あったら双剣双銃、廊下を渡っていった。
（アイツとだったら、賑やかな旅行になったんだろうなぁ）
レキと2人だと、特に感想を述べ合ったりすることもないので……
「……見終わっちまったな」
俺とレキはあっという間に堂内を見終えてしまった。
まだ、昼過ぎだぞ。
1日目は寺社仏閣3つを見て回れというのが決まりだったが、もう3つ見てしまった。
（……どうするかな……）
秋晴れの青空の下、俺はレキと庭のような所に出る。

赤い布がかけられた背もたれのないベンチみたいな物があったからだ。
地元の子供たちが作ったらしい風車がたくさん並んでいるのを、レキが言葉しに眺める。
と、ナナメ下を見つめたままのレキが言ってきた。
ぎく。私と歩きながら、他の女子のことを考えていましたね」
「アリアさんの事ですね」
あ、当たり。
「……なんで分かるんだ、そんなこと」
「さっきそこの廊下で含み笑いしていた顔が――アリアさんに見せる笑い方と一緒でしたから」
きろっ。
と、レキの冷たい目がこっちを見る。
こ、怖っ。
ここが寺――非武装地帯で良かったぜ。
「そっ、それは……まあ、1学期はアイツと組んでたから、ちょっと思い出し笑いをしただけだ」

適当な言い訳をする俺に、レキは――
「アリアさんには近づかないで下さい」
なんとなく、怖い空気……で、警告してくる。
というか、ほんの僅かにだが……レキが何か京都に来てから、初めて喋ってるし。
「お前、怒ってるのか」
「いいえ」
いや怒ってるだろ。
「いいえ」の言い方、キツかったし。
「怒ってるだろ」
「……」
レキは、ふるふる。
首を横に振った。
だが、二度目の否定は――言葉ではない。
つまり、多分少なかれ怒ってるんだろうが。俺がレキと一緒にいながら、アリアの事を考えてたことに対して。
まあ……それは、確かに失礼なことだったかもしれないが……

怒ってるんだとしたら、理不尽だぞ。レキは。
俺とレキが本当の婚約者だってんなら、レキが怒るのも分かる。だが、これはレキが好きで近づいたワケじゃない。
政略結婚みたいなもので……レキは、俺の事が好きで近づいたワケじゃない。
どこからレキに電波を飛ばしてくる――『風』様の命令に従っただけなんだろ。
だから、そういう事で俺に怒るのは筋違いってもんだ。
我ながら、ちょっと逆ギレ気味の理屈だけどな。
……と、俺が少しムスッとしていると……
「私は、怒ることはありません」
そんな俺に、そして自分自身に宣言するように――レキは否定を繰り返した。
「ホントかよ」
「キンジさんも、私のあだ名はご存知と思いますが」
――ロボット・レキ。
自分でも聞いたことあったんだな。レキは、それを。
「人に陰で言われている通り、私は――人並みの感情を抱くことは、ありません。風は、人の『感情』を好みませんから」
「……」
レキの言う『風』は……ずいぶん裏設定のしっかりした妄想だな。

「だから、私は怒ることはありません。笑うこともないし、泣いたこともありません」

淡々と告げるレキに、俺は……黙った。

確かに、俺はレキが感情を表に出したところを見たことがない。

それは常に冷静さを求められる『狙撃手』としてのプロ意識が行き過ぎたパターンかと思っていたんだが……どうやら、それだけじゃないようだな。

この無感情っぷり、レキの『風』妄想とも繋がっていたわけか。根が深い問題だ。

（だが……）

しかし、俺は今の会話の中で――

逆に、ほんの少しだが、レキの感情を垣間見たような気がした。

ハッキリ表現してはいないが、今だって少し不機嫌そうな空気を流してるしな。

だから……きっと……

きっと、可能なんだ。レキを人間化して、リマ症候群を狙うことも。

そう思おう。そうとでも思わなきゃやってられんし。

（でも……じゃあ、どうするかな）

今はむしろ怒らせてしまったようだが、その逆にご機嫌取りをしなきゃ、リマ症候群は狙えないんだ。

俺が無言モードに戻ったレキの横顔を見て、腕組みしていると……

……。

……。

あ。

赤トンボがとまった。レキの頭に。

お前、虫にさえ地蔵か何かと間違えられてるぞ。少しは動いたりしろよ。

と心の中でボヤきながら、俺は赤トンボをリボンみたいに頭に乗せたレキを見て、ふとジャンヌの言葉を思い出す。

『そうだな――古典的な方法だが、贈り物で懐柔しろ。女性は服とかアクセサリーとか、身につけるものを男性にもらうと一気に心理的距離が詰まり、好意的になるものなのだ。仮にケンカした相手とでも、それで仲直りできるほどの効果がある』

……しょうがないから、ジャンヌの案を採用してみるか。

打つ手無しなんだし。

この間テレビで見た映画『プリティー・ウーマン』でもそういうシーンがあったしな。

しかし……京都にはそこは昔、兄さんと行った事があるからな。

どの辺にそういうものが売ってるか分からんぞ。

大阪に出るか。あっちゃありえん事だが……。

女子を買い物に連れていくなんて、俺にとっ

これもリマ症候群（シンドローム）のためだ。

教務科（マスターズ）のしおりにも大阪（おおさか）か神戸（こうべ）の都市部を見ておけと書いてあったし、一石二鳥だろう。

「レキ」

「はい」

「ちょっと大阪に足を伸ばすぞ。買い物につきあえ」

と言うとレキは、俺（おれ）を見てなぜか少し固まり、次にこくりとうなずいて――

俺には最近少し分かるようになってきたが、機嫌が直ったような空気を流し出した。

表情は無いが、ハイマキ風に言えば少しシッポを振ってるような状態だな。

なんだよ……俺が『買い物につきあえ』と言うと嬉（うれ）しいのか？　女は分からないな。

京都（きょうと）から大阪・心斎橋（しんさいばし）へは、電車で小一時間ってところだった。

ここは若者が集（つど）う、まあ、東京で言えば渋谷（しぶや）や原宿（はらじゅく）みたいな雰囲気（ふんいき）の街だ。

服屋やアクセサリーショップもあちこちにある。

レキにリマ症候群を起こさせる買い物をするには、京阪神（けいはんしん）ならこの辺がいいだろう。

しかし、地下鉄の駅からモグラみたいに出てきた防弾制服姿の俺とレキは……同世代の派手な服装をした若者たちから、浮きまくっていた。

「来たはいいが……分からないな。こういう街の流行とか、そういうのは」

半ば独り言するように言うと、
「私も分かりませんし」
レキにもそう宣言されてしまい、いきなり途方に暮れてしまう。
「……」
「……」
ネクラと無口で来るべき場所じゃなかったか。こういう所は、やっぱり。
（だが、これもレキにリマ症候群を引き起こさせるためだ）
俺は気を取り直して、賑やかな街に踏み出すが――資金も無いしな。
潤沢に、というわけじゃないが――資金も無いしな。
俺の銀行口座には7月に受けたカジノ警備の報酬が半額振り込まれていたし、夏休みの単位稼ぎで受けた任務の報酬も小額とはいえ武偵高から入っていたからな。
しかし……ジャンヌの言う『ブティック』みたいな店はあちこちにあるんだが、俺にはファッションというヤツが全く分からない。
女子、それもレキを喜ばせるために何を買えばいいのかなんて、見当もつかないぞ。
「レキ。お前、私服はどんなのを着てるんだ」
分からなかったので率直に聞くと、
「私服は持っていません」

「……制服しか持ってないのかよ」

「はい」

という予想のナメ上を行く答えが返ってくるので、ますますお手上げ状態になってしまう。

困ったな。じゃあ、レキを適当に歩かせるとかして。

マックで時間を潰(つぶ)すとかして。

いや……世間知らずというか常識知らずというか、レキはそういう人目当てって感じの男もいるし、レキを勝手に歩かせるのは危ないだろう。

この街にはナンパ目当てって感じの男もいるし、レキはそういう人なさそうだからな。カジノ警備でも、女好きの若社長とトラブルを起こしてたし。

というわけで俺はレキを連れて、あてもなく歩き出した。

犬も歩けば棒に当たる、だ。と、お供のハイマキをチラ見しつつ歩いていると……

げ。

この辺にも、東京武偵(ぶてい)高(こう)の生徒が少しいるぞ。

男子は俺と同じセーラー服を着てるからすぐ分かった。

あいつらも速攻で寺社見学を終えて、都市見学……というか遊びに来たらしい。

には大阪(おおさか)武偵高の施設もあるし、そこを拠点に動いてるっぽいな。この辺脂色(えんじいろ)の

またレキのことでからかわれるのがイヤだった俺は——

もうどこでもいいから服屋に入ろう、と周囲を見回す。
コンビニ、クラブハウス、猫のマークのカフェ……俺の視界に、そのどれでもない『シャトンb（ベー）』という女の子向けのセレクトショップが飛び込んでくる。
よし。ここに入ってしまおう。
と、勢いをつけて入ると――レキも、とてて。ついてくる。
ハイマキも、入口のマットでちゃんと足をふきふきしてからついてきた。
オシャレそうな店だけど、大丈夫かな。武偵2人が、オオカミなんかを連れて入って。
ここも猫の図柄をマークにしていた『シャトンb』の店内は……森をイメージしてるのか、棚やケースが全部木製だった。装飾も葉っぱとかツタ植物を意識してるカンジだ。
この雰囲気（ふんいき）は……悪くないな。
とはいえ野生動物は追い出されやしないかと若干不安だったが、日焼けした茶髪の女性店員さんは「いらっしゃーい、おーかわえーい！」などと、ハイマキに抱きついている。
よかった。ペットOKな店らしい。まずは一安心だな。
ハイマキもハイマキでシッポをフリフリして、イイ子ちゃん顔で店員さんを見上げてる。
空気読めるなーお前。そこのご主人（レキ）様にも見習ってほしいもんだぜ。
「――すみませーん。少し、耳を貸してもらえますか」

と俺が言うと「ん？」と店員さんが思いっきり俺に顔の側面を近づけてきたので、ちょっと引きつつ……

「俺は……ある事情があって、そこの女子に何か買ってやらないといけないんですが……彼女が喜びそうな物が分からないので、選んでやってもらえませんか」

餅は餅屋だ。『シャツ』『スカート』『パンツ』ぐらいしか女性用の服飾用語を知らない俺が右往左往するより、店員さんに頼んだ方がいいだろう。

と思って正直に事情を伝えると――お姉さんは、妙な笑顔を作った。

「事情って。兄さん、あれやろ？　外堀から埋めようってんやろ？　ガード固そうな子やもんなぁー」

うっ……この人、元・武偵か何かか？　よく分かったな。

リマ症候群を狙うには、敵の心理を外堀から埋める必要がある。そしてレキのような心理的なガードは非常に固い。それを突破するために、俺は買い物で懐柔しに来たのだ。

女子に狙撃拘禁されるヤツなんてあまりいないと思ったが、大阪武偵高も近いし、もしかしたらこの店は武偵御用達しの店なのかもしれないな。

「――実を言うと、そうなんです。なんとか解決したいと思ってるんだ、と俺が言うと――旅の恥はかき捨て」

「へっへぇー。このスケベぇー」
お姉さんは、ぐさっ、と肘鉄(ひじてつ)を入れてくる。
えっ。どういうことだよ。
なんでスケベ呼ばわりされてるんだ。俺が何でも買(こ)うてくれるってことだよ。
「よかったなーお嬢ちゃん。この兄(あん)ちゃんがなんでも買うてくれるってで」
でもしてやるんやて。
チュ、チュウっ。
な、なんだ。誤解されてるみたいだ。
お姉さん、すっごいニヤニヤしてるぞ。
「任しとき！　ウチはお客さんの雰囲気(ふんいき)に合う服を見つける天才なんや。ほなお嬢ちゃん、へへへ」
身長・体重を教えてんか。スリーサイズもな」
「150センチ、41キロ、76センチ、50センチ、73センチです」
「おーかわええなー、へへへ」
平然と答えるレジの顔しとるしなー。ダイヤモンドの原石やで」
「兄(あん)さんはそこのキの背を押して、お姉さんは店の奥へ連れていってしまう。
「は、はあ」
席でコーヒでも飲んで待ってってな」
コーヒとはコーヒーの事か？

こういうお店の勝手が分からないので言われるがままにテーブル席につくと、どうやらブチ抜きで繋がってるらしい隣の『シャトン・カフェ』から、猫マークのバッジをつけた別のお姉さんがニコニコとメニューを持ってきた。げ。コーヒー別料金かよ。

ていうか、いつの間にか俺が派手に買い物するような事言ってるし。

ここの人たちは商売上手だな。

何かのイベントを待っているらしく、セレクトショップ『シャトンb』の紙袋を持った女性と、彼女に服を買ってあげたらしい男が何組か紅茶やコーヒーを飲んで駄弁ってる。

耳慣れない大阪弁に囲まれて、ヨソ者の俺が手持ちぶさたに待っていると……

「どや」

と、さっきのお姉さんが連れてきた――

レキの姿に、コーヒーを飲んでいた俺は――

というのもそれは――

幼稚園児の、制服……！　を、大人用に作り替えた衣装だったのだ。

「な、なんだよそれ！」

紙ナプキンで口周りを拭きながら、俺は――

黄色い園児帽をかぶり水色スモックを着て無言で立っているレキは――

「エンッ！」とむせてしまった。

ご丁寧に『れき』

と書いた名札まで胸につけている。
い、いや、それより何より……おみ足がスゴい事になってるぞ。
なのか、驚愕のミニっぷりだ。股下1センチを切ってるぞ。
銃剣の鞘、ケンチラ（秘匿した刀剣の一部がスカートの下から見える事。命名・バカの武藤）しちまってるし。
「……」
レキは相変わらずの生きたマネキン状態で、突っ立ってる。
（な、なんて無愛想な園児なんだ……）
髪の毛もゴムで、本当に魔法でムリヤリ一回り大きくさせられた子供みたいだぞ。
「……？」
俺のリアクションに、レキは自分の姿を少し見回している。
ていうか……おまえ前もホイホイ着るなよ、そんなもん。
見る人が見たら泣いて喜ぶ格好なのかもしれんが、俺にはそういう趣味はないんだよ。
「兄さんー、ええ気がするんやー」
っぽい服が似合うといえば似合ってますが……こういうのじゃないの子、ミョーに子供
「た、確かに似合うといえば似合って下さい……

せめて、外を歩けるやつを……」

俺は……テープに突っ伏して、なんと「兄さん、これは夜用……？

パジャマにでも、夜用に役立つと思うでまあ……どうやらこのコスプレはネタだ遠出すると、いろいろあるな。園児スカートをヒラヒラさせて試着室にあ、お姉さん。試着室のカーテンはちゃ微妙にスキマがあって、俺の角度からだあんたは気を利かせたつもりかもしれなういうの。

園児服には驚かされたものの――

それも妙に似合っていた通り、店員のお次に彼女が「森ガールや」と称してレキ衣装だったが……これも似合っていた。違和感がない。

せて、外を歩けるやつを……」

俺は……テープに突っ伏して、なんと

「兄さん、これは夜用に役立つと思うで

パジャマにでもしろってのか。カゼひく

まあ……どうやらこのコスプレはネタだ

遠出すると、いろいろあるな。

園児スカートをヒラヒラさせて試着室に

あ、お姉さん。試着室のカーテンはちゃ

微妙にスキマがあって、俺の角度からだ

あんたは気を利かせたつもりかもしれな

ういうの。

園児服には驚かされたものの――

それも妙に似合っていた通り、店員のお

次に彼女が「森ガールや」と称してレキ

衣装だったが……これも似合っていた。違

和感がない。

せめ

その次は、理子が普段着ているようなヒラヒラしたフリルだらけのロリータ服（理子にしつこく教わって俺もようやく覚えた）。これは本来ブツ子してみたい女の子が着る服らしいが、レキが着るとアンティークドールみたいでハマってる。

しかしこれらの武偵的な観点からNGとなり……

最後に、店員さんが「次が本命や」と店の奥から出してきた服を試着することになった。サービスでメイクもしてくれるとの事で、レキとお姉さんは本格的に試着室に籠もる。

俺はシャトン・カフェの中を飼い猫が何匹も歩いている事にようやく気付きつつ、なるほど動物を入れてもOKだったわけだ、しかし衛生上いかがなものか、などと考えて待つが……

レキ、なかなか出てこないな。

コーヒーも飲んでしまいヒマだったので、俺はちょっと外に出て……ふとある事を思い出し、露天商からちょっとした買い物をしたりして時間を潰す。

シャトンbの店内に戻ると、

「……いやー、ホンマにダイヤの原石やったなー……」

と、何やら驚いたような声が試着室から聞こえてきて――

シャラッ、とカーテンが開いた向こうから、白いミュールの足が出てくる。

とこ、とこ、と店内に再登場したレキにハイマキまで、皆が視線を吸い寄せられた。

店員、シャトン・カフェの客、俺、そしてきちんと薄化粧をしてもらい、梳いた髪をセットして、白を基調としたノースリーブのワンピースを着たレキは――

（き、キレイ……だな）

素直に、そう思ってしまう。

そもそもレキの私服姿というものが新鮮だった事もあるが……

それを差し引いても、驚くほどの美少女っぷりだ。

元々作り物のようにに端正な顔立ちをしたレキは、お姉さんが言うとおりダイヤモンドの原石みたいなものだったのだろう。

こうやって服装や化粧で磨き上げられると、本当に目を引き寄せられてしまうな。

素材の一部に薄絹を使っているらしい白い布は、店内の光に晒されると身体のラインを薄い影絵のように透過し、透明感のあるレキのイメージをより強めている。

アリアがおめかしした時は女の子向けのファッション誌で表紙を飾れそうだと思ったが、レキも……そうだったんだな。

まあ、アリアはみんなが読む人気の大手ファッション誌で――レキはお嬢様向けの高級ファッション誌と載る雑誌は分かれそうなカンジだが。

「……」

それでも特に表情のないレキだが、流し目で満足げだ。

まあ、たぶん……これなら戦闘にも差し支えない、ぐらいの感想なんだろうけどな。

「えーそれでは願いましては、やな」

俺もレキも文句無さそうだと見たらしいお姉さんは、チョコレート色の電卓を出して値段を入力している。

「ワンピにミュールに……インナーが上下で、ほい。こうや」

……ぱかぱかぱか。

差し出された電卓の数字を見た俺は……

――うおっ！

拳銃を突きつけられた時のように、反射的に電卓を躱してしまう。

――た、高っ！

ユニクロとかで買う服の、10倍はするじゃねーか！

有り金がほとんど無くなって野宿になるぞ。そんなに払ったら。

こういう時、大阪では何て言えばいいんだったか。ベンキョーシテェナだったか。ちくしょうマカランカ、だったか。

ちゃんとこっちの言葉を習っておけばよかった。

「……」

それでも特に表情のないレキだが、流し目で満足げだ。

まあ、たぶん……これなら戦闘にも差し支えない、ぐらいの感想なんだろうけどな。

「えーそれでは願いましては、やな」

俺もレキも文句無さそうだと見たらしいお姉さんは、チョコレート色の電卓を出して値段を入力している。

「ワンピにミュールに……インナーが上下で、ほい。こうや」

……ぱかぱかぱか。

差し出された電卓の数字を見た俺は……

――うおっ！

拳銃を突きつけられた時のように、反射的に電卓を躱してしまう。

――た、高っ！

ユニクロとかで買う服の、10倍はするじゃねーか！

有り金がほとんど無くなって野宿になるぞ。そんなに払ったら。

こういう時、大阪では何て言えばいいんだったか。ベンキョーシテェナだったか。ちくしょうマカランカ、だったか。

ちゃんとこっちの言葉を習っておけばよかった。

神戸出身の武藤に

俺が、こっちも拳銃を抜くような手つきで、財布に震える指を伸ばした——その時。
「キンジさん」
お嬢様然としたレキが、きちんとリップをした唇で声をかけてきた。
「……？」
す、と流し目するようにレキの視線が動き——それを追うと。
『大好評！　本日15時より　シャトンb（ベー）&シャトン・カフェ合同イベント
☆　シャトン・コール　☆
優勝者には当日お買い上げのシャトンbの商品を全品半額キャッシュバック！』
という、色つきチョークで描かれた小さい黒板が置いてある。
腕時計を見ると、ちょうど14時55分。
顔を上げておねえさんを見ると、『気付きよったか』という顔をしている。
なるほど。このイベント狙（ねら）いで——『シャトンb』で服を買った男女の客が『シャトン・カフェ』で駄弁（だべ）ってたワケか。
「レキ、来い。お前も紅茶でも飲め」
俺は歩み寄ってきたレキから香るファンデーションの匂（にお）いに少し照れつつも、内容すら分からない『シャトン・コール』への参戦を決意する。
この割引きイベントが——俺とレキの、初の作戦任務（ミッション）になるわけだな。

情けない話だが、本気でかからせてもらうぞ。

こちとら野宿が懸かってるんだからな。

店員さんによればシャトン・コールとはこの店独自のイベントで、

歩いている猫を何匹自分のテーブルに呼び寄せられるか競うものだっ

制限時間は1分。席を立ったら失格で、手で猫を掴んだりしてもいい。

死ぬほど気恥ずかしいが、ここはなぜか誤解されている事を逆手に取ってレキと恋人の

フリを通そう。

『参加カップル名・キンジ・レキ』……と、俺は震える手で黒板に名前を書く。

今、俺の有り金はレキの紅茶代でさらに減り、さっき見せられた服代を下回っている。

どういうワケか、台場のラーメン屋でもこんな事があったな。

着逃げになりかねないと食い逃げならぬ

そういえばなんレキにこの服を与える流れ

レキは俺の財布を危機に陥れる星の下に生まれてるっぽいぞ。その

（しかし……猫を呼び寄せる、か……）

こんなの、訓練はおろか想定したことすらないミッションだ。

正直、勝算は無いぞ。

なぜかは知らんが、俺は動物にあまり好かれないからな。子供の頃から。どうする。

「それでは準備えでしょうかー？　はい、はじめ！」

そんな俺の緊張をよそに、カフェ側のお姉さんがマイクとスピーカを通じて宣言する。

店内にいた何組かの男女は、一斉に「おいでおいで」などと猫なで声を出したり口笛を吹いたりして猫を呼び始めた。

だが、猫とはそもそも警戒心の強い生き物だ。

店内をウロウロするだけで、見知らぬ人にいきなり懐こうとはしない。

「こ、来い」

と、俺も目が合った猫に手招きするが――

ちくしょう。店側もこれ、分かってやってるイベントなんだろうな。

全員失格っていう筋書きだろう。

待ち時間でコーヒー代を払わされてた辺りから、みんな罠にハマってたわけか。

「な、なんとかしないと……」

と焦る俺の向かいのですが、猫を集めればいいのですか」

「よくは分からないから、冷めかけの紅茶を前にちょこーんと座っていたレキが、

と、他人事のように聞いてくる。

「そうだ。だが、簡単じゃない。ここの猫はどうやら客に呼ばれてもされてるらしいぞ」

「……」

俺が小声で伝えると、レキはしばらく黙って……と1つ長いマバタキをし、相変わらずの無表情顔で——

「ニャーン」

と、言った。

……ニ……

……『ニャーン』……だ、と……？

聞き間違いじゃなかった。確かに言った。レキの口から出てきそうにない言葉・ベストテンとは言ったが、それはていうか……ニャーンとは言ったが、それはただいつも通りの平坦な発音で、『ニヤアン』むかし上野でアリアがやった鳴きマネの方がまでヘタな鳴きマネは逆にやれと言われてもできないだろう。

と、心の折れた俺が敗北を認めそうになった時……

3に入りそうな発話だぞ。レアすぎる。

鳴きマネのつもりか。

と言っただけだ。

、まだマシだ。あれも全然マネれてないぞ。

ヘタだったが、ここ

――ビクッ――
と、店内の猫たちが一斉に顔を上げた。
「……!?」
見回せば、一斉にこっちのテーブル――とわら……わらわら……
「なッ……？」
「えっ……！」
服屋のお姉さんとカフェのお姉さんが揃って声を上げる。
呆然とする俺のテーブルの下に――
猫たちが……1匹残らず集まってきたのだ……！
「レ、レキ、お前……」
「これで良かったでしょうか」
しれっ、と言ったレキの足元では……シロ、クロ、ブチ、トラ。
猫たちが、教祖に呼ばれた信者みたいに集っている。
しかも何か、ひれ伏してるっぽい雰囲気だぞ。
そ……そういえば、レキは……1学期にも、似たような事をやってたな。俺たちに敵意剥き出しだった銀狼に語りかけ、すぐ手なずけていた。それが、今のハイマキだ。

レキはどうやら、動物とコミュニケーションができる不思議少女らしい。人間とはできないくせにな。

さっきの『ニャーン』は……

きっと猫たちへの、「来なさい。来ないとひどいですよ」的な信号だったのだろう。

いや、この猫たちの服従っぷりからするに「来ないと、ムチをくれますよ。ハイマキを使った大音声で言わないでくださいよ。けしかけますよ」ぐらいの強いメッセージだったのかもな。

「シャ、シャトン、そんなスピーカーを使った大音声で言わないでくださいよ。ア、アベックって。

カフェのお姉さん、コールは――キンジ・レキのアベックがトップ・コーラーや！」

あんたらには言えないが、これは、カップルのフリをしてるだけなんだから。

「これからも仲ッ良くッ、愛し合うんやでッ！　うちらも応援するで！」

だからやめろっ！」

シャトンb（ベー）のお姉さんは「うちの姉妹は勉強しまっせ！」と言いつつ、他の客たちにもよく見えるように俺（おれ）に半額キャッシュバック券を手渡してくる。

これはこれで、この店の気（き）っ風（ぷう）の良さを宣伝してるわけか。商魂たくましいな。

ていうか姉妹だったのか、あんたら。

「はい、勝利のチュウ！　チュウ！　チュウ！」

と、シャトン・カフェのお姉さんはヤケクソ気味に言っている。
客たちもノセられて、「チュウ！　チュウ！」とチュウコールだ。
……しませんよ。あしからず。
「ま、まあ、なんとかなったな」
と、俺が財布をゴソゴソやりながら安堵の息をついていると――
「――キンジさん、愛想笑い一つせずのレキが――かたん、と立ち上がる。
皆の手拍子の中
「？」
「立って下さい」――
何だ？　と、俺が立つと――
すっ。
レキが、俺に避けるヒマを与えず距離を詰め、ダンスのように腰を抱き寄せてくる。
「お、おい……！」
レキの手つきは――見た目には分からないが――強い。
何か意図を持って、俺を強制的に近づけている。
とうとう俺の頬に唇を寄せたレキに、店内がワーキャーと大盛り上がりする。
その、周囲からは俺にキスしてるように見える動作をしたレキが――無声音で、囁いて

きた。

「尾行者がいます」

——なんだって？

「視線を不自然に動かさないでください。プロです。はじめは攻撃的ではなかったのですが、今、ハッキリと敵対的になりました。店外——入口辺りから監視されています」

「い、いつから……」

「キンジさん、さっき店外に出ましたか」

「あ、ああ」

さっき俺は、レキが試着室に籠もっている際に……

店外に出て、露天商からちょっとした買い物をしている。

「——その時からだと思われます。私がこの服で試着室を出た時にはもう視線を感じていました」

いました。この街に来た後、しばらく追跡されている感覚はあったのですが——その後、撒いたつもりでした」

俺たちに、尾行者……？

一体誰が……何のために？

と、俺は平静を装って席に戻り——コーヒーカップに添えられたスプーンをさりげなく

動かした。
探偵科（インケスタ）で習った、視線や顔を動かして犯人に悟られる事を防ぎたい時は、こういう……
鏡になるものを代用して、自分の周囲を確認するのだ。
スプーンの凸面に、その端にうまく映った店の入口には――
「……」
タイミングよく吹いた風になびいた、臙脂色（えんじいろ）のスカートと……
ツインテールの片方が少しのぞいた。
・ピンク・色の。
（――アリア？）
驚いて、つい振り返ってしまった俺は――
入口辺りから店内をコッソリ覗（のぞ）いていたアリアと、目が合ってしまう。
――ダッ！
なぜかこの世の終わりみたいな顔で俺とレキを見ていたアリアは、こっちに背を向けて脱兎（だっと）のごとく逃げ出す。
その瞬間、俺はなぜか席を立ち上がって――
衝動的に、店を飛び出していた。

「――待てよアリア！」
若者たちでごった返す道は走りづらかったらしく、アリアにはすぐ追いつけた。
「～～～～～～～～～！」
俺が掴んだ腕を振り払おうとするアリアは、言葉も出ないぐらいに興奮している。
何だ。何にそんなに怒ってるんだ。
「あ、あんたはいい！　あたしもハッキリ言ってなかったから！　でもレキは――レキには、ちゃんと話してたのに！　あの子は、し、知ってるのに！　あたし、レキにキ！　レキ――許さない！　レキなんか……レキなんか！」
興奮状態のアリアは、何を言ってるのか分からない状態だ。
ツインテールを振り乱し、ここにいないレキに対して一通り悪態をつくと――
「あんたも――いい加減あたしから離しなさい！　呉に行く前に、ちょっと機材を取りに大阪武偵高に寄っただけなんだから！　呉に理子と武藤剛気を待たせてるんだから！」
呉……広島のか？　それに、理子と武藤？　なんだそれ。かなえさんの裁判関連か。
そう問いかけようとした俺に、アリアは――
「あたしが忙しいのは――あたしが忙しいのは――誰のせいだと思ってんのよ！」
ごすっ！　平拳で俺の眉間を叩き。

「レキとアベックでびしっ！　足払いをかけ。
「お幸せにねッ！」
ぎゅむ！
一瞬でダウンさせられた俺の顔を踏んでいく、人混みの向こうへと消えていってしまう。
「な、何なんだよ…お前！」
叫ぶ俺に、ようやくハイマキが追いついてくる。
アリアが素早く退散したのは、これに勘付いたからか。
いや、それだけじゃないな。
なんとなく俺も感じるが――レキもどこかから、この様子を見てるのスコープで。
あの、ドラグノフアイツが、また。
その殺気で、アリアを追い払ったのだ。
ああ。修学旅行（キャラバン・ワン）Ⅰは、チームを作るためのハズなのに……アリアとレキ、そして俺は、逆に一層険悪になっちまったな。
――もう、修復不能なほどに。

4弾 閃光弾・音響弾

武偵憲章4条、武偵は自立せよ――に従い、武偵高の修学旅行では、宿泊施設も各自でバラバラに取るのがルールだ。

レキが夜もついてくることは間違いなかったし、それで同級生たちにからかわれるのもイヤだったので……俺は京都の北東、比叡山の森の方にある鄙びた民宿をネット予約してある。ペットを連れていってもOKと書いてあったしな。

小型バスで着いたドライブウェー沿いの、周囲に何も無い夜道に降り立つと……

そこにポツンと建つ民宿・『はちのこ』はレトロな外観で、個人的には気に入った。

普通の女子高生だったら「こんな古くさい所はイヤ！」とか言うんだろうが、武偵高の制服を紙袋に入れて提げてるワンピース姿のレキは……何も言わないから、気遣うことも なくて助かるな。こういう時は。

ガラガラ、と入口の戸を開けると、中からは意外と若い女将さんが出てきた。

「あらあら。おいでやすう」

「あ、えっと……ネットで予約してました、遠山です。２部屋予約していたんですが……ちょっとお金が足りなくなりまして、片方、安い部屋に変えてもらえますか」

と告げると……和服の女将さんは俺とレキをチラチラ見て……

「あらあらぁー、袖で口元を隠しながらふふふっ」

……？

「お客はん、それ、嬉しそうに目を細めた。

ふふふ、と上機嫌で言う女将さんに、俺は1部屋にしたらええやないですか。カノジョは彼女とかではないんでっ」

「い、いや、これ手をぶんぶん振る。

「彼女ですよ」

え。と振り返ると、横から口を挟んだのはレキだった。

「民宿の方が発言の主体で、それ以外でここにいる女性は私だけですから」

彼女ですから」

先生みたいな口調でズレた事を言ってくるロボット娘に俺が反論しようとすると、

「んもぉー、若いお二人は初々しくてええわぁー。沙織、あてられちゃいますわぁー」

女将さんは妙に少女チックな動作で、いやんいやんと体を左右に揺らしてる。

背後にある柱時計の振り子と一緒に、踊ってるみたいだ。

マンガで言えば自分の周囲にハートマークをぽわぽわ飛ばしてるカンジの女将さん――

沙織さんに、俺は、

「あ、いえ……コイツは少しアレな子でして……」

と、レキについての解説を試みるが……

「今日は他のお客はんもおらんさかいに、ええお部屋を使ってください。と御案内モードに入ってしまうのであった。

沙織さんはこっちに背を向け、ルンルン

案内された『西陣の間』は、畳も真新しい豪華な8畳間だった。

部屋名の通り、壁には色彩豊かな西陣織の反物がタペストリーのように飾られている。

絹布の前には人が入れそうなぐらいに大きな壺もあり、部屋の高級感を高めてるな。

凄く……いい部屋だぞ。良すぎるぐらいだ。

今風のシティホテルとかより和室の方が好みな俺としては、女将さんが最高級の部屋を割安価格で提供してくれた事は有難かったのだが……

問題は、レキが相部屋になってしまった事だ。

俺はここ数日レキの部屋で暮らしているわけだが、あそこは殺伐とした空間で、レキと『暮らしている』というより『作戦行動中』みたいなムードがしていた。

だから俺はなんとか自分をごまかすことができていたが――

旅先で同じ部屋に泊まる、となると、ムードが全然違う。

「……」
「……」
俺とレキは木製の座卓につき、さっそく女将の沙織さんが出してくる。うまいんだが、何を食ってるのか分からないぐらいに緊張してきたぞ。
（こ、困るな、こういう空気……）
俺と、レキ……なんか……
古い邦画とかによくある、『ワケありの逃避行をしてる恋人たち』ねえか。
ああいうのって大抵、いわゆる大人の映画で……その後、目を逸らして早送りしなきゃならんような……過激なシーンがあるんだよな。
あー……
（レキと2人だと、喋る事がないから……余計な事ばっかり考えちまうとか一切関係ナシにチラ、と前を見ると、正座したレキはお膳を右から左へ、口内調味もそもそ食べている。
いきなり白米を全部食べ、次に天麩羅を全部食べ、それから刺身、飲みするという最後に味噌汁を一気食育のなってなさだ。
「……」

食事を終えると、俺とレキは揃って電池切れになりかけていた携帯をテレビの上に置き、それぞれ持ってきていた充電器に繋げた。

携帯を手放したら、本当にやることがもう何も無くなってしまった。

「壁際に座ってろ」と命令し、反対側のフスマ際に寝そべった。

2人で黙っていると、リー、リー、と、障子窓の外から鈴虫の声が聞こえてきて……

秋の夜長の静けさを、より引き立ててくる。

「……」

レキは俺の命令通り壁際に座って、食休みなのかジッとしている。

……あの清楚な服を着てても、体育座りなんだな。

俺がそんなレキに背を向け、ウトウトしていると……

がらっ。

「失礼します」

俺の目の前のフスマが開き、廊下に正座した沙織さんが再登場した。

「――お食事、いかがでしたか」

「あ、はい、美味しかったです。ごちそうさま」

思いっきり油断していた俺が慌てて座り直すと、沙織さんは俺とレキの距離を見て――

『これはあきまへんな』という顔をした。

「お食事がお済みでしたら、お湯へどうぞ。温泉、貸し切りですよ」

お湯……？

がんばりなはれ、という顔を俺にしてくるぜ。この流れ。

イヤな予感がするぜ。

イヤな予感の通り、民宿に併設された浴場には『男湯』『女湯』の表示が無かった。

つまり、混浴、混浴、民宿に併設された浴場には『男湯』『女湯』の表示が無かった。

――混浴、温泉……どこか、丸裸で入っていくようなもんだぞ。

俺にとっては最危険区域だ。

イ・ウーのICBM格納庫に丸腰……

とはいえ今日は暑かったので、風呂に入らないワケにもいかない。

沙織さん曰く今日は他の宿泊客がいないそうなので、とりあえず敵（＝女）に囲まれる恐れは無いけどな。

「いいかレキ、絶対ついて来るなよ。絶対だぞ」

と、俺は部屋でレキに釘を刺してから――何となく、お笑い芸人が前フリをしているような気分になりながらも――温泉に向かった。

この民宿には、入浴中に沙織さんが服を洗濯してくれる有難いサービスがある。
ので、俺は洗濯カゴに服を入れて……がらがら、とスライド扉を開け……
誰もいない事を確認してから、岩と竹垣に囲まれたスノコを渡り、かけ湯をし、サッと体を洗ってから、温泉に浸かってみた。
（……）
これが……素晴らしく気持ちいい。
お湯の温度もぬるめで俺好みだし、何より一人になれたことで心底リラックスできる。
旅の疲れが、お湯に溶け出ていくようだ。
もわもわと上がる湯気の中で、俺は……旅先だから、はしゃいで時間を過ごす。
（武偵高のみんなはどうしてるんだろうな）
……などと、クラスメートの事などを考えて
何だかんだで、もう夜9時。
湯気の向こうに見える星が、キレイだ。
リー……リー……風流っていうんだよな。これ
という、林からの鈴虫の音。
ホー……ホー……
遠い森から聞こえるのは、フクロウの声だろう。久々に聞いたな。

そして、ガラガラ……ド扉の開く音。
という、スライド扉の開く音。
（……んっ……？）
ぱしゃ、というかかり湯の音。
ぱしゃ……ぱしゃ。
（……んんッ……!?）
そして、ちゃぷん、という——
誰かの爪先が、ソフトに湯へと入ってくる音。
——って！
「おい！」
ばしゃ！
つい立ち上がってしまった俺は、頭に乗せていたタオルが落ちてきたのをキャッチし、体——の一部を隠して、後ずさる。
湯気の向こうに見える人影は——
じょ、女子だ。
ていうかどう見てもレキだ。
温泉の脇の大きな岩に、ドラグノフ、立てかけてるし。

しかも、当然といえば当然だが――ハダカだぞ。
お世辞にも発育がいいとはいえない、中学生みたいな体格をしたレキだが……
湯気の薄い部分に透けて見えるボディーラインは、ちゃんと女の子のそれを描いている。
比べるのはいけないことなんだろうが……アリアより、身体の凹凸もある。
熟れきらないスモモやリンゴみたいな、腰回りや胸。華奢なウェスト。普段は陶器人形のようにさえ見える肌も、今は湯水の膜で艶々と潤み、ほんのり上気している。
「レ、レキ……！」
――レキは、ロボットなんかじゃない。
普段女子どころか人間らしくない印象を与えてくる分、こういう時、女。
と共に、一気に思わされる。レキは、女なのだ。
だが――
それなら、なぜ平然と俺とフロ人間だ。それもハッキリと……ある種の背徳感
遊びをしたがる子供同士じゃないんだぞ。
唯一の救いは……湯気のお陰で、3mほど離れたレキの身体が細部にまで入れるんだ。男女関係なくフロで水鉄砲
あとはこの不自然なまでに濃い湯気が、何らかの事情で消えないことを祈るのみだぜ。
「くっ、来るなって言っただろッ、なんで……」

俺がそう言うと、レキはショートヘアにふわりと包まれた小顔を「はい。そう命じられましたが――危険を感じたので、キンジさんいやだから一番危険なのはお前なんだっ問答無用で温泉に入ってきたレキに対し落ち着け……俺は再び湯船に浸かっヒステリアモードのトリガーは、つまるところ、心。心の持ちようッ……ハズだ！よし、一般論で、抑えることはできつで、抑えるんだ。入浴というものの本質を。そこに不健全な動機はない。ないのだ。考えるんだ。入浴とは体の清潔を保ち、心のストレスを取り除く行為。

「ま、守るって。何を、何でだよ……！」

俺はタオルを腰に巻き、決死の思いで湯船から上がる。

呼吸を落ち着けつつ、顔を背け、竹垣に沿って出口へ向かうが……

ちゃぱ。

こっちを向いたらしいレキが立てた水音に、びくっ、となってしまう。

「――良くない風の流れを、感じたのです。私から遠くに行かないでください」

良くない血の流れを感じた俺は、レキの言葉を無視して温泉を後にする。

深呼吸しながら、体の真芯・中央の具合を確かめると……
や、やった。セーフだ。ここも乗り切ったぞ。
レキは確かに、美少女だ。小動物みたいで可愛くもある。何となく
魅力だって持っている。
だが――俺は実績上、レキではヒ・ス・テ・リ・ア・モ・ー・ド・に・な・り・に・く・い・らしい。
その理由が何なのかは分からないし、一度はなったワケだから、警戒は怠らないけどな。
俺の肌着は、入浴中に女将の沙織さんがしっかり洗濯・乾燥してくれていた。
ありがたく制服を着直して『西陣の間』に戻ると、良くない血の流れがさらに強まってしまう事に……
とても大きなフトンが、敷かれてあるぞ。
それも、1・つ・だ・け。
そこにマクラが2・つ、仲良く並べて置いてある状態だ。
（沙織さんの仕業か……これ……！）
さすがに――いくら俺でも、この光景の意・味は分かってしまう。
慌てて押し入れを開けるが、中はカラだ。予備のフトンは入ってない。

（どうする……！　一難去ってまた一難だ。
どうするキンジ。俺は実にふんわりしていて
フトンもマクラを畳の上に寝させたら……罪悪感で胃潰瘍になるぞ
だけが入ってレキも入れてやるとなると、天国が地獄に変わる。
だがこれにレキをヒスりそうなぐらい、
考えただけで甘くヤバい行為だろう。それは
このフトンの端っこと、端っこに、分かれて入るか……？
俺はマクラを左右に分けて置き、脳内で2人が寝ているところをシミュレーションしてみるが……だ、だめだ。この距離じゃ、寝のC装備で寝るわけじゃ返り一つで大変なことになる。
枕元に置いてある寝間着は、浴衣なんだないんだぞ。
――浴衣は、危険だ。すぐ脱げてしまうからな。
しかも俺は比較的、寝相が悪い。幼児のころ星伽神社に泊まった際に浴衣で寝たことがあったが……起きたら隣で寝てた白雪・霧・風雪・粉雪（当時はまだ四姉妹だった）と知恵の輪みたいに絡まってたからな。その際、子供たちは胸も手足も丸出しになってた。
あれが今レキと2人っきりで再現されたら――
深夜もしくは明日未明、俺は本当に婚姻届を出さなきゃいけなくなるような重大事件を

起こしてしまうだろう。ヒステリアモードして。
そんな危険は冒(おか)せないぞ。
と、俺がマクラを片方持ち上げ、テンパグルグル周回していると……
――す。
と、こちらも制服姿に戻ったレキがフスマを開けてきた。
それまで気配を全くしなかったので不意を突かれた俺は、マクラを二、三度お手玉してしまってから……
「あ、いや、2人しかいないと、マクラ投げもできないな」
などと自分でもワケの分からない事を言いつつ、できるだけ平静を装(よそお)ってマクラを押し入れに収めた。
おい、手。震えるな。
とにかくフトンの件に話題が来ないようにしないと……と思ったと、これもどうかと思うようなわざとらしさで話題を逸(そ)らす。
「そ、そういえばハイマキはどうしてるんだ？」
一方、レキはマイペースで狙撃銃(そげきじゅう)を杖(つえ)のように抱(かか)え……壁際に、
「――室内にいます」
体育座りした。

「室内？」

いないから聞いたのに。

ま……まあいいか。とりあえずレキがフトンの話をするのは防げたし。

いたらいたで、俺に厭がらせしてくるしな。ハイマキは。

「……」

俺は軽くパニクっている事を隠しつつ、レキとは反対側の壁際に腰を下ろす。

これは……妙な絵になっちまったな。大きなフトンを挟んで、男女が左右の壁際に腰を下ろしてるなんてみたいじゃねえか。

（き、気まずい……逆に、この1つしかないフトンを凄く意識してる。）

気まずすぎるぞ。

本当に政略結婚をさせられた昔の人も、こんな感じだったのかな。

ていうか、レキは一体どうするつもりなんだろう。

このでっかいフトンが見えないわけじゃないだろうし。

だが、お前がいつも通り座って寝るんだろうし。

寝させてもらうからな。お前には悪いが事だ。胃潰瘍ぐらいバッチ来い。

「お前は、その……ここでも銃を抱えて、座って寝るのか？」

沈黙に耐えかねて、自分から切り出した俺は――

いきなり、切り出し方を間違えたことに気付く。
今のセリフは、俺がレキを誘ったようにも聞き取れるぞ。『そういう寝方はするな』→『だから一緒にフトンに入れ』などと曲解されたら、取り返しが付かない。しくじった。
だが、その懸念は取り越し苦労だったらしく……
「はい。常に敵に備えよと――風が、命じていますから」
レキはナナメ下の畳を見ながら、そう答えてくれた。
ということは……座って寝るんだな。よしよし。
流れはこっちに来てるぞ。
「風の命令か。それなら完遂してくれ、それも」
「はい。ただ……」
「……？」
「風は他に、2つのことを命じています。私はその1つを実行できていません」
「何だそれ」
俺が眉を寄せると、レキは――
音もなく、立ち上がった。
「風を守る、ウルスの子孫を作ることです」
「ウルスの子孫……？」

「キンジさんと、私の子供です」
「……！」
そ、その話を……返すのかよ……！
この状況で蒸し返すのかよ……！
レキは、とこ、とこ。フトンの上に歩いてきて——
天井から垂らされていた木枠の照明を、ぱちん。消した。
一気に暗くなった部屋の中、窓から漏れ入る星明かりに浮かんだレキの目が……きろっ。
俺に向けられる。
それに呼応するように、ゴトッ……！
掛け軸の下の大きな壺が倒れ、中から銀色の獣が出てきた。
は、ハイマキ。あんな所に隠してたのか。
ハイマキは俺をぐい。ぐぐい。レキの足元に追いやってくる。
「うつ……？」
強引に押して、
お、おい。やめろ。ま、マズい……って！
と思ったが、全然来てなかったぞ。流れ。

それどころか一気に大ピンチじゃねえか。俺。
前面には、しなやかなレキの足。背後ではハイマキがキバを剥いて
っていうか、こういうの。俺も詳しくは
……男と女が、逆じゃないか？　普通は。
「それと――もう1つ、私は命じられていないが、こういう『ムリヤリ強引に』ってのは
レキは急に声を潜めて、屈んできた。
な、何だ。
「――キンジさんを守れ、と」
言って、レキは――がばっ！
普段のレキとは思えない全力っぷりで、俺を押し倒してきた。
「ッ……！」
マクラのおかげで後頭部をぶつけることは無かったが、俺はレキに
上がれなくなるように覆いかぶさってきて、起きしがみつかれ、
レキが、俺の頭に自分の胸を押しつけるようにして。
俺がもう何だか分からず、真っ赤になった時。
ピュン――ビシュッ！　ガシャン！

空気を裂く音と、襖を何かが貫通する音――
そして、廊下の向こうの窓が割れる音が、闇の中に響いた。
「――!?」
ビシュッ！
ガシャン！　ガシャン、ガシャン！
窓ガラスの割れる音が、連なる。
がたんっ……度重なる着弾の衝撃で、障子の窓が外れて――
ビシュッ！　ビシュッ！
テレビの上に置いていた俺とレキの携帯が、精密に狙撃された。
その銃弾で更に、バサッ……！
破壊された襖が、コマのように回って倒れ――壁にぶつかる。
壁からは、飾られていた織物が流れる水のように室内に落ちてきた。
艶やかな絹の反物は縦・横・斜めに広がり、俺とレキの上に重なってくる。
「――狙撃です」
レキの声に青ざめた俺の耳に、
タァン……！　タァン……！　タァン……！

山の方からこだまする、遠い銃声が何発も聞こえてきた。
これは――今の銃撃の、発砲音だろう。
狙撃銃の弾は超音速。音より、弾の方が早く届くのだ。
今レキが俺を押し倒したのは――この狙撃から、俺を守ろうとしてだが……誰が、なぜ、撃ったんだ。
なぜ、俺たちを!?
「――レミントンM700。距離は2180m。山岳方面から撃ってきました」
発砲音から銃の型式や距離を見抜いたらしいレキが、淡々と告げてくる。
その数字に、俺は目を丸くした。
（……2180m……!?）
レキの絶対半径は、2051m。
東京武偵高のSランク武偵の中でも、最も長大な射程距離を誇ってだが、俺たちを撃ったのは、それを上回る腕を持つ超一流の狙撃手らしい。
しかも、装備はレミントンM700。
世界で最も信頼度の高い狙撃銃だぞ。そいつは。
「ここは危険です。敵から私たちの場所が分かりすぎている。野外に絢爛な織物をかぶったレキの下から、俺は這うようにして出る。

室内には、今の混乱で裂けたらしい布団から飛び散った羽毛が舞っている。

「敵って……誰だよッ。何で俺たちが狙われるッ！」

まあ、身に覚えは……無くは、ないけどな。主にイ・ウー関連でな。

だがイ・ウーの生き残りが動くにしちゃ、手が早すぎるぜ。

レキは俺の問いには答えず、布を振り払い――

ドラグノフのグリップを握って、闇に目を光らせている。

ロボットに填められたカメラのような、目を。

警察に電話している沙織さんを背に、狙撃手の死角になるような勝手口から――

俺とレキ、そして毛を逆立たせたハイマキが屋外に出る。

その時、どこからともなく。

「遠山キンジ　レキ　2人とも　投降しやがれ　です」

母音と子音を切り貼りして作ったような、人工音声が聞こえてきた。

（……!?）

これは……ネットで人気のボーカロイド。その姉妹版の声だぞ。

それに気付く俺の横で、サッ、とレキがドラグノフを空に向け――

タァン！

と、夜空に向けて発砲する。
漆黒の空に、小さな花火みたいなものが弾が俺たちの周囲に飛び散ってくる。
黒く着色されたラジコンヘリが、ドライブウェーの方に墜落していくのが見えた。
上空からは更に、バラバラバラッ！
レキの発砲に応戦するように、何発もの銃弾が降り注ぐが、間一髪、俺たちは撃たれずに済む。
「まだ他にもいやがるのかッ！　――沙織さん！　建物から出ちゃダメだ！」
携帯を手に出てきた沙織さんを、俺は慌てて屋内に押し戻した。
そこにまた銃弾が降り注ぐが、間一髪、俺たちは撃たれずに済む。
上空からの銃撃の狙いは――精度が悪い。
だが、数打ちゃ当たるという言葉もある。
いるせいだろう。反動で、狙いが定まってないのだ。
されたら危険だろう。
銃弾は雨あられと降り注ぎ、旅館の廂やアスファルトの駐車場に次々と傷をつけていく。
「――私は一発の銃弾――」
――タァン！　タァン！　タァン！
上空に狙撃銃を向けたレキが、3発。
駐車場から、闇を向けたレキが、3発。
駐車場から、闇を撃つ。

そのたびに空中に爆発が起き……煙の帯を引きながら、ラジコンヘリが墜落していくのが見えた。

「逃げたら　そこ」……と　沙織さん…を…破壊…るです　アハハ　アハハハハハハ」

途切れ途切れにだが……ヘリは、無差別攻撃を宣言してきやがった。

沙織さんを巻き込むわけにはいかないぞ。

まあ、元から逃げるつもりは――あまり、なかったけどな。

「ヘリはもうありません。旅館の陰から森に入り、回り込んで反撃しましょう」

ドラグノフを低く持ったレキの声に頷きながら、俺は……

この敵の襲撃に、一層不可解なものを感じていた。

ボーカロイドによる脅迫音声。短機関銃付きのラジコン。

この手口。忘れもしない。

4月に俺を襲った『武偵殺し』――理子の攻撃方法と、そっくりじゃねえか！

だが、これは理子じゃないだろう。

レキの絶対半径をも上回る、２１８０ｍからの狙撃。

これは狙撃の達人じゃないと絶対できない、超人レベルの離れ業なのだ。

犯人は子供の頃から徹底的に狙撃の訓練を積んできた、エキスパートに違いない。

理子が仮に狙撃銃を扱えたとしても、アイツの経歴から考えて、ここまでの専門家には

なり得ないのだ。
それに、何かの取り決めをしたワケじゃないが……理子とは今、一応、休戦中だ。そもそも理子のターゲットは『俺とアリア』のコンビで、俺とレキじゃないしな。
そして――
敵がその『俺とレキ』を名指ししてきたのも謎だ。
さっきはイ・ウーの残党による襲撃を一瞬疑ったが、もしヤツらなら……狙うとしても、ヤツらが罪を被せた神崎かなえさんを弁護するアリアか、シャーロックの仇――俺だろう。
レキはイ・ウー戦ではサポート役しかしてなかった。恨みが全く無いだろうとは言わないが、ターゲットとしての優先順位は極めて低いハズだ。
――分からない。
何者なんだ、この敵は。
なぜ、俺たちを襲うんだ……お前は!?
俺とレキは駐車場を抜け、木々の陰に身を潜めるようにして――
まずは林、そして、すぐその裏に続いている森へと入った。
湿度が高い。凹凸の激しい地面からは、土と、濡れ落ち葉の匂いが立ちこめている。
俺は初めのうち、不安定な足元に注意して視線を落としていたが……

（……暗い……）

森の奥に進むにつれ、視界が真っ暗になってしまった。

星明かりはあるが、それも森の中では木々に遮られて僅かしか届いてこない。

「レキ。もう少し――」

もう少し明るいところを歩こう、と言おうとした俺に――レキが振り返る。

そして口の前に人差し指を立て、『静かに』のジェスチャーをした。

……とりあえず言葉を飲み込み、俺が近づくと……

レキは背伸びして、俺の耳元に囁いてくる。

「声を潜めて下さい。敵は集音器を持っていると思われます。さっきキンジさんが旅館の女性の名前を呼んで警告した直後――敵も、彼女の名前を言った」

……そういえば、そうだったな。

ネットにも女将さんの実名なんか書いてなかったのに、ボーカロイドの声は『沙織』と名指しで呼んできていた。

俺は頷いて――

ハイマキを先頭に、無言でレキと森を歩いていった。

だが、こういう環境に慣れていない俺は……すぐに息が切れてくる。方向感覚も無くなった。木漏れ日みたいに差し込む僅かな星明かりを頼りに、ただ彷徨っているカンジだ。

一方、レキは息一つ切らさずに――何か、明確な目的を持って歩いているようだな。

「お前、どこに向かってるんだ」

足音をほとんど立てないレキに小声で尋ねると、

「さっきの敵の狙撃地点を元に、今、相手がどこにいるか推測しながら――こちらからの狙撃に適した地形を探しています」

「地形……」

狙撃手同士の戦いは……陣取り合戦のようなものだと聞いたことがある。

敵がよく見えて自分が見えにくい、そういう狙撃に適した場所を取った方が、圧倒的に有利になるのだ。

「お前、この山の地形をどう把握してるんだ。携帯……は壊されちまったが、お前、他にGPSか何かを持ってるのか」

「GPSの表示には誤差があります。私の記憶の方が正しい」

「でもお前、地図なんか見たことないだろ」

「さきほど旅館に向かうバスから、地形を見ていました」

……さすが、Sランク武偵だな。

バスの中で携帯の映画サイトを見てた俺とは大違いだ。レキはその隣で、ボーっとした顔をしながら周囲の環境をきちんと頭に入れていたらしい。

「……？」

ずぶ……と、足元がぬかるんだので……

ようやく気付いたが、どうやら俺たちの前には水があるらしい。

僅かな水音から考えて……浅い、川のようだな。

レキは夜目が利くのか、スタスタとまるで水を渡る妖精のように川を

どうやら、岩や折れた木があって、そのし上を渡れるみたいだな。

川の水に濡れて、これ以上動きが鈍ってもいけない。俺は強襲科で少

野戦訓練を思い出し、身体をうんと低くして足元の様子を窺いながら注

いく。こうすると、暗闇でも何があるか多少は見えるものなのだ。

苔むした岩や朽ち木を渡って、なんとか対岸までそこを渡ると……

とっくに渡りきっていたレキの影が、巨木の傍らで手招きしていた。

レキのそばまで歩み寄って、俺はクスノキと思われるその巨木を見上

大きく広がった根元はツタに覆われ、大地と一体化している。植物な

が、樹齢は……1000年以上だろう。森の主、ってとこだな。

この木の幹と根を盾代わりにして、戦うってわけか。

悪いな、森の主さんよ。こんなキナ臭い事に巻き込んじまって。

「で……どうするんだ。ここから」

俺は大木の根元に腰掛けると、腰から抜いたベレッタを一応チェックする。
まあ、何の役にも立たないだろうけどな。この戦いには――この銃も、この俺も。
「ここで待機・索敵し、狙撃の機会を窺います」
索敵……って。
こんな暗闇の中じゃ、何も見えないだろう。敵は俺たち同様、山の中にいるんだぞ。
「キンジさん、腕時計を隠して下さい」
「……何でだよ」
「夜光塗料で、敵に発見されるおそれがありますから」
「バカいえ。こんなの見えるかよ」
「私なら見える」
ウソをつかないレキに真顔で言われて、俺は……生唾を飲む。
敵は――レキと同等、もしくはそれ以上の優れた狙撃手だ。
本当に、こんなちっぽけな光さえも発見されかねないってことか。
「敵はおそらく、微光暗視照準器も装備しています。そうでなければ
ハズですし、あの距離から黒塗りのラジコンヘリは見えなかったハズです」
微光暗視照準器とは、狙撃銃などに取り付ける暗視用のスコープだ。
昔、俺も一度見せてもらった事があるが――

あれは本当に、星明かり程度の暗闇でも昼間のように見える。

「……お前のそれには付いてるのか、暗視機能か何か」

腕時計を外しながらの俺がドラグノフのスコープを指すと、ふるふるとレキは首を横に振り――

「このスコープが夜間用に搭載しているのは、ライティング・レティクルのみです」

ライティング・レティクルは……スコープを覗いた時に見える狙いを一応夜間照準ができるってだけの、原始的な装置だ。

無いよりはマシだが、微光暗視照準器が相手じゃ目隠しして戦うようなもんだぞ。

眉を寄せた俺の、足元で――

「……おい……」

ハイマキが、ぴく、と耳を立てて立ち上がった。

そして森の奥、暗闇の方を睨み付け……足音を殺して、歩いていく。

「……」

小さく声を掛けた俺を、ハイマキと同じ方向を見たレキが手で制止する。

……な、何だ。

何が起きてる。黙ってないで、説明してくれ。

――サッ！　と、ハイマキが風を切って走り出した。

フウッ！　という息の音は――ハイマキのものでは、ない。

「……!?」

俺の視界に、銀狼に飛びかかる黒犬が見えた。

あれは――前にアリアが見ていた動物番組に出ていた、闘犬用の犬――シャー・ペイ。

中国では猟犬や軍用犬にも使われる、獰猛な犬だぞ。それも品種改良種らしく、テレビで見たやつより遥かに大きい。人間の手足ぐらい、簡単に食いちぎれそうなサイズだ。

「――！」

慌てて拳銃を振り上げた俺は――ガツンッ、肘を思いきりぶつけてしまう。

ほぼ同時にレキが構えようとした狙撃銃にバランスを崩し、木の根に片膝をついた。

小柄なレキはバランスを取られ――レキを押し潰すように、躓いてしまう。

俺も、ツタに足！

――バスッ！

（うっ……！）

つんのめった衝撃で、単射にしていたベレッタから一発、地面にムダ弾を撃っちまった。

その間に――ハイマキとシャー・ペイは二つ巴の図みたいになって取っ組み合いを始め、拳銃では手出しができない状態になった。撃てば、ハイマキを誤射する恐れがある。

それなら威嚇射撃だけでも、と思って立ち上がろうとするが――うおっ。

今度は俺とレキの足が絡まって、木の根に逆戻りしてしまった。

「ッ……！」

何やってんだ、俺たちは。チクショウ。

レキと俺は――こうやって一緒に戦った事が、ほとんど無い。

強襲科で組んでいた頃もレキは遠隔からの支援係だったから、こう……台場でカジノ警備をやった時ぐらいだ。

やった経験は……一言で言うと、息が合わない。

（これが……アリアなら……！）

俺の脳裏に――問答無用で犬に飛びかかり、小太刀の峰打ちでボコにするアリアの姿が浮かぶ。勢い余って何発かハイマキもぶってるけどな。その横から、俺が弱った犬をツタで縛って捕獲する。そういう連携が、アイツとなら――できる気がするのに。

――バスッ！　バスッ！

レキは俺にのしかかられた状態から、ドラグノフを横に突き出して発砲した。

「！」

目の前を飛んだ薬莢とドラグノフが立てた独特の金属音に、俺は一瞬目を閉じた。

再び目を開けると……

黒犬が、急に弱っている気がするぞ。

「――ハイマキ、その犬を放しなさい。もう俺の下から命令するレキの声に、ハイマキは――ザッ、と土を蹴って後退した。犬から距離を置き、グルルルル……と、威嚇するうなり声を上げる銀狼から……黒犬は……ひょこ、ひょこ……と、逃げていく。

「……撃ったのか」

「はい。両脚を銃弾で掠めました」

「あの犬は……たぶん逃げるぞ、飼い主の所へ。そうしたら、こっちの隠れ場所が割れる。殺せって言うつもりはないがな、いいのか……それで」

「場所は、もうキンジさんの発砲音で悟られています。だから私も発砲しました」

……そ、そうか。さっき転んだ時の誤射で、バレちまったのか。敵は集音器を持ってるそうだからな。そうかもしれない。

レキの足を引っ張っちまった。

「気にされることはありません。あの犬は強かった。ハイマキは犬の爪で外そうとしていましたが――すぐには、犬についていた発信器と思われる装置だけを無理そうでした。あのまま犬の位置が不自然に停止し続けていれば、敵はここに勘付いていたことでしょう」

「発信器……」

俺には全然見えなかったが……そうだったのか。

疲れた感じでヨタヨタと戻ってきたハイマシャー・ペイとの戦いで、何ヶ所か噛まれて血で赤く染まってるぞ。

レキが言う通り、相当強かったんだな。あさらに、俺たちの場所を特定したことを報聞こえてきた。さっきの犬だろう。野太い、

「……移動するか。ここが割れたなら危険だと、歩こうとした俺のベルトを――

レキが、くい、と掴んで止めた。

「動いてはいけません」

「……なんでだ」

と、俺が眉を寄せると――

レキは、ポケットに入れていたカロリーメそして中身を抜き、空箱に足元から土をすくって詰めている。

「……何やってんだ」

と言う俺の横で、レキは、ぽい。

と開いた。

土を詰めたカロリーメイトの箱を、木の横に投げた。

――ビシュッ――!!

箱が弾(はじ)け、空中に土が飛び散る。

その光景に、俺の背筋が凍り付く。

狙撃(そげき)――された瞬間に、狙撃されたのだ。この、手のひらに乗るような小さな箱が。

「この木の左右に出た瞬間に、狙撃されます。もう私たちは動けないです。

……ダァン……。

レキの言葉に続いて、遠い、銃声がする。

「予想通り、敵は最初に旅館を狙撃してから移動してないようです。

私の射程圏(イン・レンジ)内でもあります」

「……2050m。

手も足も出ないから……カロリーメイトの箱を撃てる、狙撃手(スナイパー)か」

この戦いでは、お荷物でしかないだろうな。少なくとも、俺は。

仮にヒステリアモードだったとしても、どんな奴(やつ)なのかは全く分からないが」

「……強敵だな。

距離は、2050m。

「敵は確かに狙撃のプロだと思われます。性格は、極めて自信家ですね」
「……なんで、敵の性格なんか分かるんだ」
「今の箱を、撃ったからです。これは、撃つことで自分の現在位置を悟られても負けないという、敵によるアピールなのです」
「……」
「敵は同時に、最新の機械に頼る一面も持ち合わせている。極めて合理的な人物です」
「――よく分かるもんだな。だが、相手の性格なんか推理してどうする。銃撃戦は射撃の腕で決まるもんだ」
俺が強襲科的な意見を述べると、レキは、首を横に振った。
「狙撃手同士の戦いでは、相手の人格を読んでどう戦いに活かすのか分からないが……」
「人格……？」
そんなものを、分からないってことは、なんにせよ、俺はそこでも役に立たないんだろうな。
……仕方ない。
あの猟犬がまた来ないか、このハイマキと一緒に目をこらす見張り役に徹しよう。
と、俺が溜息交じりに木の根に腰掛けると――

「――長期戦になります。食事を」

レキが、今取り出したカロリーメイトのワケが、いま分かったぜ。

……なるほど。レキがこれば っかり食べる。

これは戦闘食に似てる。レキは――いつこういう持久戦になっても常にこの栄養食を携帯していたのだろう。

さすがは行住坐臥、寝てる時でさえ戦闘に備えてる子だよ。

俺は素人考えで、この木を背にまっすぐ否定されてしまった。

それも当然で、ここは――森の中。

木や岩を避けて少しでも左右に歩いた途端、俺の頭はさっきの紙箱安全なのはこの木の裏側、川岸あたりまでだ。

なので俺とレキはカロリーメイトを食べただ、大木の根元でジッと動かないでいる。

……10分……30分……1時間……

何も……しない。ただ、待つ。俺たちも、敵も。

2時間……3時間。

「――長期戦になります。食事を片方くれた。

レキが、今取り出したカロリーメイトのワケが、いま分かったぜ。

……なるほど。レキがこれば っかり食べる。

これは戦闘食に似てる。レキは――いつこういう持久戦になっても常にこの栄養食を携帯していたのだろう。

さすがは行住坐臥、寝てる時でさえ戦闘に備えてる子だよ。

俺は素人考えで、この木を背にまっすぐ逃げられないのかとレキに尋ねたが……1秒で否定されてしまった。

それも当然で、ここは――森の中。

木や岩を避けて少しでも左右に歩いた途端、俺の頭はさっきの紙箱みたいになる。

安全なのはこの木の裏側、川岸あたりまでだ。

なので俺とレキはカロリーメイトを食べる。

ただ、大木の根元でジッと動かないでいる。

……10分……30分……1時間……

何も……しない。ただ、待つ。俺たちも、敵も。

2時間……3時間。

時刻は0時を回った。
まだ夏と秋の間のような季節ではあるが
外気に体温が奪われていき、力が抜けて
ガタが来るのは、体だけじゃない。闇の
きて……それを振り払い続けているうちに
自分の精神力が、時間と共に削られてい
今まで——俺が経験してきた犯罪者との
敵が、見えて・いた。
敵が隠れていても、拳銃で炙り出すよう
だが、今の相手は狙撃手。敵が、見えな
のではなく、釘付けにされての耐久戦だ。
人間はそんなに長い時間、緊張感を保ち
だが、保たなければならない。
それが途切れた途端——命が危険に晒さ
……ちくしょう。
（これも……戦闘、かよ……）
こんな戦い、経験したことがないぞ。正
直、もう俺は限界に近い。

今すぐにでも、この場から――イチかバチか、走って逃げ出したい気分だ。

一方、レキは……微動だにせず、そんな俺の様子を見ている。

ハイマキは自分の傷をペロペロなめて、弱り顔をしている。

そうして、夜中も1時を回った頃――

「……」

まだか……まだなのか。

「……」

レキが、動いた。

スカートから取り出した銃剣を、ドラグノフの先端に着装し……

さらに、しゅる、と外した制服のスカーフを銃剣の先に結びつけてんなら、シャツを貸すぜ」

「……白旗を作るってんなら、ちら、と見てから……

空元気で冗談を言う俺を、レキは、ソーッ……と、木の横にそのスカーフを突き出していく。

横風が吹き、スカーフが木の外側にはためくと――

バシュッ！　バシュッ！

と、スカーフを何かが――銃弾が、勢いよく掠めていった。

数秒後に、また、遠い銃声がくぐもった音を轟かせる。2発。

――撃ってきやがったな。

向こうも大した精神力だ。3時間半、ずっとこっちを狙い続けていたのか。

「……同じ所から撃ってきたか」

「はい。旅館を襲撃してから、一度も移動してないようです。おそらく微光暗視照準器や集音器を集めた機械的な拠点があって、そこを動くつもりがないのでしょう」

「こっちに居場所がバレても、お構いなしかよ。全く、大した自信家だぜ」

「そのようですね。メッセージを送ったつもりでしたが、突き返してきました」

「メッセージ？」

「私の技術を示したのです。あの猟犬の左右の足につけた傷は長さ3センチ、深さ3ミリ、全く同じにしておきました」

立ち上がれば高さも……？　しかもちゃんと歩けるように、浅くつけたって事か。

さ、左右に全く同じ傷……？　しかもちゃんと歩けるように、浅くつけたって事か。

そんなの、ヒステリアモードの俺でもできないぞ。多分。

い……今さら驚くのも何だが……お前、どこまで神童なんだよ。

ぺら、とレキが広げて見せた防弾スカーフには……今の2発の銃弾がつけたと思われる×字の皺が刻まれていた。

鋭く交差する2本の直線は……全く、同じ長さに見える。30センチぐらいずつの。

――『そのぐらい、自分にもできる』。

そういうメッセージなんだろうな。敵からの。

「どうする。朝までここで粘って……やってくれるかどうか分からないがでもしてくれるのを待つのか」

と問うと、ふるふるふる。

レキは首を横に振って、

「そうもいかなさそうです。向こうが、決着を急いでいるようですから。ちら、と流し目するようにして森の方を見た。

何だ……何かいるってのか。また。

「キンジさん。私を使って、HSS――ヒステリアモードに、なってください」

な……

何……だって？

「この戦いの結果がどうあれ、今のあなたではこの森から逃げられないと思います」

「……ま、待て。ヒステリアモードに……って……お前、どこで聞いたんだ」

知ってるみたいだから言うけどな。なるためには……」

いきなり突拍子もない作戦を告げてきたレキに、俺は言葉を詰まらせた。

「――私は、何をされても構いません。あなたになら」

そう言って、レキは持っていたスカーフから手を放した。

闇（やみ）に浮かぶ臙脂（えんじ）色（いろ）のスカーフが、レキの足元に――

なにか深い意味を含むように、ゆっくり、落ちていく。

「時間はあまりありませんが、できますか」

ぴた……と、レキは大木の幹に背をつけた。

そしてそのまま、まっすぐ、俺を見つめてくる。

「時間……？」

「私はこれから、敵と撃ち合います」

「……！」

「私が即死あるいは負傷したら、放置していって下さい。その際、この銃からスコープを取り外して持ち帰って下さい。このスコープにはカメラが内蔵されていて、狙撃の瞬間、私が見ていた画像を記録できるようになっていますから――敵の姿を確認できます」

「おい……」

自分が死ぬような事さえも事務的に告げてくるレキに、俺は戸惑いを隠せない。

しかし、問答をしているヒマはない――という風に、レキは言葉を続けた。

「私は、狙撃銃用の武偵弾を3種類所持していますが、D・A・L弾は1発が100万円を下らないそれらは……イ・ウーで全てが銃弾職人による手作りで、超一流の武偵にしか流通しない特殊強化弾だ。

――武偵弾。

通常の銃弾とは異なるそれは、

兄さんが持っていた炸裂弾（グレネード）や閃光弾（フラッシュ）のほかにも、焼夷弾（フレア）・音響弾（カノン）などを、旅先に持ってきていたのか。レキは。

そんなものまで、偵弾を2発、発砲します。3発目は通常弾（ラシアン）を用いますので、それが終了したら――ここから、離脱を始めましょう」

「私はこれから武手短に伝えてきたレキが、そして銃弾を2発抜き出して――ぱちん。制服の胸ポケットから取り出した、別の弾倉（マガジン）と入れ替えた。おそらくそれがHSS……ヒステリアモードに――もう、時間がだ、だが。

「キンジさん。早くそっと弾倉を差し直したレキは何を感じているのか、俺を急（せ）かしてくる。

早く、って言われても。

「それでは予定を変えましょう。もう危険な距離です。私は必ず相手を仕留（し）める。その後、

「そんなこと、この状態で……」

と、俺が逡巡（しゅんじゅん）したその数秒の後……

レキが、その怜悧（れいり）な目を閉じた。

まるで俺に――『意気地（いくじ）無（な）し』、とでも言うように。

ヒステリアモードになっていただき……ここから離脱しましょう」
俺に有無を言わせずそう告げると、レキは木を背にしたまま――
「……私は一発のセリフを呟き始めた。
祈るように、例「銃弾」
「銃弾は人の心を持たない。故に、何も考えない」
かつて狙撃で支援を受けた時には頼もしく聞こえた、その声が――
「ただ、目的に向かって飛ぶだけ……」
今は何故か、俺の胸に不安感をかき立てる。
――レキ――
くるっ――と、スカートを翻してドラグノフごと回れ右したレキが――
木の側面に出て、銃を構えた。
バスッ！
即座に発砲すると、レキはすぐに回れ左して木の裏に戻ってくる。
そのレキを掠めるようにして、シュッ！　と反撃の銃弾が暗闇を駆け抜けた。
……！
一瞬、何が起きたのか分からなかったが――
今のは、本当にな、なんてヤツだ。

敵は、レキの姿を見た瞬間に発砲した。
両者の距離は約2キロ離れていて……M840m毎秒。
その発砲から着弾までは、約2秒半あるはずだ。
レキはその2秒半で、闇に潜む敵を発見し、発砲し、安全な木の裏まで戻ってきたのだ。
その事実に気付いた俺が、愕然とした時――
ぱぁっ……！
と、森の向こう側が一瞬明るくなった。
閃光弾（フラッシュ）……！
今レキが撃ったのは――俺がイ・ウーで使ったのと同じ、強烈な閃光を発生させる銃弾だったらしい。
きっと敵の周囲は、真夏の日差しの下のように明るくなったのだろう。
続けて、レキは再び同じ動作で――木の側面に出る。
バスッ！
2発目の発砲は……
――ギイイイインッ――!!
「うッ……！」

森の奥に、ここまで振動が届くような甲高い音を立てた。
――音響弾（カノン）。
通常は敵の戦意を喪失（そうしつ）させるために使われる、強烈な衝撃音を発生させる武偵弾（ぶていだん）だ。
（レキ……）
――分かったぞ。
レキが、何をやったのか。
1発目の閃光弾（フラッシュ）は、微光暗視照準器封（スターライト・スコープ）じ。
微（かす）かな星明かりを何倍にも増幅するタイプの暗視装置は、強い光に弱いのだ。
多分、向こうの――或（ある）いは、安全装置が働いて機能を停止した。
これで視覚を失った敵に、レキは2発目の音響弾（カノン）で追い打ちをかけた。
敵は、周囲の音を増幅・拡大する集音器も使っていた。それにヘッドホンか何かを繋（つな）いで耳をそばだてていたのなら、聴覚も無事では済まなかったハズだ。
「――敵の狙撃手（スナイパー）は、耳を押さえて苦しんでいます。単独犯で、観測手はいません」
スコープを覗（のぞ）き込むレキが、モルモットの観察をする科学者のように報告してくる。
（……なるほど……）
――狙撃手同士の戦いでは、相手の人格を読んで攻め方を決める。
それは、こういう事だったのか。

自信家の敵は、発砲によってレキを挑発した。その行為により、レキは敵を瞬時に発見することができた。

また、敵は機械に頼るタイプでもあった。

頼りすぎるきらいもあった。

レキはそこも突いて――機械で感覚を増幅していた敵の目と耳を、すぐには移動できないような拠点を作るなど、そうして今、敵の生殺与奪の権利をその手に握っている。

勝った……な。光と音で撃ったのだ。

「敵は――幼い、少女です。私より年下の……何だって？

……何だって？　しかも女――しかも年下だったのか。

狙撃手は、向こうも女――

信じがたい事だが……レキの言葉だ。本当なのだろう。

「射殺しますか」――

確認してきたレキに、俺は「ダメだ、武偵法を守れ」とだけ素早く答える。

「それでは、敵の武器を破壊します」――

バスッ！

鋭いマズルフラッシュと共に敵を狙撃したレキは、その直後――

（……？）

ばちっ！　ばちっ！

体の周囲で弾けた小さな光に、突き飛ばされたかのような仕草をしたレキのスカートが、ひらり。と、ひらめく。

その場で踊るように半回転したレキのぴしゃ、ぴしゃ、と、何かの液体がレキの足元に落ちた音がする。

「レキ……？」

……!?

何が……あった。

様子がおかしい。反撃されたのか。

いや。敵は戦闘力を奪われて、何もできなかったハズだ。

もし狙撃だったら聞こえてくるハズの銃声も、聞こえない。

「……」

レキは再び銃を構え、さっきとは少し違う場所を狙う仕草を見せつつ……

一歩、二歩、後退してくる。

「……」

レキが、声もなく——銃を下ろし。

そのままストックを地面に突き、それで身体を支えるようにしながら……

ず……ずり……

と、その場に崩れた正座で座り込んでしまった。

「……お……おい……！」

顔を伏せたレキを、俺が屈んで支えると、

「……！」

負傷して、いるの傷を手でまさぐって確かめると、物凄い出血量だ。

暗闇の中でレキを負わされたのに加えて、右前腕、左大腿もやられてる。

額の上部に重傷反撃をされたんだ。今の一瞬で。分からない……！　ウ

一体、どういうと、オオォーン……！

絶望的な気分でレキの傷を押さえている森の暗闇から、遠吠えが聞こえてきた。次々と。

俺たちの周囲、……10匹……いや、20匹はさっきのシャー・ペイと同じ声。それもらが包囲網を作って接近してきていたから、レキはそうか。こいつのドラグノフと銃剣を渡

「キンジさん。この音がする。

と、レキは自分その肘や額から血が落ち

ぽた、ぽた、とを追い払い、あなたを庇

「残念ですが、私は負傷しました。猟犬たいながら逃げる力は

もうありません。これで自分を守りながら、あなただけでも逃げて下敵は、きっと

すぐに態勢を立て直し……私に止めを刺します」
「何言ってんだッ。それならなおさら、おれ俺がドラグノフを押し返すと、
「まだ、炸裂弾（グレネード）があります。これは銃が無くても起爆できる」
胸ポケットから3発目、最後の武偵弾（ぶていだん）を出したレキの……言葉の意味が分かって……
俺は、歯ぎしりする。
――自爆するつもりか。
自分を仕留（し）めに来る敵を、道連れにして！」
「バカ言うな……」
「キンジさん、早く。包囲網を狭められたら、逃げる隙（すき）が無くなります」
失血し、顔を上げることすらできないレキが――
まだその場を立ち去らない俺を、急（せ）かす。
「私は敗北しました。敵より、弱い者が斃（たお）され、強い者がそれを血肉とする。それが自然の掟（おきて）です、キンジさん。ここに、そうかもしれないけどな。
それは……確かです、キンジさん。ここでこうしていたら2人とも
「合理的になるのは、あなた1人でも生き延びた方がいい」

それも……そうなのかもしれないけどな。

「キンジさん……私の事を気遣うことはありません。私は風が定めた生き、死ぬ。それで構わないのです」

人は――多かれ少なかれ、決められたレールの上を生きている。

それが妄想だろうが何だろうが、『風』はレキの世界における教条にとっての社会や、法律のように。

だからレキがそれに従って生き、死ぬというのなら、それもそれでいいんだろう。

――だが。

「レキ……こんな所で、誰だかも分からないヤツを相手に死ぬなんて犬死にじゃねえか……！　『風』の言うことばっかり聞いて、いっぺんも笑ったことも、泣いたこともなく……何の感情も持てないまま死ぬなんて、そんなのだろ！」

俺がレキのそばに跪くと、レキは――

ふるふる。

髪を揺らして、首を横に振った。

「キンジさん。私は先日……自分が『感情を抱いたことがない』とでも本当は……なぜか、あの時、あなたには言えなかった……私は……一度だけ、明確に感情を持ったことがあるのです……」

「……レキ……」

「私は……『風』に、男性を……強い男性を……そして、『風』が――キンジさんのものになれ、と私に命じた時……自分自身の、想いが生じたのです――」

レキは……

「――『相手がキンジさんで、良かった』と――感情を、芽生えさせていたのか。

仕草や態度で表現できないまでも、心の中に……自分の、自分自身の想いを生じさせていた。

ぽた、ぽた、と、地面に血を落としながらのレキが語る。

「だからキンジさん、私は、何の感情も持てないまま死ぬわけではありません。あなたが……気に病むことは、何もないのです……ウルスを永続させるための使命は、私の姉妹の誰かが改めて負うことでしょう」

レキ……！

「もう、私は――いいのです。自分に、初めて、想いを生じさせた人……あなたと共に、食事をした。あなたと共に旅をし、服を買ってもらった。僅かな時間でしたが、その間も……私は、きっと感情……私は……嬉し

かったのです……あなたと過ごした最後の2週間は、良い、日々だったのです……」

そう言って、レキは、血に濡れた顔を上げた。

その顔が――

ああ、今、初めて――

――笑って――

笑顔になって、いた。

「レキ……」

たぶん、俺がレキのことを安心して置いてけるようにと。

そのぎこちない笑顔を見た俺は――レキの事が、一気に分かった気がした。

レキには、感情が無いのではない。

レキは知らないだけなのだ。感情というものを。

心がまだ未発達なだけなのだ。ちょうど、子供のように。

俺がレキに対してヒステリアモードになり難かったのも、レキの心が子供のままでいることを……どこかで、察していたからなのだろう。

レキ。

敵は迫っている。

もうお前は戦えない。自分を置いていけ、と、ハッキリ宣言している。

もう俺は……逃げるしかない。一人で
「キンジさん……行って下さい……もう
声から力を失いつつ、それでも冷静な口調で言うレキの横で……
俺は銃剣をベルトに差し、ドラグノフを肩にかけた。
「レキ。確かに2人死ぬより、1人生き延びた方がいい」
俺の言葉に――
レキは安心したように、小さくうなずく。
もう、返事をする元気もないみたいだな。
「でもな――俺は数学が苦手だが、最適解がそれじゃない事ぐらいは分かるぜ」
「……？」
血に濡れた前髪の間から、俺を斜めに見上げてきたレキの腕を――
ぐいっ。
俺は力いっぱい、引き上げた。
「2人とも生き延びる方がいいに決まってる」
肩を貸すようにして立たせると、レキは――
そのアーモンド形の目を普段より少し見開いて、俺を見てきた。
今度は少しだけ、驚いたような顔をしてるな。

いいぞレキ。それでいい。
そうやって自分を出していけ。
これからの人生、もっと驚け。もっと泣け。そして——もっともっと、笑え。
そんな、血だまりの中に座り込んで見せる笑顔が——
最初で最後の笑顔であって、いいワケがねえんだよ！
「レキ。ダメだ。死ぬな。俺は見たぞ。お前は今——笑った。笑えたんだ、お前は」
レキ——お前はいまちょうど、成長を始めたところなんだ。
そんな最初の一歩を踏み出したところで、これからだ。これからなんだ。
お前の、風のドレイじゃなくて——人間としての、新しい人生は。
だから、死ぬな。
レキは初め抵抗するようなそぶりを見せたが……すぐその力すら失い、立ったまま気絶しつつあった。
ダメだ。もうレキは歩けない。
ドラグノフを背負っていた俺は、レキを両腕で、前に——お姫様抱っこで持ち上げる。
コイツが小柄で良かった。これなら何とか走ることぐらいはできそうだ。火事場のクソ力ってヤツでな。

ガサガサッ……！

猟犬たちはもう、その足音が聞こえるぐらいの所まで迫っている。

レキを抱いたまま逃げるか迷う俺の、ちょうど威嚇射撃もできず、どっちへ逃げるか迷う俺の

ふら……

と、白い影が歩み出た。

――ハイマキ。

さっきのシャー・ペイとの戦いで傷ついたハイマキが、立ち上がって低いうなり声を上げるハイマキは、全身の毛を逆立て、

グルルルル……と爪を剥き出している。

見えるほどにキバ

俺に背を向け、森の方に歩くハイマキは――

その忠誠心はいつも命がけだった。悍ましい

追い詰める時にも弾丸の跳弾台という危険な役

そしてそれは、今回もなのだろう。

ハイマキ。お前……

囮役を、買って

あの凶暴な猟犬

お前も――男だ

な。

出るというのか。

どもの群に、たった一匹で挑むというのか。

人も動物も関係ねえ。土壇場になったら
だからな。たとえ死のうと、やらなきゃな
半分だけ振り返った。ハイマキが、闇に光
その目は、俺を信じて——
行け。レキを、任せる。
と、言っているようだった。
「——ハイマキ。生きて帰れたら、魚肉ソ
言って、俺は——
もう、すぐそばの闇に無数の目を光らせ
吠え声を上げて、疾風のようにその群に
猟犬たちはハイマキに集中攻撃を仕掛け
レキを抱いた俺が、それで包囲網が手薄にな
飛び出す。
逃げる。
逃げるぞ。
全力で逃げてやる。
もう動かないレキを抱えたまま、俺は走
森の中を。がむしゃらに。

今の俺はヒステリアモードでも何でもない、ただの高校生だ。
だが、女の子を抱えて逃げるぐらいの事はできる。敵に背を向けてそれにな、レキ――俺はお前の『人間狩り』から逃げ回り、普段もてた。逃げる事だけは経験豊富なんだよ。だから安心しろ。
泥水の小川を何本か渡り、茂みに手足を引っかけ、ガケみたいな坂道を滑り降り、俺はズブ濡れの泥まみれ、傷だらけになって、それでも走った。もう、何も考えず。
恐らく山中では、まだハイマキが戦っているのだろう。猟犬たちを足止めしてくれてこない。撒けたみたいだぞ。
それに加えて俺が川を渡った事でニオイで追跡しづらくなったのか、犬たちは――追っ息切れしながらも走り続ける内に、視界が開け――
一面、秋桜（コスモス）が群生した広い野原に出る。
星明かりの下、一斉に咲いている花が薄紫色の靄（もや）のように見える。
「レキ……レキ！」
野生種の秋桜をかき分けるようにして進みながら、意識の有無を確認するために叫ぶが……
レキはもう、答えない。

その手足が、体温を下げていくのが分かる。

「……レキ……！」

俺は焦りながらも、一旦レキを秋桜の中に置いて――ベルトのワイヤーを引っ張り出し、ベルト裏のカッターで切った。そいつで、レキの前腕と大腿部を止血する。

俺はレキがまだ呼吸していることを確かめてから、顔を上げて周囲を見回す。どっちが街なんな小さな家でもいい。とにかく、病院に連絡しないと。

ああ、携帯さえも何でも呼べたのに。

圏内に入るなりは無い。どっちが街のかさえ分からない。とにここの周囲に灯もしかしたら、俺は街と反対方向に走っていたのかもしれなかった。

逃げてきたが……

その時――

ひら。

ひらり。

一匹の、蝶が……視界に飛び込んできた

アゲハチョウのようなそいつは俺たちの前で小さく旋回すると、ま

一方向に、飛び始めた。

その向こう、沢を越えた雑木林の向こうに――

ちら、と、光が見えた。眼を細めて見れば、光は幾つか……連なってる。あれは恐らく、道路の灯り。あそこまで行けば、車が通るかもしれない。だが、ああ……遠い……！　絶望的なまでに。そこから助けを求められるかもしれない。

（レキ……死ぬな……！）

俺はレキを再び抱える腕に、立ち上がる足に、全身全霊の力を込めた。

レキ、死ぬな。

俺はここに来てようやく、お前の事が分かってきたんだ。

お前の事が、ほんの少しずつ……理解できてきたんだ。

だから――伝えなきゃいけないことがあるんだ。

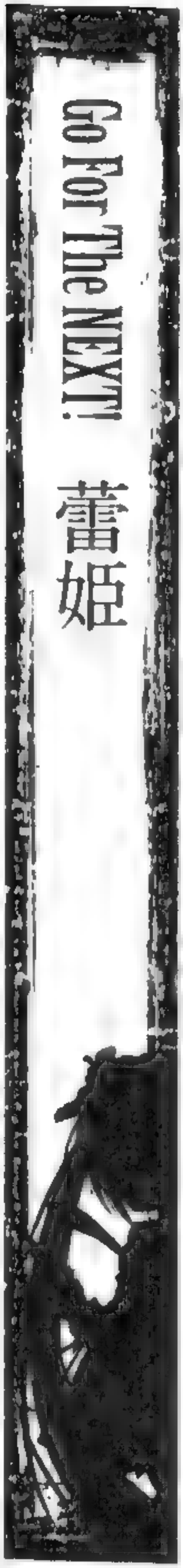
まだ、それを伝えてない。

だから、死ぬな。

死ぬな、レキ！

……

走り、走り、ついに国道に出た俺は――
その場に崩れるように膝を折り、アスファルトの道ばたにレキを横たわらせた。
「ハァ、ハァ、ハァ……！」
頭が朦朧とするほど、息が切れている。
――限界だ。これ以上、走れない。
体は元々、森に長時間いたせいで弱っていた。その体で、軽いとはいえ人を1人抱えて走り続けた。それに舗装されていない道を突破したことで、何倍も疲弊した気がする。
俺は両手も道路に突いて、荒い呼吸を繰り返した。
そこに……ひら、ひらり。
さっき秋桜の原を舞っていた蝶が、なぜか先回りしてきていて……俺のことを心配するように周囲を飛んでから、左手にとまる。
白くて大きめのそいつは、アゲハチョウのような模様に――星形の、紋がある。
どこかで見覚えのある模様だが……今は、観察してる場合じゃないな。
（――何でもいい、車は……来ないのか――？）



来たら武偵手帳で停めて、病院までレキを運ぶんだ。
坂道を街へと降りる形になっている車道は大きくカーブしており、て遠くまでは見えないが……今のところ、車の気配は無い。
チクショウ……仕方ない。
1分。1分だけ、俺の足が再び立てるようになるまで、ここで車を来なければ、再びレキを抱えて道を走る。
それでも車がは――背負っていたドラグノフを外し、スコープを見そう決めた俺にはカメラが内蔵されている、レキの言葉……
1分とはいえムダにはできない。さっきの、
『このスコープを覗き、指先でデタラメに狙撃の瞬間、私が見ているようになって、
それを思い出しつつ、スコープをまさぐると……下部に、細かいボタン
俺はスコープのラジコンヘリが見えた。
替わり、黒塗りボタンを押す。すると視界が照準眼鏡から切り
これは……さっき、民宿を襲ったヘリを撃った時のデジタル
俺は同じボタンを、カチカチと繰り返し押す。
ヘリの画像が4つ続いてから、画像は黒犬の足に照準を当てた写真だろう。
それが右足・左足と切り替わった後に見えた、その写真に――

（――！）

息が、止まりそうになる。

閃光弾（フラッシュ）、音響弾（カノン）、通常弾（ラシアン）――それらを発砲した際に撮影された3枚の写真に写っていたのは……レキが言った通り、少女だった。

それも――見覚えがある。

アリアと同じぐらいに長い、黒のツインテール。俺（おれ）を襲った時と同じ、派手な中国の服。

コイツは……香港武偵高（ホンコンぶていこう）からの、留学生。

「……ココ……！」

間違いない。

写真はかなり暗いが、3枚目では全身がハッキリ写っている。

あの始業式の日に俺を襲った通り魔の少女・ココが――木の葉で偽装した陣地から飛びロードバイク、CRM250ARに飛び乗ろうとしている姿だ。

出し、背後のオフロードバイク（グラップリング）で格闘戦で倒し、アリアと拳銃（アルミカタ）戦で引き分けて――）

（ココ……ヒステリア・ココが――木の葉で偽装した陣地から飛び

――狙撃（そげき）の腕は、レキに匹敵する……だと……？

そんな少女が、この世に存在していたのか。

いや、存在し得るのか。

格闘、銃、狙撃。それぞれ、技術を極（きわ）めるのには何年もかかる。俺たちの年齢……いや、

それ以下の年齢で、2つも3つもマスターできるものじゃないんだ。

「万能の武人――『万武（ワンウー）』の……ココ……」

ヤツが名乗ったその二つ名を、俺が呟（つぶや）いた時――

左方向……山岳方面から、微（かす）かなエンジン音が聞こえてきた。

ハッ、と顔を上げる。

――ビィイイ……車が来たのかと立ち上がる。

――ビィイイイイイ……！

次第に聞こえてきた、サイレンのような音に……

「……ッ！」

俺は、拳銃（ペレッタ）を抜いた。

ウワサをすれば影が差す、ってヤツか。まあ、今のは俺の独（ひと）り言（ごと）だけどな。

――あれは、オートバイの音。

それも素人（しろうと）でも聞き分けられるほどに甲高（かんだか）い、２ストローク機関のエンジン音だ。

それは今の写真にも写っていたバイク、ＣＲＭ２５０ＡＲにも搭載されている。

偶然同じバイクが通りかかったってワケじゃないだろう。２ストの単車は排ガス規制で生産されなくなり、もう市販されてないんだからな。

予想した通り、バイクを思いっきりバンクさせてカーブを曲がってきたのは――ココ。

「ココっ！」
俺はレキを守るような位置に立って、ベレッタを振り上げるが――
「きひっ！」
笑いながら、クンッ！　とS字走行したコを、照星で捉えられない。
次の瞬間、ココは急ブレーキを掛けながら俺を掠めるように擦れ違った。
「――！」
振り返った俺は、銃を……構えられない。
バイクを傾けて停止させたココが、数メートル後ろから俺へと銃を向けていたからだ。
それも、減音器つきのUZI――短機関銃を。
この状況……勝り、しかもアリアと互角に戦える拳銃戦の達人だ。
ココは装弾数でもない上に、重傷者のレキを守りながら戦わなければならない。
リアモードでも何手も足も出ない。
――悔しいが、
「手鎗、捨てるネ。胸のDEもヨ」
くいくい、とココが銃口で藪の方を示すので、俺はやむを得ずベレッタを――まだ使いこなせないデザートイーグル共々、仕方なしに捨てた。
「レキは――90点。いい駒だから、貰うネ。キンチは、やっぱり0点。でも戦績のいい駒。

好きネ。貰って帰るヨ」
「……貰う……何の話だ？」
俺は身動きが取れないまま、言葉足らずのココを睨み付けた。
「これから超能力者（ステルス）、みんな滅びる。お前らみたいな『ただの人間だけど強い駒』、早く手に入れておくの、良いネ」
「……？」
「それにレキは北狄（ベイディ）、キンチは東夷（トンイー）。中華の姫、ココの兵にふさわしいネ」
お前、もう少し日本語を勉強して出直してこいよ。
よく……分からないぞ。何を言ってるのか。
俺が混乱したような顔をすると、ココはふんと鼻を鳴らすような仕草を見せた。
「お前、私（ウォ）が取り立ててやるネ。曹操（ツァオツァオ）、孟徳（メンデ）、知ってるカ？　ココはその血統ネ」
「……知らん」
「曹操孟徳（そうそうもうとく）」
「……ああ」
「――リアクション薄い許さないネ！」
ぱしゅっ！
急に怒ったココが、空に1発威嚇（いかく）射撃をして――

その銃口を再び俺に向け、何かを命令しようとした……その時。

「……！」

何かに気付いてバイクを急に再スタートさせ、ぐりんっ！　ココはように一回りした。

そのココのツインテールを片方掠めるようにして、俺の前を――

――しゃんっ！

鈴のような音と共に、1本の矢が通過していった。

ココはバイクを操って、今の矢を躱したのだ。

矢が飛んできた方向からは……ワインレッドの車が、風を切ってこっちへ向かってくるのが見えた。

距離は、150m程。

（……あれは……！）

そのオープンカーの前部、エンジン・ボンネットに――人が、片膝立ちしている。

遠目にも分かる金色にきらめく額金。たすき掛けをした紅白の巫女服。手にした和弓に矢を番えるのは――星伽の、武装巫女だ。だが白雪じゃない。

京都には、星伽神社の分社がある。そこからの援軍らしいぞ。

その車を迎えるように、ひら……と、さっきの蝶が飛んでいく。
その光景から、俺は思い出す。
あの蝶は、ホトギアゲハだ。
子供のころ、青森の星伽神社で飼育されていたのを見たことがある。
当時は白雪たちがなぜあれを飼ってたのかと考えたこともなかったが、あれは……使い魔、というヤツなのだろう。
台場のカジノを襲撃した砂礫の魔女・パトラがスカラベ——コガネムシを自分の手先にしていたように、星伽の巫女は蝶を使うのだ。
きりきり……ひゅっ——！
スラリとした巫女が、2mを超える和弓から二の矢を放つ。
魔物を被うような鈴の音が再び上がり、鷹の矢羽を起こさせた。
盾にしていたバイクに突き立ち、ガソリン漏れを起こさせた。
——凄い腕だ。あの距離から……照準器も何もない和弓で、揺れる車の上から……
タンクに矢を命中させるなんて。
ぱすぱすぱす！
何発かUZIを応射したココは、すぐさまバイクに飛び乗ると——
「ココは代々、逃げる時は逃げるヨ。最後に笑えばそれでいいネ。再見」

ガソリンを垂らしながら車道を外れ、藪から木々の合間へと姿を消してしまう。
俺はレキのドラグノフを拾って、素人レベルの狙撃をしようとしたが……ダメだった。
もう、ココは見えない。
エンジン音も、どんどん遠ざかっていく。
なんて――切り替えの早い、合理的な奴・アンド・アウェイが平然とできるタイプは……。
あああいうヒットキの方に振り返ると――光岡自動車、ワインレッドの卑弥呼だ――が停車するところだった。弓を手にしたボンネットの巫女が、警戒するようにシートに座っていたのは、先月粉雪を迎えにきた美人の運転手と山岳方向を見ている。
ちょうどさっきの車――
「……キンちゃん！　何があったの……!?」
ホトギアゲハを指にのせた、白雪だった。
「白雪っ……助かったぞ。よく気付いてくれた」
「山の方で音響弾が何かの音がしたから、心悪い胸騒ぎがして……蟲術で様子を調べてたの。それと、キンちゃんに電話したら繋がらなかったから……私、私、ふぇ……」
涙目で車を降りてきた白雪は、無事を確かめるように俺に抱きついてくる。
そしてすぐ倒れているレキに気付いて「大変……！」と、傍らに跪いた。

「レキは――さっきのヤツにやられたんだ。すぐに病院へ――」
と言う俺と、立てた両手で口を押さえてた両目を見張る白雪の横に……
「蕾姫（レキ）――？」
小声で呟（つぶや）きながら、車を降りたもう1人の巫女が跪いた。
スラッとした美女に成長してたから一瞬分からなかったが……この白雪の妹の1人だぞ。1歳下の。
あれだけ弓矢でレキ並にクールな子だったが、相変わらずだな。
無表情な風雪が戦って、血まみれのレキを前にしても……顔色一つ変えてない。
「……そ、そんな、白雪に何かを耳打ちすると――
白雪が、慌（あわ）てて頷（うなず）いた。間違いないのですか？
こくり。振り向いている。
できれば聞きたくなかった、俺の婚約者の正体を――クールに、宣言するのだった。
「この御方（おかた）は源義経（みなもとのよしつね）様――チンギス・ハン様の末裔（まつえい）。大陸の姫君（ひめぎみ）です」
「風雪（かざゆき）は……」

あとがき

祝！『緋弾のアリア』・テレビアニメ化！

ついについに、テレビの中を元気に飛び跳ねるアリアに会えますよ！

キンジも白雪も、理子もレキも動きます！　しゃべります！　やったね！

インターネットで感想を書いてくれたあなた。いつもキャラクターのイラストを描いておはがきを送ってくれたあなた。そして、この『緋弾のアリア』を購読してくださった全てのあなたのおかげで――アリアたちは、命を吹き込まれるように動き始めます。

読者の皆さま、本当に、本当にありがとうございます。

そして……これからも引き続き、アリアたちをよろしくお願いいたしますね！

さらにこのⅥ巻を出させていただくと同時に、月刊コミックアライブで連載中のマンガ版・『緋弾のアリア』1巻も出版されます。

小説版を楽しんで下さった皆さんも『ああ、小説版のあのシーンはこういう光景だったんだ！』とアリアの世界をもう一度楽しめる、ファン必携のアイテムに仕上がってます！

赤松も買います。自作自演の箱買いですっ！

――さて、『緋弾のアリアQ&Aコーナー』の時間ですよー！

5巻のあとがきで本作への質問を募集させていただいたところ、皆さまからたくさんのご応募をいただきました！　うれしい！　今回はその中から、まずは1点お答えします。

Q：『5巻でいきなり制服の色が変わったのはなぜですか？』

よくぞ気付いて下さいました！　そして答えはズバリ、『衣替え』です。

東京武偵高の女子制服には冬服と夏服があり、赤い長袖のセーラー服が夏の制服なんです。夏は涼しくしないと、運動力が落ちますからね。

しかしこの夏服、防弾制服の表面積が減ることで防御力も落ちます。なので夏服を着ていいのは7月・8月だけ。常在戦場の武偵は、多少暑くても長袖でがんばってるんです。

べっ別に赤松が『赤もいいけどたまには青もね！』でもやっぱりメインは赤だよね！　くふふっ！』などとこぶいちさんに自分の趣味を無理強いしたワケじゃないんだからね！

……さてっ。ご質問はまだまだ受付中です。２６４ページにある二次元バーコードからアクセスできるモバイルアンケートのメッセージ欄まで、どしどしご応募くださいね。

ではまた、次の季節に本屋さんでお会いしましょう。陽気にいきましょ！

２０１０年４月吉日　赤松中学

6巻発売とほぼ同時に
コミック版アリア1巻発売ですよ！
こよか先生の描かれるかわいらしいアリアに
キーキー言われたい。

そしてアリアアニメ化だそうで
おめでとうございます！！

DVDレコーダー買っておいて
良かった＼(´▽`)ノ
正座してテレビ前で待機しようと
思います！

さて6巻ですがレキの可愛い面大爆発なので、
挿絵でも可愛く見えるよう
気合い入れました。

しかしアリアが少なくて寂しかったので
7巻ではアリアが活躍してくれると
いいなあ。

文庫6巻発売
&
TVアニメ化
おめでとう
ございます
イラスト：こよかよしの

MF文庫
J

緋弾のアリアVI
キリングレンジ 絶対半径2051

発行	2010年4月30日 初版第一刷発行
著者	赤松中学
発行人	三坂泰二
発行所	株式会社 メディアファクトリー 〒104-0061 東京都中央区銀座8-4-17
印刷・製本	株式会社廣済堂

©2010 Chugaku Akamatsu
Printed in Japan ISBN 978-4-8401-3281-7 C0193

※本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などをすることは、固くお断りいたします。
※定価はカバーに表示してあります。
※乱丁本・落丁本はお取替えいたします。下記カスタマーサポートセンターまでご連絡ください。
※その他、本書に関するお問い合わせも下記までお願いいたします。
メディアファクトリー　カスタマーサポートセンター
電話:0570-002-001
受付時間:10:00～18:00(土日、祝日除く)

＊この小説はフィクションであり、実在の人物・団体・地名等とは一切関係ありません

【 ファンレター、作品のご感想をお待ちしています 】
あて先:〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3-3-5 NBF渋谷イースト　株式会社メディアファクトリー
MF文庫J編集部気付　「赤松中学先生」係　「こぶいち先生」係

左記より本書に関するアンケートにご協力ください。

★お答えいただいた方全員に、この書籍で使用している画像の無料待ち受けプレゼント!　★サイトにアクセスする際や、登録・メール送信時にかかる通信費はご負担ください。　★中学生以下の方は、保護者の方の了承を得てから回答してください。